し御心さし、又すくれて、人みな哀におもひ奉る。召仕はれしわらはともと取きり、出家して、御骨を首に懸て行衞もしらす出にけり。其外めしつかはれし人々、ふかき思ひに引籠るも有、谷にまろひ落るもあり、哀なりしことゝもなり。また叟に異鏡坊昌澄といふ人有、をろかなれとも筆取わさをゑたり。辨公かの法師を召て天臺の四教五時の名目を書くべき由の給ひけり。その夏の比、此山に峯あり、神護慶雲元年に勝道上人この山を開白し給に、本宮と中禪寺南社をあかめおきたまひてのち、智光行者に密約し給ひ、かつらきのれいくつを寫しふみわけたまひけるとかや。弘法大師、其後、瀧尾のれい社を作り立、しな〳〵の佛そうをきさみ置たまふ。慈覺大師下りたまひて、新宮を建立したまひ、千手・彌陀・馬頭のれいそうをきさみたて、滿願寺といふ寺號をなし置、神殿にはほと〳〵の御たから物を納たまふ。かたはらにはまた文殊のれいそうを作り立、當山の寳祚を守らしめ給ひける。されは桓武・平城・嵯峨の三帝の勅願寺として、正一位准三宮日光山大權現と御神官まいらせたまひて、未來永刧まで人民のまもらせたまへとなり。扨昌澄法師、夏みねの先達にあたりて辨公へ返答しけるは、修行いなみかたし、出峯事おはりて書たてまつらんと申こひて、五月半に入峯して山林斗藪の行を立、樹下石上を宿とし、不惜身命に身

をなして一心不亂に修行しけるに、辨公うせ給ひぬと聞へけれは、すゝかけの袖をしほりける。されとも日かきりあれは、文月十四日に成就して、御はかにまいり、ふしなけゝ共、甲斐なく、翌日よりかのしやうきやうを書奉り、御墓におさめまいらせ、おろかなれ共一絶を佛前にそなへける。

　翰墨約君君別離　無親踈似有親踈
　莫嫌紙上斑斑色　進孝野僧滴涙書

その夕わか宿にかへり、なけきあかして、まとろみたりける夢に、辨公この聖教を開たまひて、御うれしけ成ける御顔はせにて、一首よませ給ひける。

　ふての跡見るとはしらしゆめの内もかはす言葉のためしなけれは。

とよませ給ひ、その夢にしはしもなくて明行そらにおほへけり。若やと目を開、あたりをうかゝひけれ共、跡かたもなく成にけり。昌澄法師かやうの哀ともにいさゝかなる身をうらみて、往生院といふれん臺に、弘法大師あみたのれいそうをつくり立て、妙覺門と額をあそはしける。いまにたへさる事共なり。或外典を見るに、一日安閑はあたひ万金と有、又大隱は朝市にかくれ、小隱は岩藪にかくるといへり。じかし只かのかたはらにすまゝほしく、在於閑處修攝其心いふ經文をさとり得て

方丈なる庵室をむすひ、朝夕にかの御ほたひをとふらいまいらせて、二六時中には法華妙典をよみ奉る。されは寂莫無人聲讀誦此經典とよみあけけるを、聞人おゐかにはせさりけり。辨公、或人の夢に、鹿嶋のみかくれの明神のかりに現し給ひ、あまたの人を發心せさせ給ふと、たしかにつけとも有けり。又ある人のゆめに一首の歌有、

戀しくはのほりても見よ、へんの石、われはこんしやの神とこそなれ。

黒髪山のいたゝきに辨の石といふれい石有。ふしの嶽の望夫石の古語をおもへは、事あひたる心地して、あらた成けることともなり。かゝる不思儀ともに人みな見いて、あるはかたり、あるはなけき、よしさらは人のとのふへきものは、彌陀の名號、ねかふへきわさは安養の浄刹成へしと、一度(マヽ)に不惜の阿彌陀佛を兩三反申て、目をとちふさき、袖をぬらさぬはなかりけり。

右一帖者、日光山中坊舍所傳寫之草子也。余羈在山中時、竜光院竪者法印天祐師、請使余書寫之、余拙揮毫、數請數辭、而歷年猶不輟、仍不能固辭、於是書以贈之矣。

元祿乙亥春三月六日

秋峯判

あしひき

中ころ、二代の御門につかへて、泗水の餘流をくめる儒林の隱士ありけり。菅原の家のかせたへさりけれは、一すちに廟神の靈鑑をたのみ、槐市の窓の雪をこたる事なけれは、法才のほまれかたへにはちさりけれとも、させる家領なともなくて、君につかへ、わたくしをかへりみるはかりこそ心にしたかはぬ事のみおほかりけるまゝにそ、孔門のましはり日にしたかひてものうく、佛道のつとめとしをおふてねんころなり。その中にも一人の子をもちたりけるのそみ、なをうき世のほたしと心くるしくなんおほえける。容顔もたくひすくなく、器量もいみしくみえけれは、我こそかゝるかけほしにてはつとも、これをひきたてゝ絶なんとする道をもつかせすたれなんとする家をもおこさむと思ひけれとも、九流をわたる心さしはあさく、五噫(い)をうたふ心のみたかくなりまされは、妙莊嚴王の二子の級引(きういん)によりて邪見の家を出けん事もたうとくおほえつゝ、いかならん僧房邊(のほとり)にもつかはして、出家修

學をもせさせて、後生菩提をとふらはれんとそ案し成にける。さてしかるへき所やあるとたつねけるほとに、ひえい山の東塔になにかしの律師とかやいひて、戒行年ふり修練日新なるたうとき人ありけり。弟子同朋なとあまたありけれは、いつれこそ法灯をもかゝくへきものともみえさりけれは、きりやうならん人かなと、内々ゑんにふれてたつねける。折ふしかの子息のめのとなりけるもの、つたへきゝて、かゝる事こそなん侍れと、父朝臣にかたりけれは、さる人おはするよしきくなといひけるを、律師もれきゝて、かの宿所にたつねつゝ、ねんころにいひよりて、こひけれは、領状して登山あるへき日なといひて、つかひはかへりのほりにけり。

律師山へむかへとりてみけれは、みめすかたのわりなきのみにもあらす、心操さへゆへ〳〵しく、よろつに心えたるさまなれは、ことはりにも過てをろかならぬ事に思ひける。うへは、坊中近隣の人〳〵も、さま〳〵にいつかたなくさめけり。たゝ詩歌の道にたくみなるのみにあらす、また管絃の方にも、其骨をえたりけれは、しかるへき天の授にやとありかたくそおほえける。さるまゝには志賀の唐崎氷とくる春の日は、さゝ浪よすると詠しけむ江都督の往事をしたひ、比良の高根に雪つもる冬の朝には、撥簾看とつくりけむ香山楼の景氣も思ひやられて、時にふれ、折にしたかふなさけむなしく過る事はすくなかけけり。

かくしつゝ兩三年もすきぬれは、出家の遲き事本意に背よし、父か方より頻にいひけれは、いましはらくはなとおもひけれ共、出家せさせて侍從君玄怡とそいひける。偏に修學のいとなみあるへきよし、律師も教訓すれは、止觀十乘の窓の中には、三諦即是の月をすまし、瑜珈三密の壇の前には四曼不離のはなふさをもてあそひて、螢雪讃仰の勤おこたる隙なく、論談決擇の道たれこそ肩をならふへしともみえさりけれは、なをも圓宗の教法なからへんとて、此人を同宿しけるよとそ、律師つねには悦ける。

この侍從ゆかりある人に對面すへき事ありて、葉月十日あまりの頃、白河の邊なる所に兩三日立入たりけるほとに、あるさよ深て、月いとくまなくて、心もそらにあくかれけれは、戴安道をたつねけん人の心もおもひしられて、庭に立出てうそふきありきける折しも、撥の音けたかく琵琶をしらへけれは、いつこなるらんと、耳をさゝむるに、いとちかき程に聞なして、聲をしるへにて尋行たれと、よしありてすみなしたる屋のうちに、しのひやかにしやうかうちして、引すましたる、秋風樂なるへし。ぬしいかならんと床しくて、かひはみありきけるさま、潯陽のいにしへの音も身に

じられてぞおほえし。やゝしはしありて、内の方より十三四はかりなる童の、おやしけにおもひて、門べいてたりけるを、程ふにこしらへすかして、此琵琶はいかなる人のひかせ給にかととひけれは、はじめはうちわらひて、返事もせさりけるを、猶念頭にたつねけれは、是は奈良に民部卿得業と申人のおはするか、この程人にものを仰らるへき事ありて、此宿所にたち入給へる、その若君にておはしますなんひかせ給といひけれは、いとあはれになつかしくて、さても御歳はいくつにならせ給ぞ奈良にてはいかなる人の弟子にておはしますぞなど、こまやかにとへは、童なにゆへにかくまては、たつね給らんと、あやしく侍とも、なましゐに申そめぬれはとて、歳は十四五にもやなり給らむ、奈良にては東南院の僧都と申人の弟子にておはするなりなど、えもいはすいひけるに、なをとりよりて尋けるに、むくつけうや思けむ、白河の關守はきびしきならひにて侍ぞとて、門をさして入ぬれは、ちからをよはて、じはらくたゝすみたりけれども、夜もいたうふけぬれは、かよふ道もかなとおほえて、其夜はかへりぬ。

次日またとなりなりける家によりてみけるほとに、簾の中より十四五はかりなるちご、ゑんにたち出たりけり。これはそよとみるに、すかたことからうちふるまひ

たるさま、かみのすちかゝりまても、なへてならすらうたきさまなれは、めもあやにそまほられける。いかにしていひよるへきたつきもおほえねとも、ひたふるにすゝむおもひをしるへにて、あしかきのひまをはかりて、ふとはひ出たりけれは、ちこはいとおもはゆくあさましけに思ひて、かほうちあかめて、すたれの中へ立しのひなから、さすかによしありてやおほえけむ、たちもさらすかへりみるけしき、みすよりすきてみゆれは、侍從、

玉たれのみすしらすともやおもふらん、はやくもかけし心なりけり。

とくちすさめは、若君きゝあへぬさまにて、

おほつかな、いかなるひまに玉たれのたれかこゝろをかけもそむへき。

といひて、まきらはして、なをすたれのそひに立たりけれは、侍從はゑんのきはによりすかりて、をかしきさまにいひよりけるも、おもてつれなくしら〱しくおほえけれは、いとそらをそろしくなり、となきさまにて立かへりぬ。

侍從里ゐも日數へにけれは、さのみはかくてもあるへきにもあらす、山へも歸のほるへけれとも、人しれぬもの思ひの花のいろふかくのみなり行は、よしなき人にしもみあひて、心をつくすよと、わりなくおほえて、とさまかうさまにおもひみたるゝ

折しも、ゐまちの月山のはをたちいつる程、しのひはつへうもなけれは、大かたの人もしつまる程に、かの所へあくかれ行たれは、さきにもの申たりしわらはの門にたゝすみたるに、みあひたれは、しかるへき事かなとおもひて、いひよりつゝ、若君はたゝ今いつこにおはしますそなとゝひけるほとに、戸ひらのかくれに人影のしけれは、侍従たちよりてみるに、はやこの若君なりけり。　うれしなとは中〳〵なり。　やかて袖をひかへて、かたらひよれは、ちこもおのつからかへり事なとして、いつこの人なれは、かくはしれかましくなといへは、おしひきのとこそ申たう侍に、まことや御袖をはなしかはひき侍らんと聞ゆれは、大かたの山の名はさしていつれとかおもひわき侍るへきなれと、中あしかるへき人にこそおはすれ、おそろしうも侍るものかなと、事をかしきさまにあひしらひ立たるに、いたうふけぬるこゝちすれは、月はすたれをかゝけてこそみ侍らめとて、侍従か手をひきて内へ入けれは、夢うつゝわきかぬるほとに、心まよひもせられけれとも、ひくてになひて、入ぬるのちにはたかひにあさからすそちきりける。　そのゝちは、くれことにまねき出して、管絃なとしてあそひけるを、得業ゆくへもしらぬ人には、いかになれ〳〵しくはなといひけれとも、侍従か事をもおろ〳〵かたりけるを聞て、誠にさてはくるしかるましき人にこそなといへは、のちにははゝかる方なく行かよひけるほとに、山よりさして申合すへきことあり、いそきのほるへきよしいひつかはしたりけれは、心つきなくはおほゆれとも、やかて下へきよしなといひてそ、侍従は登りにける。

山に登ても、白河の事のみ心にかゝりつゝ、なかめかちにのみありけれは、律師もたゝならすおもひて、いかなる事のありけるにかとあやしみいひけれは、やかても下りたくおほゆるに、これもみすてかたき事なれは、ちからをよはすして、四五日へぬ。なをもとゝまるへかりけるを、心いられをさへかたくて、よろつをふりすて、白河へくたりつゝ、まつかの宿所へ行て、このほとのいふせさなと、いつしかいはんと思ひけるほとに、人もなきさまになりけれは、こまかにたつねさせけるに、此ほとやとりたまひたりつる人は、此あかつき、はやならへ共下給ぬとこたへけれは、侍従は舟なかしたるあまのこゝちして、あえなくほいなき事いふもおろかなり。　さてもいつか又上へきとの給ひしと、をしかへしたつねけれ共、これにはしさいをしりたる事もなし。　此たひうはの空に立やとりたまひたりしはかりにてこそ侍れといへは、とかういふへきかたなくて、せんさいなる蘭女郎花の露をもけなるあたりにたちよりて、わすれかたき香ににほふなとうちなかめけるけしきを、やとのあるしもあ

はれにおもへるにや、歸りなんとするをよひ返して、若君のつかひ給ひし中童子こそ、あはれ山の人の御宿所はいつくやらん、御文のあるをまいらせはやとて、たひたひたつねられしかとも、これには御ゆくへもしりたる人も侍らさりしは、ちからなくてくたり給ぬ、山の人とはそれの御事にておはしましけるものを、なとやきのふおとゝひにても侍らさりけるといへは、いとゝかきくらす心地してそおほえける、一兩日は住京してならのたよりをたつねさせけれとも、聞いたしたる事もなけれは、さてしもあるへきならねは、山へかへりのほりける。　曉をすこさぬ月のかけさへうらめしくそ有ける。

卷 二、

若君は奈良に下つきても、立なれしおもかけのみわすれかたうおほえけれは、人しれすまたみぬ山のしら雲のみ、心にかくもてなれし其夜の月のかけをは、おもひ出らるゝ昔なと、さま〳〵思ひつゝくるまゝには、童を我かたによひすゑて、つねは白川の事をいひ出てなくさみける。　さるまゝには得業若君をよひよせて、さのみいかにかくてもおはするやらん、とくして僧都のかたへもおはせよかし、京におはするほとたに心もとなくこそ侍しになと、つねにいひつかはすめるはと、いはるれは、

いとすゝましからねとも、父のいさめのいなみかたさに、出たちて東南院の坊へそゆきける。

かたへのわかきものをみるにつけても、かの宿所にてなれにし事のみおりにふれて思出られけれは、日來にはかはりたるさまにやみえけん、僧都もやう〳〵にうらみて、なまとしのよりぬれは、何につけてもくねかせられてよなといひけるも、さらぬやうにはもてかくせとも、人のとふまてになりにけるよと、心中にはあさましうそおほゑける。　かくて長月十日あまりの月いとくまなかりける夜、庭にたち出てあそひけるか、思ひのこす事なかりけるまゝに、童にたにもかくともいはて、たゝひとりつき出て、都のかたへそたとりのほりける。　其夜のあか月からうして、宇治なる所まて、かゝくりつきにける。

宇治にて人の門たゝきて、宿をかるへきよしいひけれは、あるしあやしと思ひて、この里はさらてたに、人をとゝめ侍らぬうへ、旅のやとなと申は、日暮にこそかるならひにて侍に、月も西にかたふきて、わさとも急たつへき曉にしも、かくやはおほせらるへきと、ことの外にとかめいひけれは、いとはしたなうおほえて、いかにこたふへき心地もせねとも、さしてしのふへき事ありてなと涙くみいひけるけしき、たゝな

らぬ人のこゑと聞なしてければ、あるじやをら戸をあけてみければ、さかりなるちこのいとらうたけにて、露にそほちたる氣色なり。みるにいたはしくおほえて、いかなる鬼神成とも、なに事かはと思ひ成にけるにや、さらは入給へとて、うちへ入つゝ、いかにしていつくへおはする人にか、かくあやしくかちはたしにてなととひけれとも、くはしくもいはす、たゝ白河邊にしのひて、たつぬへき人ありて、にはかに出たりつるか、是よりすゑの道もしらねとも、いかにもしてたつぬへきよしなといひて、心くるしきやうにみえければ、あるじあはれと思ひて、さま／＼いたはりまかなひて、けふ斗はこれにてなんあしをもやすめ給へかしなと、ねんころにとゝめけれとも、いそきたつぬへき事ありてこそ、かゝるありさまにていてつれなといへは、あるじ馬くら下人にいたるまて、さま／＼沙汰しつけて、白河の宿所まてをくりければ、あまりにかたはらいたくありかたければ、中／＼いつくまても道にまかせて行へかりつる物を、此宿にしもなさけをかけられぬる事こそとて、かへす／＼よろこひて、をくりのものをは歸しつ。

得業のやとりたりし白河の宿所につきたれは、よろこひもてなして、奈良へ御下向侍しやかてその夕、山の人とかや申て、御行ゑをたつねまいらせられしかとも、はや御下のよしを申しゝかは、あへなく本意なき事におほして、つねにはたよりやあるとたつね給ひしかとも、いかにして、つけ申へしとも覺侍らさりつるに、うれしくなとかたりければ、さすかにそれも思ひいてけるよと、あはれにおほえて、かの人のありところやしりたるといひけれとも、いかてかはとこたえければ、その日は白河の宿所にとゝまりぬ。かくといひいてたらは、とかくいひあつかはんもむつかしうおほえければ、しのゝめもしらみ、よこ雲わたるほとに、あからさまにたちいつるやうにて、白河をいてゝ、大嶽をまかりて、西坂の方へそたとり行ける。宿所にはこはいつかたへそとてたつねけれ共、山へとはいかてか思ひもよるへき、いと心くるしき事にそさはきあへける。赤山の前を過て、大原のかたへかゝりけるか、法師のあひたりけるに、山へはかくのほるにやとゝへは、これには侍らすとて、鷺のもりのかたをさしてをしへければ、とかくたとるほとに、酉の始はかりに不動堂まてはゆきぬ。ひるは方／＼つゝましかりければ、草むらの中にたちしのひて日のくるゝをそまちくらしける。

九月中旬の事なれは、たかねのあらし雲を拂て、月もやゝほのめきいて、群源夕にたゝきて谷のけしきもものさひし、鹿の音、虫のうらみ我身ひとつにはかきらさりけ

るさ、あはれにて、道芝の露もなみたも所せけれは、棹鹿のつまこひにもひちぬへく、あさましきまておほえけるに、十四五斗なる童の前にたちて行けるを、よひとめておなしくは、あひともなひてのほらんとかたりけれは、童もうれしけに思ひて、此は東搭へ上侍也、それはいつちへおはしますにかといひけれとも、いつこやらんもしらねは、いかにこたへ侍へき心地し、(以下文闕く)物うくてなからへはつへき心ちもあらさりけれは、しのふ思ひの所せきぬる事をのみなけきけるか、修行になりとも出て、心をなくさめ、又奈良の方をもたつねんと思ひ成にけるか、多年すみなれたる山をはなれん事も心ほそくて、いま一度中堂にも参詣して、いさまをも申、法施をもたてまつらむとおもひて、心静に入堂しけるほとに、ある森のしたかけに、いさしのひたるこゑにて、

あをによしならひなき身の旅衣きても山路にまよひぬる哉。

たれとはしらすうち聞に、名におふ宮のふる事思ひ出られて、なつかしくおほえけるまゝに、たちよりつゝ袖をひかへて、たれとゝふに、きゝしりけるにや、手にしたかひて、なひくけしき、この若君とみてけれは、うつゝなるらむとは露はかりもおほえす、あまりにおもふ事なれは、夢にみるにや、こはいかなる事そと、心もいまた落給は

ぬに、君にそまよふとうらみたる様、心くるしくみゆれは、侍従もかきくときいはんとすれともなみたのみむせひて、ものもいはす、ちこもあはれにかなしくおほえて、そてをかほにをしあてつゝ、たかひになくより外の事はなかりけり。

さても夜をあかすへき事ならねは、侍従若公の手をひかへつゝ、我坊へ行ぬ。　かたはらに旅の具足なにくれとりならへて、たゝいま修行に出へきになむ有けるとみえけれは、はかなくて心をやりけるよと、うちうらみたるけしきもすこしたゆむやうにて、夜もすから日來の心くるしかりつる事なと、さま〳〵にいひてなきぬ、わらひしけれは、なかしといふ秋のよも、いとほとなくあけぬれは、律師早旦に侍従をよひて、此ほとはいかにとやらん、れいならす心くるしきやうみたてまつりつれとも、させるつゐてもなくていひ出さりつるに、老のねふりさめやすくして、つねに夜をのこすまゝに、今夜みゝをかたふけて聞つれは、何とやらんひきかへ心よけにものかたりし給つれは、うれしくこそおほゆれ、たゝしくはしき事はしらすなといへは、此事つゐにもかくるましき事なれはとおもひて、ありのまゝにかたりけるを、律師きゝて、これほとの事ありつらんとは、日ころも露おもひより侍らさりつるに、あはれにありかたかりける事かな、影はつかしき老法師、さためておもてふせにそおも

はるらめとも、とくして見參せはやと、ねんころにいひけるを、ちこにかくとなむかたりけれは、やつれすかたこそかた〴〵はゞかりおほゆれとも、兎角あらん事も中〴〵なりぬへれは、いかにもはからひたまはんにこそ、したかひたてまつらめと、うらゝかにいへは、なみたにむすほゝれたるねくたれかみなとかきなてゝ、侍從、律師のかたへいてゆきぬ。ならはぬたひのとをありきにおもやせくろみたれとも、なをなへての人にはにす、らうたきけしき、いとゝものなつかしうあはれにそみえける。律師さま〴〵にもてなしけるを、きんしゆの人〴〵したいにもれきゝて、いみしくやさしき事かなとて、あつまりなくさめにけるに、或時は管絃歌合のなさけある遊をしてをの〴〵心さしのふかき事をのへ、ある時はらんふ、延年の興あるわさをつくして、面々に感の切なる色をあらはしけるほとに、十餘日は何となくすきぬ。

卷三

東南院には若公の行かたもしらさりけれは、いそき得業の宿所を尋けれとも、是にもみえすといへは、あさましともいふはかりなし。たゝ事にはあらすとて、手をわけてそたつねける。得業とかく思ひめくらせとも、いつくにあるらむともおほえ

さりけるを、若公の童白河の御宿所にてあそはせ給し山の人をこそ、常におほせられ出して、行衛をも尋はやとは侍しか、もしさやうの方へもやおはしたるらんといひけれは、若君のめのとにて永承坊上座覺然といひけるもの、さらは山へのほりてこそ、谷〴〵をもたつねまいらせめとて、行けるか、西坂にて人のあひたりけるに、かゝる事やもしきゝ及たまひたるといへは、しか〴〵の房にこそゆゝしく申あひたる事はあれといひけるを、くはしくたつねきゝて、侍從君の房へ行ぬ。わかき人とも是を聞て、大衆おこりなとして、奈良へ返したらむにをきては、本坊にとかすへきよし度々いひをくりけり。しかはあれとも得業の心くるしく歎よし、侍從にかきくときこしらへて、このたひ御下ありとも、やかて又こそ御上候はめといへは、律師も聞て、得業の心をたかへては、中〴〵後あしかりなん、たかひの心さしのあさからぬ事なれは、あからさまに下たまへりとも、いそきかへりのほり給たらは、方〴〵よくこそ侍らめ、さらは侍從公奈良まてつきたてまつりて、得業の見參にも入て、此よしを申さむに、よも異議あらしなむと敎訓すれは、若君も侍從もおなし心に、おほえけれは、便宜の大衆なとにこゝろえさせて、奈良へ下らんとしけるに、若公をは律師さま〴〵にいたしたてゝをくりけり。侍從もあひしたかひて、ともに奈良の房へ

そつきにける。

奈良にゆきつきたれは、得業ことの外によろこひつゝ、いかにせんともてなして、いさゝか人に物申あはすへき事ありて、白河なる所に立入て侍しころ、をのつからおさなきものに御目みせらるゝよしうけたまはりしかとも、させる次ても侍らさりしかは、さてやみにき、山まてわりなくたつねたてまつりけるこそ、志のほともあはれに侍れ、かくとしりて侍らましかは、子を思ふやみのふかきにつけても、我こそいかにもたつねまいらすへかりけれなといへは、侍従若公に志のあさからぬ事はつみふかきまてにおほゆれとも、さすかにかたはらいたくて、さのみはいはれすそありける。　坊主の律師もあひかまへて、始終御住山あるやうに御はからひあらは、いかに冥慮にもかなひ侍なんと、能々申へきむねをこそ申つれなと、かたりけれは、其事はともかくも、おさなきものゝ心にまかすへしといへは、ちこは障子の内にて立きゝてうれしけにてそ有ける。　さて得業うちへ入て、いかゝあるへきといはるれは、しかるへき事にや、住山の心さし切なる由を、こま〳〵とをとなひいひけれは、さらは其儀にてこそあらめと、はからひ成ぬ。　侍従をは兩三日とゝめをきて、事から心操なとさらぬやうにてみけれは、ことにふれてよしあるやうにて、思ひます事の

みあるに付ても、此兒かおもひつきけるは、ことはりかなとそおほえける。　さるまゝにいとゝ住山相違あるましきおもむきなれは、返々よろこひて、山より迎にたてまつるへき頃なと約束しさためて、侍従は歸のほりぬ。

東南院には若公のいてき給へる由きゝて、いそき迎とらむとしけるを、山の約束のころもちかくなりけれは、いて立の程もとて、をりふしいたはる事のあるよしをいひて、僧都のもとへはつかはさゝりけり。　山にてつくへき童をくりのものとものゝ裝束なにくれまてとゝのへをきて、いまは迎に來らむとまちけるに、此若公のはゝうへにて有し人はみまかりて年へにけれは、得業まへちかくつかひける青女はうをなんひきあけて、つまのかたさてありけるか、若君のいみしく出立てのほらむさするを、そゝろに心やましくめさましき事に思へりけるあまりに、ある夜、若君のふしたるかたへしのひやかにはひよりて、もとゆひのほとよりかみをふつときりてけり。　夜あけてかゝるあさましき事ありとて、得業をはしめとして、さはきなけとも、いふかひなき事にてそありける。　今は山へのほらむ事かなふましきさまになりぬれは、中〳〵に迎のものにとかくいはむをきかせむも口おしくて、身の有さまの心うさかなしさのあまりにや、日のくるゝほとに、奈良の坊を出て、いつ方ともな

く行ける程に、山臥の熊野へまいるにゆきあひて、やかて熊野へともなひて行けるか、つねはこし方の事をのみおもひ出て、

くろかみのいふかひもなく成にしは、世をおもひきるはしめしなりけり。

山にはかゝる歎のあらむとは、いかてかはしるへきなれは、約束の月日ちかつくを心もとなく思ひつゝ、法師原童部なと出したてゝつかはしたれは、得業侍從公の文をひらきみけるより泪もかきあえさりけれは、使あやしみて内々うちのものにたつねけるに、若公は過ぬるころ上郎に御くしをきられさせたまひたりしかは、上にも下にもあさましき事かなとなけき侍し程に、其事を心うくおほしけるにや、あまさへいまは御行衛をたにしらぬ御事に成て侍れは、とにかくに御なけきの外は他事なきよしをいへは、迎のものともあはれさいふはかりなくおほえて、あきれたてりけり。　さらは御返事をなりとも給て歸らむといへは、得業泪をおさへなから、事の次第をこまやかにかきてそたまはせける。　使かへりのほりけれは、ちこははやのほりたまへるかと、人〲尋あひける程に、文をひらきてみれは、かゝるいふかひなき事とみえけれは、侍從はこはいかにといひけるほかは、ものもいはすして、ひきかつきふしたりけれは、律師もおほきにおとろきて、いかにや〲といへは、なく

〲おきあかりて、得業の狀をそみせける。

此ちこの外はまたたのむへき子息もなかりけれは、歎にしつみて、得業世間の事もいろはす、ひきかつきたり。　さるまゝには、つまのかたよろつみな我心にまかすれは、しえたる心ちして、父もしらぬひとりむすめをなんかゝへもちたりけるを、姬君の御方とて、いつきかしつきつゝ、寺うちの惡黨に鬼駿河來鑒といひける僧をむこにとりて、得業いかなる事もあらん時は、跡にをきては我むすめの手ににきりて、鑒の僧に管領せさせなんとて、内々はさゝやきつふやきける。　内のもの共の中にも、心あるほとのものは、いかになるへき世中にかと、面々に安堵おもひはなかりけり。」

侍從は得業の狀をみたりしより後は、ふししつみたるさまなれは、しはしはことはり成とも思ひけるほとに、次第に身もおとろえて、事の外に氣よはきやうにのみ成行けれは、たゝことにはあらし、かゝるものおもひをたよりにて、病なとのつきけるなめりとて、律師ももてさはく事かきりなし。　山にては療治も心にかなはぬ事のみおほきうへに、父のかたよりもいかにもしてたすけ下て、醫師にも見ゆへしなとありけれは、京に出て、陰陽の家にたつね、醫師の術をつくせ共、さして云出しつくろひやめたる事もなくて、月をへてはよは〲しくみえけれは、母めのとなとのなけ

きあへるさまはことはりにも過たり。心のうちには何の病かはあるへき、一すち
に此歎のつもりにこそはと思へとも、かゝるすちとはいかてかあらはすへきなれ
は、あらぬさまにこたへなす事のみ侍けるを、邪氣なとのましりけるにや、誠に所の
法燈とも成ぬへかむなれは、魔緣もさまたけをなすへきわさにやと、ちゝ毋もてな
やみて、護身なとをもせさせてみはやといはれけれは、侍從は何條さる事か侍るへ
き、かつはをめ〳〵しき次第なるへし、しかるへき事にこそは侍らめとも、いまとも
かくもなる樣もありなんなといへは、淨行の身なれはなんと思給にや、たうとき僧
も驗者をもちゐる事むかしも今もためしおほくこそ侍れ、されは空也上人のひち
のおれ給へりけるを、智辨僧正に祈なをされ、玄昭律師の邪氣のおはしけるには淨
藏貴所の驗をほとこすなとこそは申めれ、ゆめ〳〵其憚おはすへからす、就中に此
ころ世にやいはの驗者と聞へたる人をりふし京にあむ也、彼人は大峯の大先逹な
る床の一和尙にて、那智巖窟の參籠もとしをへ、諸國靈驗の斗藪もかすつもりて、飛
鳥もおとすなるたうとき人と聞ゆるあり、たゝ我(以下闕文アルカ)ものせんにておはすへ
しとありけれは、父のこれほとにの給はからはん事をかたくいなひ申へきにあら
ねはとて、この山臥に見參しけるに、まことに其氣しきをみるに、ひけ髮にしらかま

しりて、久修練行功つもりたらんとおほゆ。 昔の役の行者もかくやとおほえて、邪
氣も魔緣もよりつくへくもなきさま也。 弟子とおほしき山臥としいまた廿にや
たらさらん、しなやかにものなつかしきか、かみかたのまはりにふさやかにて、衣の
かゝりたはやかにきなしたる、あひしたかへり。 ちかくよりたるをみれは、彼弟子
の山臥とみつるは、はや我年ころ心をつくしつる奈良の若君なりけり。 侍從の公
も此山臥もたかひにみしりぬるうへには、あれはいかに〳〵とおなしこと葉にい
ひて、袖をかほにおほゐて、又いふ事もなくなきけれは、驗者も父朝臣も何とある事
そとあさましくあきれられて、みなめをみあはせてゐたりけるに、侍從驗者に逢て、
この人をはしめ白河の宿所にてみそめしより、山へのほるへきよし契をきて、行衞
なく聞なして、その思ひのつもりて、かゝる病に成にし次第をかきくときいへは、さ
ては不思議にもあはれにも侍ける儀かな、我また此人をみし事は、しか〳〵おもは
さるに、熊野の道にみあひて、心からも器量もよろつわか心にたかひ給はねは、片時
も身をはなつ事なく、大峯かつらきの難行にも、此人を同行とし、公家女院の御驗者
にも、この人を助修とたのみて、かやうに相具したてまつるよしをそいひける。 か
ゝりけれは侍從も此所勞いちしるく平癒しぬれは、この心中をはしらて、あらぬす

ちにもてなやみ給けるにこそとて、護身加持にも及す、先達はいとま申て歸るへき由いひけれは、父朝臣さま〳〵にもてなしけり。若公をは少將とそ山ふしにての名をはいひける。先途の歸らむとするに、少將この子細をいひて、いときまをこへは、まことに日來あさからすなれたてまつりつる名殘いかさまにすへしともおほへ侍らねとも、事の次第を聞侍るに、すこしも子細を申さは、偏になさけしらぬ身にもなりぬへけれは、侍從公にこそしたかひ給はめ、いつくにおはすとも、忘れたてまつるましけれは、かやうに京なとに侍らむ時は、かならす申承へしなといへは、それは仰らるゝに及はす、つねに案内申へきよしなと契て、わかれぬ。少將はとゝまりて、初かみきられて登山もとゝまりにし事の口おしかりし心の中、むかへに給はすへき由さたまりて、引かくれ、難行苦行せしまきれにも、律師のいかにうつゝならすおほすらん、その御心中にもいか斗かおほさんなと、とにかくにおもひみたれ侍しかとも、をし返しまた思ふ時は、人はいさおほしいれぬ事をひとりかくしもやなと、心にこゝろをもとき侍りつるに、かく心くるしきありさまにみたてまつるこそ、誠の御心さしもかくれたるしるしはあらはれけれと、あはれにおほえ侍れ、此うへは本意たかひ侍らねは、山へこそは登侍らめ、いかゝおほしはからふといへは、侍從はた

ゝ此事をのみこそ、山王大師にも祈請し侍つるに、末代といへとも冥の加護は朽さりけりなと、いよ〳〵たのもしくこそ侍れは、住山のよしにおほしならんのみこそはうれしく侍るへけれとて、相具して山へ上たれは、律師は七旬の暮齢に及て、餘命幾はくならねは、世間出世の事侍從公こそとおもひ侍つるに、病惱年つもりて終焉時を待さまなりしかは、所存の相違しぬる事をふかく歎つるに、所勞平癒して歸山するのみならす、此人さへくしてのほりたれは、しかるへき冥衆の御はからひかなとそよろこひける。

巻四

かくて兩三年もすきけれは、あるとき少將君いひけるは、白地(あからさま)なるやうにて、奈良をは出たりしに、かきくれて年をへぬれは、得業のいかはかりかは歎らむ、不孝のせめのかれかたかりぬへけれは、その行來もきかまほしきに、つれたてまつらはやといさなひけれは、侍從もまことにありかたく住山し給へき事なとはからひ給たりしに、おもひの外にかきたえぬるも、いかに人ならすおほすらん、なれは尤同道し申さむとて、小法師原大童部なと少々道のためとて、物のくをさせなとして、ならの方へ下けるか、その日もやう〳〵暮けれは、光明山にとゝまりて、次日得業の坊へおちつ

くべきにてありけるか、あまりにひさしくかきたえぬれは、かくともいはてゆきたらむも、さすかはゝかりおほゆれは、覺然上座の宿の手掻の門邊にありけるにおちつきて、それよりかくまいりたるよしいはせたりけれと、得業は折ふし他行にて、るすのもの、此やうを御歸のとき申さんといひて、使はかへしつ。

さてもつまのかた、此人うせぬる後は、大小の事我まゝとのみはゝかるかたなくふるまひけるに、歸りめくりたりときゝて、人しれすあはてさはきけるもことはり也。聟の來鑒をしのひよひつゝ、いひけるは、得業の子息にてありつる人、心さまをたしからすして、此五六年いつちともなくまとひ出たりつれは、よろつはみな姫かまゝとこそおもひつるに、まことやらん、わらはをもおひ出し、さらぬ人〱にもはちみせむといひて、山法師ともかたらひくして、上座か宿所へつきたるとて、只今これへつけたりつれとも、得業は物へおはしてしり給はす、あはれともかくもして、今夜の中にうしなひ給へかし、さらは御ためも、わらはかためも、後めてたきはからひにてこそとて、いそき告申つるなりといへは、來鑒聞もあへす返答しけるは、此事無下にやすき程の事に侍り、努〱披露あるへからす、今日しも得業の御ありき有けるめてたさよといひて、ほうゑみて歸りぬ。　覺然上座さへ得業の使に行て、彼宿所もるす成ける、わつかに年來の冠者原少々有ける。

來鑒わたくしの房へ歸て、やかて所々の惡黨ともよひあつめて、こよひいさゝかはからふへき子細侍り、みをくりてたひてんやといへは、各領狀して巳刻はかりに、手掻の門の邊へ集會せむとて約束しける。　其後、上座か留すの冠者原をよひていひけるは、旁所存ありて其宿所にやとりたると聞者ともを、今夜忍てうたむとする也、後にかくと披露すへからす、若又便宜あしく侍らは、いそきつけしらせよ、不忠のことあらむにをきては、たゝはあるましきそとそ、したゝかにいひ含ける。

この者とも、來鑒か前にては承ぬとて出たれとも、宿所に歸て思けるは、禪師殿と申は我相傳の主君にています、此人のおはせさりつる間こそ、ものおそろしくはしたなき人〱の命にもしたかひつれ、さてもおはせん上は我等か命をこそ失るとも、相傳の主の目の前にてうたれむ事は、口おしくかはゆかるへしとおもひて、いそき禪師のかたへ行ていひけるは、かゝる不思議の次第こそ候へ、得業御房もこれをはよもしろしめし候はし、夜にまきれてとく〱おちさせ給へとつけゝるを、侍從公聞て山上なとにてこそ、我等かことくなる一向の修學生は、其道各別なれは、腰刀をもうへにはさゝしとふるまいつれとも、奈良法師なといふものにみにけ、きゝにけ

したらむは、山門の瑕瑾たゝ此事にあるへし、されと立しのひていみしく命をたすかりたりとも、いきて更その甲斐あるへからす、たゝをきたれ小法師原にふるまはせて、けに〳〵しからむ時には、ひとあてあててみせむといひて、山よりともにくしたるつかひ、たしかりの積刀法師、うしろみせすの旄陳法師、法定なしの武王丸、かへり宜旨の金剛丸、以下のすくやかものとも六七人ありけるを、ちかくめしよせて、まことやらん今夜これへしれ者の來へきよし、思ひかけす人の夢をみする也、をのれ等も用心せよといひ合ければ、めん〳〵興あるわさは侍にこそ、おもしろしと云て、甲のをゝしめ、太刀長刀をあそはかして、今や〳〵と心まちに待かけける。 留すのものともこれをみて、あはれけに山の君達はたけくわたらせ給物かなとて、上座かちりもすゑす秘藏しけるよろひ一二兩、弓やなくひなと取いたして、をのれも究竟の手たり成ければ、最期の御ともつかまつらむ、敵はたとひうち入とも、左右なくよりあはすして、弓勢のほと御見物候へとそのゝしりける。 侍従ものゝ具したりけり。小具足まことにつまやかにて、すきたる所そみえさりける。 太刀わきはさみつゝ立出ていひけるは、日來手かくしつるはかねをあらはさんとする所はこゝなりけりといひて、手くすね引てねりまひける。 容儀、事から樊噲張良か武略なりとも、お

もひかゝるへきやうなく、まことにたのもしくそみえける。

五月上旬のころなりければ、五月やみにて東西もみえす、刻限もよく成にければ、來鑒黒皮おとしのよろひかふとに、めゆひのよろひ直垂きて、三尺あまりの太刀はきたりける究竟のふる強盗ともをめしつかひければ、ひたかふと二十餘人許にて、手飼の門の邊へ約束したる大和河内吉野・とつかはの惡黨とも、こゝらのすみ、かしこのくしらにより合てければ、一二百人の勢にてそ有ける。 一所に會合して議しけるは、内には山の法師原か少々ありと聞ゆ、おきあふほとならは、定て恥ある事はせむすらん、さもあらはひとよせ寄て、引しりそくやうにして、をひき出して後、中にとりこめて分とりにせんとそ巧ける。 かくて寅刻にも成にければ、をの〳〵前をあらそひて彼宿所へよせたりける。 内にも期たる事なれは、面々に打て出んとしけるを、侍從引とゝめて、我等は小勢なり、かさにかゝるへからす、只かたきをうちへみてゝ、思ふさまにみたれあひつゝ、大八王子といふ密號をなん名のらさんものをは、善惡の子細を論せす、法にまかせてうちふせよとそ下知しける。 門の扉をはねはつしてこみ入けるを、うちよりさしつめ〳〵射ふせければ、面にむかふへきやうもなく、我と思はんものは打て出よといひけるに、積刀旄陳二人のものともそはやりける。 多

勢の中よはり入て散〲にたゝかひける程に、積刀法師は敵あまた打とりたりけるに、ふともゝをきられて倒ぬ。施陳法師も究竟のもの三四人やにはに切ふせて、のゝしりけるか、かふとのはちをつよくうたれて引しりそきけるに、内より武王・金剛二人の童部出かはりて、責入たる若干の悪黨をは門よりとへそ追出ける。法師はら・童部われをとらしとうちまはりければ、敵も左右なくはちかつかすして、やゝ久しく時うつしけるに、彼は多勢なれは次第にあらてを入ちかへける。是はわつかに七八人にて責けれ共、さすか力つかれぬるうへひき退けるに、敵の者ともちからをえて、各打入ける。來鑒はゑんのうへに立のほりて、寺中のわかものに鬼駿河來鑒といふものこそさんしたれ、恥あるものは一人もなきか、見參せはやとたからかにいひけるを、聞もあへす叡山本院の住僧侍從房玄怡かあるとはしるしやしらすやと云て、太刀をぬきてはねかゝりけるか、來鑒さふらふとて打合ける。いつれこそ隙あれ共みえす、火いつる程に戰ける。侍從の公さしまきてうちたりけるに、來鑒ひさふしをきられてのく所を、やかてうちかふとにうち入て、うちたりけるに、あやまたす頸をそはねたりける。しれものゝ張本をはかくこそならはかせとてうち出けるに、法師原・童部おなしく聲をあけて責かゝれは、少々は返しあはするものも

ありけれとも、大將軍をうたれぬるうへは、我をとらしと、くもの子をちらすやうに、東西南北へそ、にけまとひける。或は射ふせられ、或はきりふせられて、またく歸るものはなかりけり。

卷五

かくて夜もあけぬれは、奈良中おほきにひしめきて、來鑒こそ山法師にうたれにけれとて、大衆蜂起してゆゝしくわつらはしかりぬへく聞えけれは、侍從いま一ちう思きりたりける程に、上座の下人いそき得業の宿所へゆきて、此よしをいふに、得業やかて迎に人をやりけれは、別事なくてやみぬ。日來行方をたにもしらさりつるに、禪師のかへり來のみにあらす、侍從聊の手もおはす、剩高名しきはめたりけれは、得業かきりなく感し悅けるもことはりなり。さても合戰のをこりはいかなりける事そとたつぬる程に、來鑒の問答の次第を、上座の下人かたりけれは、併つまのかたの結構といふ事あらはれにけり。得業いかりさはきて、向後のためしをもたつはかり、やかていかなる恥辱をもあたへんとおもひけるか、猶々入たちたる子細あるらむとて、妻のかたの事とりうしろみける尾張といふ女をよひ出して、さためてくはしき事はしりたるらん、有のままに申せといへは、にか〲とうちわらひて、またく

うけ給るむねも候はすといひけるを、其儀ならは、中間法師なとよりて足をはさみ、つさにもかけてせめとはんとのゝしるに、おちわなゝきて、若君の髮をきりたりしくはたてより、來鑑をかたらひて、夜うちにせんとはからひし次第まて、殘事なくおちにけるうへは、妻の御方をは大かきをわたしてふしつけにせよと下知しけるを、侍從かはゆくおほえて、さま〳〵こしらへ制止けれは、そのはからひもまことに斟酌なかるへきにあらす、中〳〵天下の口遊なるへしと思ひて、さらはしのひやかにとて、ひとりむすめのいつき姫君、後見の尾張あひともに追却しけれは、つまの御方はいとさはかぬけしきにて、無貲によりてわらはか年ころの中をはなるゝ口おしさといひて、出はを坊中の上下諸人はいふにをよはす、きゝ及ふ道俗男女かとのまへ市をなして見物しけるか、をの〳〵つまはしきをしつゝ、にくみそしらぬものはなかりけり。

侍從は下人の疵つくろはせなとして、十四五日は奈良に逗留したりけるか、山より聞及てわかき人々おほく迎に下たりけれは、のほらんとしけるか、得業心靜に對面してうちつゝき病惱し侍し程に、万事時をまつ事にてかき絶たてまつりしに、思の外に又申承ぬるなといへは、得業もありかたき宿縁のほとかきくときいひて、小僧

か事はともかくも、いまは御はからひをはたかふへきにあらす、但我身もよはひかたふきて、餘算幾はくならす、さるまゝには相傳の坊領なと少々侍も、あの僧のほかには申つくへき者もなし、相構てこのたひはとゝめをき給てんや、いつくにか侍とも、おそらくは御兄弟のことくにこそ候はんすれなといへは、侍從もとも其謂ありなと、承諾して、たとひ異門隱遁の身と成候とも、露の命の消さらんほとは、おなし心にあるへしといひて、たかひにはなるへきこゝちもせさりけれとも、別涙をおさへて侍從はのほりぬ。

禪師は奈良にとゝまりて、東南院をたつねけれは、僧都は老病にしつみてありけるか、遺跡の事なと眞俗につきて申をくへき人もなかりつるに、さやうにめくりまはりておはすらん、かへす〳〵うれしくこそとて、いそきむかへけれは、彼房へそ還住しける。　又僧都身まかりて後、東南院のあとをつきて、三會の講匠をつとめ、程なく權律師に昇進しぬ。　侍從ももとの如く習學しけれは、稽古の聞えもます〳〵かまひすしくて、山上のため、門跡のため、旁要須の者なりとて、門跡領あまた拜領して、位階俸祿につけて聊も恨なくて過けるほとに、師範の律師も僧都に轉住して、探題の位までにいたれりけるか、程なくうせけれは、本尊聖敎以下むねとあるへき事をは、み

な此人に申つけにけり。かゝる程に父朝臣所勞のよし告たりけれは、いそき下てみるに、業病とみえけれは、枕のもとによりて、法門をも談し念佛をすゝめけるに、病者頭をもてあけていひけるは、儒教の中に鳥のまさにしなんとする時は、そのこゑかなしく、人のまさにしなんとする時は、其いふ事よしといへる事あり、我申さんことを能々聞給へとて、おさなくおはせし時より、器量もあしからすみえしにつけても、あはれ門塵をもつかせ、朝家にもつかへさせはやとこそ思ひしかとも、夢まほろしのさかへまめやかに、詮なくおほえしかは、一すちに菩提の道をとふらはんとおもひ成にき、甲斐〳〵しく修學のほまれありと聞は、本意にたかふ事はあらねとも、名利のための勤は出離の要にかなふらんともおほえす、同く修し給はんする顯密の行業を、今一重思ひ入たるよしにみえは、よみちもやすかりなんといひ、是を獲麟の一言として、本尊に向たてまつり、念佛二三十反たからに唱て、眠かことくにしてをはりぬ。

中陰の事なとはてにけれは、山へかへりのほりて、倩案しけるに、父の最期の遺誡心肝にそみておほえけれは、生涯の浮榮よしなくそありける、まことに我等か朝夕いへる事そかし、人身はきはめてうけかたく、佛教はまたあひかたしといふ事を、しか

るにうつりやすかりぬへき俗塵のましはりをのかれて、大師結緣の泪にすむのみにあらす、さすか先世の業程もありけれはこそ、かけまくもかたしけなき眞言天台の敎迹をうけて、さしもたやすからぬ口決相承の器ともなるらめ、それに比丘のすかたをかるといへとも、比丘の行をもなさす、圓實の敎にはあひなから圓實の觀をもこらさすして、併驕慢のはたほこをたて、やゝもすれは名利のきつなにほたされて、寶の山に入て手をむなしくするのみにあらす、まのあたり俗人の彈呵をかうふる事ははつかしかりしものかなと思つゝけられて、いかなる片山陰にも入て、柴の庵をもむすひて、五八十具の戒行まてこそまたくまもる事はかたくとも、五相十乘の觀惠を廢退せすしして、自行の増進をもはけみ、亡父の菩提をもいのりたくおほえけれ共、一周忌まてはとかく思ふはかりに（以下文闕く）

少將律師は公請の勞をつのりて、少僧都をのそみけるか、超越せられけれは、學道のいさみをろそかにして、隱遁の志切なれは、身のいとまを申さんとて、春日の社へ參ぬ。五重唯識のみとりの簾二空眞如の露をたれ、百法明門のあけのいかき八識賴耶のかけうつりて、隨喜の心にそみ、感涙眼にみちけれは、終夜瑜伽唯識のひもをときて、依他圓成の法味をそたてまつりける心のそこに、

神もなをうきをすてすは春日山、かひある法の道しるへせよ。

かくて暁ふかくなれは、夢うつゝともなくて、白髪なる老翁束帶のすかたけたかけにて、律師のまへにすゝみよりつゝ、自受法樂の都を出て忍苦捍勞のさかひに光をやはらくる事は大小權實の法味をなむるも、さる事にて、出離生死の心ある人もやなと思にこそ、よろつをはしのひたるに、眞實報恩のおもひにて、佛果菩提の道を尋む事は、四所權現の宮中に一旦のなこりこそおしけれとも、八相成道の臺のうへに三明のさとりを期せむといひて、かきけつやうにかくれぬれは、もとよりの心さしなるうへに、いよ〳〵明神の示現を感して、坊に歸て、したしかりける人に、聖教なと申つけて、山の方へも今一度いはまほしかりけれとも、かゝる身になりなん後は、中〳〵よしなうおほえけれは、高野の奥院へ入てひたすらにをこなひける。

寂而上人、大原のすまひもさすか名殘おしきうへ、良忍上人の舊跡もふり捨てかたけれとも、山にほとちかく、みなれし同朋とも、常に法門の不審なとたつねとひけるも、念佛のさはりにおほえけれは、ひしりにいとまこひて、大原をは出て、高野の方へ行ぬ。　本寺傳法院なとおかみまはりて、庵室むすひぬへきよりやあるとたつねありきけるに、人跡たえたる谷そこの岩のはさまに、方丈の室ありけり。　晨鐘夕梵

のひゝき耳のそこにとゝまり、竹煙松霧の色こゝろすこくそみえける。其うちに老々たる音にて法門を談する音のしけれは、ありかたくたうとくおほえて、たちよりつゝ聞けれは、對合してはしたなく問答しける人の音、少將禪師に似たりけれは、思捨し事なれと、あやしく心にかゝりて、あかり障子をほと〳〵とたゝきけれは、誰人のいつくより尋給そといひて、出たる人をみれは、昔なれし少將公の、事のほかにやせくろみて、こきすみそめの衣のなへ〳〵とあるに、すゝ手にぬき入て、あれはいかに誠しからぬ御姿かなといへは、まことに誰も思よらぬにこそとて、面々の發心の意趣なとかたりて、すみ染の色かはるまて、あさのたもとをそしほりける。　やかてその庵室に入て、同心に事理の修行をはけみける程に、房主の老僧病つきて限にみえけれは、共にあと枕にそひて、知識看病すれは、臨終の行相みたるゝ事なく、入我々入の觀おこたらすして、手に印契を結、口に眞言をみてゝ、禪定に入かことくして、いきたえにけり。　かくて一二年をふるに寂而上人も兩三日わつらふやうにありけるか、今すこしもとくして、安養上品の蓮臺にうつりて、即悟無生の後、最初引攝か誓たかはしと云て、繩床にあなうらを結、金刹に望をかけて、正念に安住し、觀法成就してをはりぬ。　偏天臺入滅の行相にたかはすとそ遠近の人隨喜しける。

奈良上人は寂而聖人の墳墓はなれかたくして、もとのごとく只一人高野の庵室にとゞまりゐておこなひけるか、後にはたうとき處々修行しありきて、東山のほとり長樂寺の奥にいほりを結て、濟度衆生の心日々にまさり、法花讀誦の行年積りければ、最後終焉の夕、音樂空に奏し、沈檀室に薰して、まのあたり三尊の來迎にあつかりける、目出そおほゆる。 凡そ人の常のならひ、夢のうちのたのしみにふけり、まほろしの間のなさけをしたふ人をは、わりなく心つきに思ひ、有爲のすみかをいとひ、無漏の宮古をねかふものをは、あさましくあえなき事にいひあへる、かくはかりをろかなる事は、何かは侍へき。 豪賢をものこさぬ無常の敍鬼はあしたになれ、夕にちかつく、富貴をもきらはぬ有爲の怨賊の、ひるもうかゝひ、夜もきほふ。 たとひ僧正法務の望をとけて、銅陵金谷のとみを得たりとも、彌輪廻惡趣の妄執のみまさりて、さらに厭離穢土のかしこきなかたちとはなるへからす。 されは天台大師は智解むねにみち、精進火を消とも、無常をさとらさらむは、かほよけれともふたつのこひなきかことしとこそおほせられたれ。 淨名居士の詞に、此身はまほろしのことし、顚倒よりおこれり、この身は夢のことし、虛妄のみたりと述たり。 白樂天逍遙の詩には、この身何そ戀にたらむ、一聚虛空塵なりといへり。 かくはありとも、たしなむにくるしき名利の道をは、我も人もねかひもとめ、はえぬへき出離のはかりことをは、いにしへも今もをこたりかちなる事にてこそ侍るに、南都北嶺のすみかをいて、大原・高野のいほりをむすひ、心かしこくそおほゆる。 また人のなさけをしたひ、心さしをかくる事は、此世ひとつの契にはあらす、いやしきことわさにも一樹の陰にやとり、一河のなかれを酌、みな先世の契とかや申すかし。 されともこの頃のならひには、志をはつきにして、人のしなをえらひ、なさけをはさしおきて、あらぬさまなる事もおほけれは、數なら身を思ひしりぬる人は、うさにこりぬ淚はひくあみの目にあまり、つらさにたえぬおもひはうつみ火の下にのみこかれてやむとかや。 是によりて中古の物かたりをかきあらはして、後代の指南にせんと思へりけるとなむ。

田村の草子

上

日本我朝はじまりて天神七代、地神五代は扨をきぬ、仁王の御代と成て、たび〱の將軍家をつがせ給ふ中にも、俊重將軍の御子にとしすけと申奉るは、春は花のもとにて日を暮し、秋は月のまへにて夜をあかし、しいかくはんけんに心をかけ、色をこのみ、しゆゑんらつぶをむねとして、おはしける。されば御こゝろにかなふみたい所ましまさすして、十六の御年より五十に及はせ給ふ迄、四百六十四人そをくり給ふ。されは御子一人もましまさず。としすけ思召けるは、五十にかたふき、たとひ七十よのよはひをたもつ共、今廿餘年の春秋いく程かあらん、過にし方を思へは、たゞ夢のごとし、我一人の子なくして、いかにも成なん後、跡にとゞまり、一度の香花をもそなへて、としすけかぼだひを誰か弔ひ申べき、かゝる田舍のすまゐなれはこそ、

心に叶ふふさいもなけれ、都へ上り尋ばやと思召、いそぎ上洛し給ひて五條あたりにすませ給ふ。御門此よしゑいぶんまし〳〵て、都をしゆごせんための上洛そやと、御かんなゝめならず。かくて秋もくれゆくに、さがのの方へ御ゆふらんに出給へば、野山の色もまさり、草のかげもわひしきむしのこゑ、折しりがほぞあはれなる。かゝりける所にいつくより來るともしらず、いとうつくしき女の、いさよふ月に打むかひ、よむことの葉ぞあはれなる。

草むらになくむしのねをきくからに、いとゝおもひのまさりこそすれ。

とつらねて、うちしほれたる有樣、ゑにかく共筆もおよびかたく、柳のいとの春風になびき、ふようのくれなゐの雨をおびたるも、かくやと思ひけるに、つきしたがふ人もなく、たゞ一人ほれ〳〵と立給ふ。こはいかにてんまきじんの我をたばからんとはからふらんと、心づよく立さるへくとはおもへ共、色にひかるゝこゝろなれは、ゆくべきかたをしら雲のたちまよい給ひけるか、よしいかなるまゑんのへんげにても、かたらひゆかばやとおほしめし、かくよみ給ふ。

あはれなり我も人まつむしのこゑ、おなし思ひか、いさくらべなん。

と打ながめつゝ、たもとにすがり給へは、いは木ならぬさまにて、おなしくるまにて

歸り給ひ、ひよくの契りをなし給ふに、程なくくはいにんし給ふ。としすけ大きによろこひ給ひて、我すでに五十になるまで子といふものなかりつるに、かゝる事こそうれしけれとて、いよ〳〵かしつき給ふ。かくて月日かさなるまゝに、御さんのようい有ければ、女房仰られけるは、いまだ十つきにてはあるべからず、三年といはん正月に、たんじやうなるべし、さん屋の高さは三十六丈、百八十本のはしらを立て、四百八十八のばんしやうをもつて、二年の内につくり出すべしとの給ひければ、仰のごとく三十六丈のろう門をそくみあげゝる。さる程にさん屋に入給ふ時、殿にむかひ、われさん屋に入て七日より内に人かよふべからず、八日にならはかならず參るべしとて、ろう門の内へ入給ふ。將軍今一日またん事千年をふる心ちしけれは、待かねて七日めにたちのぞき給へは、内には大木の松三本、さかき七本おひ出たり。光明かくやくとして日月のごとし。いかなる事やらんと、あやしくおもひて見給ふに、百ひろあまりの大じやなるが、二つの角の間に三さい斗なるうつくしき子をのせて、くれなゐのしたを出してねふりあひしてこそあそびけれ。日月と見えつるはまなこなり。としすけおほしめしけるは、かゝるおそろしき事こそおほえね、いか樣天まの入かはりたるらん、其儀ならはやきうちにせんなと思召わつら

ひ給ふに、八日と申にありしすがたにて、いつくしきわか君をいたき參らせて、ろう門よりおり給ひて、仰けるは、七日をすぐして御らんさふらはゝ、日本のあるしとなし奉るへしとおもひつれ共、我ほんたいを御覽したる間、かなか（に）はす、され共天下の大將軍となし奉り候へし、此わか君をはにちりう丸と申へし、若君三さいの年としすけしゝ給ふへし、七さいの年、御門より大事のせんじをかうふるへし、我はますたか池の大しやなり、諸天せんしの仰にしたかひ、かりにいもせのかたらひをなしつる也、いとま申てさらばとて、かきけすやうにうせにけり。

か樣におそろしき大じやとはしり給へとも、三とせか間なれし名殘のおしき事たとへんかたもなくて、たゝなみだにむせび立給ふ。　あまりのなつかしさに生れ給ふわか君に、なんぢが母はいつくへ行ぬるぞとのたまへば、天にむかふてあれ〳〵とばかりそいひける。　かくて年月を過行程に、日りう殿三さいと申せし時、としすけはかなくならせ給ひけり。　もとよりごしたる事なれ共、さしあたりたるわかれのかなしさ、申斗なし。　日りう殿もなげきなから、日數をゝくりける程に、七さいと申にせんじくだり、近江の國みなれ川といふ所にくらみつくらへのすけとて二つの大じや有、むかしより西へとをるものをとりくらふ間、じんせきたへてかよひちなし、いそぎかれをほろぼして參らせよとのせんじなり。　日りうなみだをながしの給ひけるは、うらめしかりけるうき世かな、生れて十日にたらて母にわかれ、三さいと申に父におくれ、又七さいにてかやうのせんしをかうふる事よと仰られければ、御めのと申けるは、君の御ちゝは五さいにて越前國けいのつにて、長さ六丈のしやをいたかせ給ひぬ、されはばんみんしたをふりけるとこそ承はれ、君はすでに七さいになり給へば、何のしさいの候へき、是はせんぞの御たからとて、つのつき弓にじんづうのかぶらやとりそへて奉る。　日りう殿弓をしはり（に）引給ふに、少もさはるかたなし。　五百よきの軍兵をそろへて、みなれ川へぞくだられける。　かの所へつき給ひて、ふちのあたりを御らんしければ、れうらきんしうのたぐひおほくなかれけり。　日りう仰けるは、是見給へ人々、われをたはからむため、か樣のはかりこと也、かまへてみな〳〵目をかくべからすとて、ふちのはたへ立より、大音あけて、いかに此所の大しやたしかにきけ、我はみもすそ川のなかれ、あまつひこねの御すゑ、十せんの君の仰にしたかひ、日りう是まてむかふたり、いそき出てたいめん仕へしとの給へは、川なみ高く立あがり、風すさましく吹ければ、五百よきの軍兵水のあはのきゆることくに、一度にはらりと死したりけり。　目に見えぬかたきなれは、いかにし

てほろぼさん共、わきまへすして、日りう一人川のみぎはをかけめぐりて、年月ををくりける程に、七さいより十三の年迄、こゝろをつくしけるが、あまりの事に佛神にいのりけるは、日本のあるじ十せんの君のせんじにて候、ねがはくはこの川の水上をさゝめて、水をほし、大じやのかたちを見せ給へと、かんたんをくだきてねんじければ、まことに佛神のめくみをたれ給ふにや、みなかみよりよこきりて、三里か間、白かはらとなりて、百ひろばかりなる大じや二つあらはれて、日りうに申けるは、なんぢしらすや、我はなんぢかためにはおぢなり、汝が母ますだか池の大じやは我ためにはいもうとなり、我この川にすむ事二千五百年、なんぢわづか十三にて我にてきをなさん事及ひがたし、いで〳〵みぢんになさんとて、口より火ゑんをふき出しければ、山も川も一度にねつてつの海とぞなりにける。　され共日りう少もさはがす、つのゝつき弓、じんづうのかぶら矢にて、さん〳〵にい給へは、たちまち大じやほろびけり。　やがてくびをつらぬき、雲にのりて都へ上り給ふ。　御門ゑいらんましまして、將軍のせんじをうけ、としひと將軍とぞ申ける。　かくてとしひと十七の御時、ある夕くれのつれ〳〵に、かすみの内にかりの一つらゆくを見給ひて、思召けるは、そらをかけるつはさまてふうふのかたらひをなす、我十七までつまといふものゝ

なきこそかなしけれ、よし有人もがな、いひよりてかたらふべしと思召けるに、其比天下に時めきたまふほり河の中納言たかさをのひめ君、てる日の御せんと申て、天下一のびじんなるを、風のたよりにきゝそめ給ひて、わくるかたなき御物思ひのあさからざりしを、めのとの左近のすけいさめ參らせけれは、いとはつかしき事ながら、かくて思ひしつまんもつみふかくこそとて、有のまゝにかたり給へは、左近の助よりかけ承、それかしほり河殿にいひよるべきつてこそ侍れ、先御文をつかはして御覽さふらへと申けれは、みどりのうすやうに、

つたへきく風のたよりのわすられで、おもひきえなんことぞかなしき。

とあそばして、つかはされければ、少將のつぼねとて、ひめ君のめのと有けるにいひより、將軍の御文參らせければ、いはげなき御心にて、手にも取給はで、かほ打あかめておはしけるに、少將のつぼね御すゝりもて參り、天下の大將軍の御ふみなるに、ともかくも一筆の御返事なくてはかなふまじとて、せめ奉れ共、引かつき御いらへもなし。　めのと心うくおもひ、母上に此よししか〳〵申けれは、まことにおさあひ人の心こそうらめしけれ、よそにきく事ならは、いかはかりうらやむべき事ぞや、いそき〳〵御返事とせめ給へは、ちからなくおきなをり給ひて、かたはらに打むかひて、

もみぢかさねのうすやうに、

いかにして人のことはをたのむへき、あひ見てのちはかはるならひに。

とかきて、ひきむすびてをき給ふ。　少將とりて左近のすけがもとへつかはしければ、よりかげよろこび、やがて將軍へ御返事とて參らせければ、としひとうれしくも、こひのやみぢのしるべせし物かなとて、左近のしやうげんにそなされける。　さて此後たび／＼御文かさなり、しのび／＼の御ちぎりあさからさりしに、御門此よしきこしめし、御歌合にことよせて、めしあげられ、それより返し給はすして、俊仁をは伊豆の國へながさせ給ふ。　としひと口おしく思ひながら、ちからなくをんるのみちにをもむき給ふ心の程こそあはれなる。　さる程に、あふみの國せたのはしをわたるとて、はしげたあらくふみならし、俊仁こそ只今流人となりて、東國へくだるなれは、みなれ川にてころせし大じや共のこんはくあらば、都に上り、心のまゝにせよといひすてゝ下り給ふ。　さるほどに其比、都のあたりにて、人おほくうせて行かたしらす成にけり。　日のくるれは門戸をとぢてこゑを立る事もなし、ひるは行かふ道たえてあさぢかはらとそ成にける。　てんもんはかせに仰て、かんかへ給ふに、としひと將軍をめし返し給はすは、しつまるましきよしそうもん申ければ、やがてしやめんのりんしくだり、二たび上洛し給ひて、又せたのはしをとをるとて、としひとこそしやめんのりんしを給はりて、只今上るなれ、大じや共都あたりにかなふましとて、其日都につき給ふ。　洛中しづかになり、ばんみんよろこびの色をなす。　御門御かんまし／＼て、やがててる日のまへを下されて、ひよくの契りをなし給ひ、姬君二人いてき給ひて、いつきかしづき給ふに、ある時、としひと參內おはしけるに、折ふししだいりにはくはんげんの御ゆふ有けるを、ちやうもんしておはしける間に、つぢ風あらく吹おちて、てる日のまへを天にふきあげたり。　此よし將軍へ、申上ければ、いそぎ我やにかへり、こはいかなる事やらんとなげき給へとも、かひもなし。　あまりのかなしさに、せめては夢になりとも、今一たび見參らせばやとて、すこしまどろみ給へは、年の程十二三ばかりなるわらはは三人つれて行けるか、さきなるわらはのいひけるは、それ日本はそくさんへんちの小國也といへ共、神國たるゆへに、人の心すなをにして、長久なり、然共まんじんの心あれは、てんまのわざはひありといひつたへけるこそ、まことにふしぎなれ、としひと將軍は弓矢のほまれ世にすぐれ、鬼神もをそれしたがふほとの人なるに、此程てうあひのつまを辻風にとられて、なげきかなしむと也、あれ程の武將として、いひかひなき事よとわらひければ、中なるわら

はも、誠に海山をさかしても、取返さすしては、いけるかひもなき事よといへは、跡なるものゝ云、それは去事なれ共、行衛をしらすは、いかゝせん、さりなから俊仁程の者か天狗共をとらへて、とふならは、おそれて有所云へき物をとてわらひける。

そのころに夢さめて、あたりを見れは、人もなし。扨は佛神の御つげぞと、有がたくおもひ、八まん大ぼさつにきせひ申、先あたご山にのぼり、きやうくはう坊は内におはしますか、天下の大將軍としひと是まで參りたりと仰けれは、せつなる間にくうでんろうかく玉のうてなにいたり、やゝありて八十あまりなる老僧、でしともに手をひかれて、よろぼひ出て、何の御用にて御出候とて、ひざの上までかゝりたるまぶたを、でしに引あけさせけるを、としひと是まで參る事よの儀にあらす、それかし女にて候ものを、此程うしなひて候、定てしろしめさるべし、御弟子の中にも候ならは、返したひ候へ、何樣行末を御存候べし、をしへて給はれと仰けれは、きやうくはう房きゝて、是はおもひもよらぬ事を承候、弟子共の中にも候はす、東山の三良坊の方にも候はす、但是より御歸り候はんずるみちに、ふし木の有べし、是そをしへ申べし、くはしく御尋あれといひすてて、かきけす樣にうせけれは、いそぎ歸り見給ふに、申つることく、谷川に打渡して、大なるふし木の橋あり、立よりあらけなくふみならし、い

かになんぢに物とはんと仰けれは、しばらくあつて、此木うごくかと見えて、頭いできくびを三間はかりもちあげて、人にものとふとて、去事やある、をしへしと思へども、なんぢか母は我ためにはいもうとなれは、をしゆるぞ、わとのは女をうしなひて尋るよな、それは此へんには有べからす、むつの國たか山のあくるわうといふおにか取たるなり、ぼんぶの身にてはかなひがたし、くらまの大ひたもんでんの御ちからをたのみ奉りて、かのきじんをしたがへ、しよ人のうれへを（マヽ脫文アルカ）御身か母ますだかいけの主なりしが、かりに人界に生れたるえんにひかれて、成佛せり、我はいまだごういんふかくして、じやしんのおもひつきせす、我ために善根をなし、じやだうのくるしひをたすけ給へといふ言葉はのこり、かたちはきえてうせたりけり。としひとあはれに思召、一万部の法花經をよみ、千石千貫を千人の僧に引給へは、其くりきにてやかて成佛して、ふしぎの事共おほかりけり。かくてとしひとはくらまへ參り、三七日こもり給ひて、まんずるとらの一天に、かつちうをたいして、きちやうを打あげ、なんぢいかにをそきぞといさめ給ふに、打おとろきて見れは、枕につるぎを立て有けり。さてはしよくはんじやうじゆ有かたくおもひて、いそきむつの國へぞくだり給ふ。その比さいしをうしなふ人數をしらす。中にも二條大將殿御ひめ君、三

將の中納言殿北の御かた、みのゝせんじ、河内判官、かくのごとくの人々は、たゞひちひろの底までなり共、有かとだにもきかば尋んとおほしめす折ふしなれは、あるひはらうどうをくだし、又はみづからくだる人もあり、思ひ〳〵の出立はなやかにこそ見えたりけれ。去程に日かずつもりてむつの國はつせの郡田むらの郷につき給ふ。ころは七月下じゆんの事なるに、しつのめのわざ、田にかくるなるこなは、ひかるゝ心あさからて、一夜のなさけをかけ給ひて、もしわすれがたみも有ならは、是をしるしに尋ねことよとて、上さしのかぶら矢一給はりて立給ふ。去ほどに、かのあくるわうかじやうくはくちかくつきけれは、こまかけよせ見給へは、あかゝねのついぢをつきまはし、くろがねの門を四方にたて、ばんをきびしくかためたり。東おもての門前に、しのひよりて見れは、年のほど十五六はかりなる女わらはの打しほれて、なみだにむせび、門外にたゝずみたるを、をのれはなにものぞとゝひ給へは、これはみのゝせんじかむすめにてさふらふか、十三にて此所にとらはれ、三とせか間、門まもりの女とさだめられて候とて、さめ〳〵となく。俊仁きゝ給ひて、せんじも來りたるぞ、都へぐしてゆくへしとて、先みだい所の御事をとひ給ふに、くはしくはしりさふらはず、たゞし二三日いせんまでは、御こゑの聞えたると申。俊仁心もと

なく思食、おには内に有かととひ給ふ。此頃越前の方へ參りたると申。扨この門の内へは何として入とおほせければ、あれに候りうのこまにのりて内へ入、もんをひらきてけんぞく共をばいれ候と申ければ、かのりうに乘いらむとし給へとも、門の内へはいらずして、北のかたへ行。としひとつるぎをぬき、なんぢ命おしくは内へいるへし、さなくはたちまちいのちをとゞむべしとの給へは、おそれて内へそ入にける。扨かのもんをひらかんとすれは、大ばんじやく共をかさねたるごとくにて、少もゆるがず。其時くらまの方をふしおがみ、ねがはくは御ちからをそへてたひ給へとねんじ給へば、ひらきけり。やかて内へ入見給ふに、女のこゑあまたして、なきける。立より見給ふに、三條殿の北かたとしひとのみだい所はおはしまさず。いかになりゆき給ふぞと御たつね有けれは、中納言殿北のかた二三日さきにおにのゑじきと成給ひぬとて、くびはかり取いだしけれは、是は夢かや三とせのほとさへなからへて、けふこのころむなしくなり給ふ事のかなしさよとて、ふしまろびなきたまふ。としひといよ〳〵心もとなくおほしめし、たつねられけれは、きのふまでこれよりおくに御きやうのこゑ聞えつるか、何とならせたまふやらん、しらすといふ。おぼつかなくて、おほくの戸をあけ見給へば、かすかなる所にをしこめ

られて、おはじけるか、御目を見合て、あきれはて、いかに〳〵ことばかりなり。やゝ有ておほせけるは、なにとして是までは御入候ぞや、まづ〳〵今生にて見えぬる事こそうれしけれ、我あすはおにのゑじきとなるべし、一すぢに後世ぼたひをたのみ奉るべし、おにのかへらぬさきに、とく〳〵御かへりあれとて、なみだにむせひ給ふ。としひとこれまで尋ねけるも、おなし道にとこそおもひつるに、いかで歸り候べき、扨おにどもかへる時にしるしはいかゝとゝひ給へば、くまなきそらもかきくもり、しんどうらいでんおびたゞしく、じやちくの雨ふりて、里の內よりおにのこゑ聞え候とその給ひける。さてなん時にかへり候はんする。明日のむまのこくにかへらんと申つると仰られければ、其間におにどものすみか見んとて、のこりの人々かたらひ、こゝかしこ御覽すれば、大なるおけ共おほくならべをきたり。見ればあまたの人を取て、すしにしてをきける。又かたはらを見れば、十四五のちごかつしきをくしさしにしてあり、又あまほうしのくびを二三百じゆずのごとくにつなぎ、軒の下にかけならべたり。かれを見、これを見るに、おそろしとも中々申はをろかなり。かくてじこくもうつれば、にはかにそらかきくもり、かみなりしんどうして、ひかりものとびちがひ、おにのこゑ山をくづすごとし。殘の人々はたたいきたる心ちなじ。

としひとはおにのかへるを待給ふ。あくるわう、我宿ちかくなれば、門まもりの女はなきか、我るすになにものなれは來るぞ、たゞ手なかけそ、にらみころせとて、千八百のまなこのひかり、くわゑんのとぶごとく也。され共としひとのかうべの上には、日月あまくだり給ひて、としひとのまなことなりてにらみ給へは、おにどもにらみまけて、ちのなみだをながしける。その時たもんでんより給はりたるつるぎをなげ給へは、おにのくびみなこと〳〵くおちたりけり。この時、人々ちから付、としひとをふしおがみ給ふ。扨とられたるおとこ女おもひ〳〵の古里へをくりかへされける。ばんみんのよろこぶ事かぎりなし。中にも三條中納言殿御なげきおもひやられてあはれなり。かくて將軍は思ひのまゝにきじんをしたがへ給ひて、都に上り、年月ををくり給ふ程に、むつの國にて一夜のなさけをかけ給ふしづのめのはらに、男子一人いできけり。名をはふせり殿と申。此子九さいの年よりあたりの山寺にてがくもんせさせけるに、一を十とさとりけるか、十さいの年つく〳〵とあんじけるは、人げんのみならず、てうるいちくるいまても、ちゝ母あり、わがちゝはいつくに有ぞと、母にとひければ、母なみだをながし、なんぢか父こそは當國の鬼神をしたがへ給ひつる俊仁將軍なれど、ありのまゝにかたり、くだんの鏑矢と、

り出し見せければ、其儀ならは都に上り、父にたいめんせんとて、廿日あまりの道なれとも、夜を日につき、三日に都につき、將軍の御門のまへにやすらふ。折ふしとしひとまりをあそばしけるか、かゝりの外へきれけるを、ふせり殿さらりとながし、おもひのまゝけめぐりて、もとのごとくけこまれたり。としひと御覽じて、なにものそとゝひ給へとも、こたへず、いかさままりはすぐれたりと思召、いかなるものやさ仰けれ共、返事にも及はず、こしよりもかぶら矢をぬき出し、將軍の御前にをかれたり。としひと是を御覽じて、さては我子なりとうれしく思召、さま〳〵の御もてなしにて、先御名をあらためて、田村丸とぞ申ける。きりやうことがら人にすぐれ、御力はいか程あるともかぎりなし。やがて御げんぷくありて、いなせの五郎さかの上のとしむねと申ける。去程にとしひと五十五の御時、つく〳〵とおほしめしけるは、それ日本はわづかの國なり、たうごにわたりてきりしたかへ、末代まで名をのこさばやとおもひ、時の關白みつたかしてそうもん申されけれは、まことに思ひ立たる事とゝむるに及はすと仰出さける。俊仁悅ひ、三千艘の舟に五十萬騎打乘、神通の物々ぐたいして、二月の末に打立給ふが、それかし程のものかわたらんにしるしなくてはかなふまじとて、神通のかぶら矢一づい給へば、その矢明州の津にとゝ

まり、七日七夜ひゞきわたれは、人みなおとろきさはぎ、れいもんをひかせらるゝに、はかせかんがへていはく、日本の將軍この國をしたがへんとて來るなり、日ほんはそくさんの小國なれども、人のちゑふかふして、心かうなり、其上神國として弓矢のはかりことを得たり、いかてかぼんぶのちからにてふせくべし、佛力ならてたのみかたなし。けいくわ和尙百千万のふどう明王こんがらせいたかひきぐして、明州の津にてふせぎ給ふ。としひと御覽じて、いかにやなんぢなにものぞ、我矢さきにはとてもかなふまじ、すみやかにひきしりぞくべしと仰ける。ふどうの給ふやう、なんぢ小國の臣として、大國をしたがへん事おもひもよらず、いそき本朝に歸るべしとて、ごうまのりけんのひかりをはなつてふり給ふ。としひとも神通のつるぎをぬき、たゝかひ給ふか、ふどうのりけんたゝかひまけて、次第〳〵にしりぞきけり。ふどうかなはしと思ひ、こんがうどうじを日本へつかはして、くらまのびしやもんへ申されけるは、としひとたうごをしたがへんとてよせ候、大かたはふせぎ候へとも、かなひがたく候、ねがはくはこの度のかつせんに、としひといりきをおとし、我にちからをそへてたび給へとのたまへは、たもん仰られけるは、いかでか日本の大將にふかくをはかかせ候べき、とく〳〵歸り給へと、おほせけれは、としひと御力はい

よく〳〵まさり、つるぎのひかりかゝやきけり。　ふさうかなはしとて、せつなる間に、
又みつからくらまへ御ごし成て、おほせけるは、まつたく此國をかたきとおもふに
はあらす、此度としひさにまけぬるものならは、佛力すたりて、しんずる者うすく成、
いよ〳〵じやたうきじんちからをえて、衆生三途にかへらん事うたかひ有べから
す、ねがはくはとしひとかいりきをおとしてたび給へと、仰ければ、たもんでんの御
返事に、此國は佛法さかんにして、佛神ちからをそへ給ふ、しかるを日本のけん臣て
いわうのまほりをば、いかでかうしなひ候べきやとおほせければ、ふざうかさねて
のたまはく、たとひさしひさうしなひ候とも、我日本にわたり、としひさかごさく、王
法をもまもり、佛法はんじやうの國さなすべしとの給ひければ、其時びしやもんと
しひさかかはりに日本のしゆごして衆生をたすけ給はんとのおほせこそうれし
けれ、其儀ならは、いそぎ御歸ありて、としひと打給ふべしと有しかば、ふざう大によ
ろこび、かへり給ひて、又たゝかひ給ふ程に、としひとのつるぎのひかりおとり、ふざ
うのりけんにたゝかひまけて、三つにおれて、りやうせんへこそまひあがりけれ。
其時、としひとむねんにおもひ、ふざうの舟にのりうつり、ひつくんで上を下に返し
給ふ程に、りけんおちかゝりて、俊仁のくびを打おとせは、ふざうくびを取て、こんが
らせいたかも打つれ〳〵、たうごへ歸りたまふ。　三千ざうの舟ともはなみにゆら
れ、風にはなされて、いつくともなくゆられ行こそかなしけれ。
其中に將軍のしがいのある舟は、人にしらせんためにや、八重のしほぢをわけて、は
かたのうらにつきける。　としむねは此よしきこしめし、いそぎくだり給ひて、かの
御しがいを取おさめ、さま〳〵の御とふらひありて、なく〳〵都へ上り給ひて、年月
ををくり給ふに、大和國ならざか山にかなつぶてをうつ。　りやうせんさいふけし
やうのもの出きて、都へ參るみつき物をみちにてうばひ取、おほくの人の命をたつ
事、天下のなげきならずや、いそぎとしむねにむかふてしたかへよとのせんじ下り
けれは、としむね承はり、五百よきのぐんびやうをひきぐして、ならさか山へむかは
れけるか、はかりことに色こき小袖あまたこつ川にてぬらしたる體にて、木々の枝
にかけならべてをき、りやうせんを今や〳〵とまち給ふ。　しばらくありてたけ二
丈あまりの法師のまかぶらたかく、ほうぼねいかり、まことにおそろしき有樣にて、
高き所にかけあがりて、あらめつらしや此山をとをるとて、かやうなる物をかさり
て見せたるは、このほうしをたばからんためか、よし〳〵其儀ならは、手なみの程を
見すべし、なをもよきものゝあらば、のこさずいたすべしとて、おどりあがり、わらひ

ける。 としむねこまかけよせての給ふやう、是は御門へ參る御物なり、我命のあらんかぎりは、とらるゝ事有ましそと仰られければ、ぎごはなるくはしやめかな、ことことしくは思へとも、あまりくはしやめが言葉のにくければ、かなつぶてをもつて、たゞ一つのしやうふにせん、三郎つぶてとなづけて、かねめは三百兩、角の數は百八十三、うけて見よといふまゝに、ひぢをあげ、一ふりふつて打ければ、天地ひゞき、なるかみのごとし。 され共としむねさはがすして、あふきにて打おとし給へは、又次郎つぶて取出し、うちけるをも、おなしかつてに打おとし給へは、りやうせんけうさめがほにて立けるが、さりとも太郎つぶてにをきては、山をたてにつく共、みぢんになさん物をとて、かねめは六百兩、つのは數をしらす、もろこしに五百年、かうらい國に五百年、日本の地にすむ事は十年、此山にはたゞ三とせなり、よろづのたからを取事もみな此つぶてのいとくなり、あたらこざかしきわらはをころさんもむさんなれ共、口のさがなきゆへに只今いとまとらするぞ、念佛申せといふまゝにめてのあしをつよくふみ、ゑいやと打ければ、百千のいかつちの一度におつるかとおほえて、きもたましゐもみにそはす、五百よきのつはものはみなひれふしてをともせす、たゞくらやみにこそなりたりけれ。 され共としむね少もさはがす、馬たてなをし、ひと

ちがひちかふて、ひゞきわたるかなつぶてをあふぎのはなにてけおとしたまへば、せけんなりしづまり、もとのごとくはれたりけり。 りやうせんもたのみたるつぶては、三つながらうちおとされ、いまはちからをうしなひ、いひすくしたる口をかゝへて、もとの山に立しのばんと、あしばやにあゆみける。 としむねこまかけよせ、いかに御坊てなみは見申たるに、さしたるふせひもなし、但御坊のつぶてほとこそなく共、三代相傳して持たるかぶら矢一すぢげんざんにいれでは有へきとて、神通のかぶらにてい給ふに、りやうせんばうかみゝのね三寸のきてなりわたり、もとよりひぎやうじさいのものなれは、七日七夜うみ山かけてにげけれ共、さらにはなるゝ事なし。 としむねは春日山にぢんをとり、りやうせんばうをまち給ふ。 七日めにかへり、としむねの御前に參り、手を合申けるは、いかなるせいびやうと申とも、五町十ちやうにてがんせきてつへきはとをすなと承て候へ、今日まで七日か間、海に入はうみにいり、山にのほれは山にのほり、みゝのねにはなれす候、いかなる御弓ぞや、今日よりして、あくじをすべからす、命を御たすけ候はゞ、御らうとうと成申さんと、なく〳〵申ければ、としむねきこしめし、ゑいりよはかりがたし、先いましめて參るべしとて、くろかねのくさりなはにてくゝり、五百よきか中にとりこめ、都に歸り給

へは、御門ゑいらんまし〳〵て。御かんは申はかりなし。りやうせんはふなをか山にてきり、くびを八十人して、かき、ごくもんのまへにかけて、ゆき〻のものに見せ、やがてとしむねは十七にて、將軍づかさを給り、むつの國はつせのこほりに、ゑちせんをそへてくだされ、ゑいぐわにほこり給ひけり。

下

か〻りける所に、とし二年ありて、伊勢の國のす〻か山におほだけ丸とて、鬼神出き、ゆきかふ人をなやまし、みつき物もたえ〳〵なり。御門此よしきこしめし、としむねに仰付、いそぎほろぼすべしとのせんじなり。將軍かしこまつて、宣旨承り、軍兵をめしよせ、三萬餘きにて、うつたち、すゞかの山へをしよする。大たけ丸は飛行自在のものなれは、此よしを聞て、みねのくろ雲にたちまぎれ、火の雨をふらせ、らいでんひまもなく、風すさまじく吹て、責よるへき樣もなくして、年月を送り給ふ。又此山かげに天女あま下りておはします。名をばす〻か御前と申ける。大だけ丸、す〻か御前に心をなやまし、有時はうつくしき童子となり、又有時は公卿天上人にへんじて、さま〳〵のはかりことをめぐらし、一夜の契りをこめばやと、心をくだきあ

くがれけれども、すゞかつうりきにてしり給ふゆへ、さらになびき給はず。かくて俊宗はいかにもして、かたきの有所を慥に知て責め入、勝負をけつせはやと思ひ、諸天にいのりをかけ給へは、有夜のあかつき夢ともなく、うつ〻共なく、老人來り給ひて、此山のおにをしたがへんと思はゞ、此へんにす〻か御前とて、天女のおはしますをたのむべし、このはかりことならでは大たけ丸をうつ事成がたしとをしへて、立さり給ふと御覽じて、夢はさめたりけり。としむね有がたくおほしめし、先三萬よきのつはものをは都へ返し給ひて、たゞ一人す〻か山に立しのばせ給ふか、夕くれの月ほのかにさしうつり、草葉の露もをきまどひ、むしのこゑ〳〵あはれをそへ、ふるの秋をおもひ出し、草のまくらに打かたふき給ふに、年の程二八ばかりなる女、玉のかんざしに金銀のやうらくかけ、からにしきのすいかんにくれなゐのはかまふみしたきて、こつぜんときたり給ふ。としむね是はかの鬼のたばかりて、我こゝろをひきみるにこそと思ひ、つるぎをひざの下にかくし、さらぬ體にて見給へば、

目に見えぬおにのすみかをしるべくは、わかあるかたにしばしさゝまれ。

と打ながめて、かきけすごとくうせにけり。としむねこは有がたき御つげぞとおもひ、太神宮をはじめ奉り、神〳〵をふしおがみ給ふ。され共そのゆくゑをしらず。

されは尋ぬへきかたもなくて、たゞばうぜんとして、大たけ丸が事は打わすれ、うつゝに見えつる人の面かげ、身にそひて、時のまもわすらで戀ちのやみにまよひ給ふが、せめてはしばしゆめのたよりもかなと、まどろみ、うはのそらなるものおもひにしづみはてなん事も、たゞ是鬼のはからふらんに、おもひきらんと、又神〳〵をふしおかみ、ねがはくは此あくねんをわすれて、鬼神をしたがへさせたび給へ、諸天諸佛の中にも、大じ大ひの御ちかひこそ有がたけれど、かんたんをくだきいのりて、心をすまし給へども、なをわすれもやらぬおもかげの、たちそひて、露のいのちもたのみすくなきありさまにて、かく口ずさひ給ふ。

かいまみしおもかげこそはわすられね目にみぬおにはさもあらばあれ

と打ながめて、たゞばうぜんとして居給ふに、有し人の來り、さく〳〵我かたへ御入候べしと、かたらひ行て、ひよくのちぎりあさからず、きたるともなく月日を送りけるが、ある夜のむつごとに、われは此山にかりに來りて、三とせなり、御身此山のきじんをしたがへ給はむとて來り給ふとも、かなひがたし、我ちからをそへ奉らむためにかりに此界にくだるなり、かの大たけ丸我にちぎりをこめんとて、さま〳〵いひよる也、我はかりごとにてたやすくうたせ申べし、御心やすく思ひ、ひたすらにたのみ給へ、さらは我あとをしたひ給へと有しかば、山〳〵みね〳〵をたどりこえて見給へは、大き成岩あなあり。見給へは、まん〳〵たるかすみの内に、こがねのいらか有、こん〳〵るりの砂をしき、くろがねの門をすぎゆけは、しろかねの門あり、なをし過ゆけは金ぎんのそりはしをかけたり。まことにごくらくせかいといふとも、是にはいかでまさるべき。庭に四きの體をあらはし、先ひんがしは春のけしきにて、出る日かげものどかなり。谷の戸あくるうぐひすのこゑも、たかねの雪とけて、かきねのむめのかつちれば、さくらはをそしとさきつゞく。岸の山ぶき色ふかく、藤なみよする松がえの、みどりのそらに立つゞき、みなみおもてはなつの夜の明がた近きほとゝぎす、なきゆく山はしげりあひ、岩かどけつるたきつせに、波もすゞしき夕ぐれに、とびかふほたるかすかにて、あまの戸たたくくゐなとりも、あけぼのやなをおしむらむ。扨又にしは秋風のすゑ葉の露のちるかげに所々のむらもみぢの色、野べのむしのこゑしらるゝよもぎふの露にみだるゝいとはぎの花むらさきの藤ばかまきゝやう・かるかやをみなへし、いまをさかりと見えたりけり。北は冬のけしきにて、をのへの松のこずゑまでも、ふりうづみたる雪の日に、すみやくけふり、ほかにていけのこほりのかたよるに、つがはぬをしのたちさはく、羽風もさむきあ

かつきは、ひとりぬる身やうかるらん。　又たつみのかたを見れは、色〱の鳥のはねにて、ふきわけたるやかた百ばかりならびたり。　その内を見れば、玉の床ににしきのしとねをしき、しつほうのかうしの内には、玉のかんざしかけたる女あまたなみゐて、びわ・ことしらべ、あるひはごすご六に心をよせたるもあり。　それよりおくを見るに、大たけ丸か住ける所とおほしくて、こがねのとびらにしろかねのはしらにて、一だん高く作り、こほりのごとくなるけんほこをはすきまもなく立ならべ、くろがねの弓、やなぐゐは数をしらす。　俊宗思召けるは、只今よき折ふしなり、かぶら矢一つ射ばやと思召けるが、先すゝか御前にとひ給へば、しばらく待給ふべし、只今事のいでくるならは、けんそくどもに取こめられ、御命有まし、それをいかにと申に、此鬼は大とうれん・小とうれん・けんみやうれんとて三つのけん有、此つるぎともをたいする内には、日本か寄てせむる共、うたるゝ事は有まし、大たけ丸我に契りをこめんと、たび〱いひかたらへども、つゐになびく事なし、さためて又こよひもをとつれ来るへし、さあらばしやうじいれ、むつましげにもてなし、三つのつるきをあづかりて取べし、其後来らん時、やす〱とうち給へ、先たゝ今は歸り給べしとて、打つれだち歸り給ふ。　あんのごとく日くれけれは、大たけまるうつくしきどうじとなり、すゞか御前の御まくらに立よりて、

　岩ならすまくらなりともくちやせん、夜々のなみだの露のつもれは。

とよみ、たもとをかほにをしあてゝなきける。　すゞか御前はかねてたくみし事なれは、返し、

　くちはてんまくらはたれにおとらめや、人こそしらねたえぬなみだを。

とよみ給へは、大たけ丸是をきゝ、こはいかに、ちつかに文のかさなるまで、一度の御返事たになかりつるに、只今の人の言葉のうれしさよ、まことなるかな、めにみえぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、たけきものゝふの心をもなぐさむるは歌なり、我歌のみちをしらずしては、いかで此君とちぎりなん、あつはれ歌よみかなと、そゞろに我身をほめたりける。

さてすゞか御前のそば近くよりふし、此ほどつくせし心の程をあはれみ給ふにや、只今のことのはこそ有がたけれと、なみだをながしければ、すゞか御前、我も岩木ならねば、いかばかりおもひつるぞや、かまへてみすて給ふべからすと打とけがほに仰けれは、大たけ丸も何か心をのこすべき、こし方ゆくすゑの事共いひかたらひけるか、明ぼのつぐる鳥のこゑ、おきわかれ行きぬ〱の袖をひかへ、仰られけるは、か

やうなる事申につけて、をこがましき事ながら、此程俊宗とやらんいふもの、我に文をかよはしけれども、手にもとらず、御身にかくなれぬるときくならば、いかなるうきめにもあはすべき、心ほそくおもふなり、御身のつるぎを我にあづけ給へかしと仰けれは、まことに去事、其としむねといふこくはじやめは、よしあるくせものにて、我等をもねらふと聞え候、さりながら此つるぎどものあらむ程は、御心やすくおほしめして、御まくらにたて給へとて、大とうれん、小とうれん、二つのつるぎをぬき出して、そも〳〵此つるぎと申は、天ぢくまかた國にてあしゆらわう、日本の佛法さかんなり、いそぎまだうに引入よとの御つかひに、それがしけんぞくどもをくして、參る時、此三つのつるぎを給はる事、後代までのめんぼくなれは、身をはなす事なし、然るを一夜のなさけにほだされて、すゞか御せんに參らせて、御まくらがみにたて給へとて、まだ夜をこめて立まよふくろ雲に打のりて鬼の住かに歸りける。　かくて俊むねは此よしをきこしめし、たゞ是佛神の御はからひなりとて、いよ〳〵くはんねんし給ふ。　かくて夜も明ければ、いそぎ御用意あるべしとて、先二つのけんを參らする。　一つのけんみやうれんといふつるぎは、大たけ丸かおぢに三めんきさ申鬼かあづかりしか、此ほど天ぢくへ參り候ぞや、又今夜は鬼どもに酒をすゝめて、

のませよと、へいぢををくりて候間、みなけんぞくどもはゑいふし候べし、御心やすくおぼしめして、うち給へとて、すゞかは雲にのりて立かくれ給ふ。　去程に大たけ丸、是をば夢にもしらずして、日のくるゝを待かねて來り、御せんはいづくにおはすぞとて、れん中さして入ければ、としむね立むかひ給ひて、すゞか御せんと申は、なにものぞ、さだめて大たけ丸といふくせものか、なんぢしらずや、我は是日本の御門につかへ奉る田村大將軍俊宗とは我事なり、十七にて大和の國なら坂山にかなつぶてのりやうせんといふけしやうのものをしたがへ、大將軍つかさを給はり、御門をしゆこし申事、異國までもそのかくれなし、それになんぞ、まの前にて大惡をなす事、たがゆるしけるぞとの給へは、おほたけ丸は今までうつくしきごうじなりしが、みる〳〵たけ十丈ばかりなるきじんと成、日月のごとくなるまなこを見出し、としむねをにらみけるが、天地をひゞかし、大をんあげて、なんぢはそくさん國の御門の臣下として、何ほどの事の有べきぞ、手なみの程を見せんとて、氷のごとくなるけんほこを三百はかりなげかくる。　され共としむねのみかたには、千じゆくはんをんさくらまの大びたもんでん兩わきに立給ひて、將軍の上におちかゝるほこをはらひたまふ。　きじんはいかりをなし、數千ぎに身をへんじ、大山のうごくごとし。　され

共田村さはぎ給はす、神通のかふら矢い給へは、千万の矢さきとなり、きじんのかうべに落かゝれは、あるひはうたれ、いた手をひ、四方へちり〱になりにけり。され共、大たけ丸は、みぢんとなり、ばんじやくとへんげ、しばらくうたれされは、俊むねつるぎをなげ給へは、くびはたちまち打おとされ、うんかのごとく見えたるけんぞくも、みなきえ〱と成にけり。其後、おにのくび共をざう車につみ、都に上せ給ふ。御門ゑいらんまし〱て、伊賀の國を給はり、いよ〱さかへ給ふ。され共としむねはすゞか御前の御なさけふかくおはしけれは、やがて御下り有て、明しくらし給ふ程に、ひめ君一人出き給ひて、御名をはしやうりん女と申て、いつきかしつき給ふ。されども都遠き所なれは、折ふしは都の事おほしめし出して、いつまでかゝるひなのすまゐならん、しのひ都に上らばやとおほしめしけれは、すゞか御前是をうらみ給ひて、もとより我は下界の人間にあらず、何事も御心に思ひ給ふ事を、我しらぬ事なし、さしも二世とこそちぎりつるに、はやくもかはりたる御心かなと、なみだにむせび給へば、田村きこしめし、いさとよ、心のかはる事はさふらはず、され共この所にかくてながらへ候へは、君の御めぐみもうすくなり、又は郎等どもの思はん程もはかりがたし、おなじくは都へ御供申てすまばやとこそ思ひさふらへと仰られければ、その御こと葉もことはりなれとも、さりなから我はこの山のしゆごじんとなり、都をまもり申べし、いそぎ御上り候へ、御心こそかはりたり共、我はしやうりんと申ひめが候上は、弓矢のまもり神となるべし、さあらは此くれにはあふみの國にあくしのたか丸出て、世のさまたげをなすべし、さあらは田むらに又したがへよとのせんじくだるべし、内々御心にかけ、御用意あれと仰ければ、たむらきこしめし、こはうらめしき御事かな、もしもろともに上り、都のすまゐもかなとこそおもひつるに、いかで見すて參らすべきと仰ける。すゞか御せんきき(マヽ)こしめし、先々此たびは我にまかせて御のぼり候て、やがて又くだり給へとありしかば、ちからなく〱としむね上らく有て、先參内なされければ、御門ゑいかん有て、くはんげん・らんぶ・御歌合さま〱の御もてなしなり。上くぎやう天上人とり〱の御なぐさめに、さらによるひるかけて御ひまもなし。かくてやよひのすゑより、神無月のはじめごろまで、御ゆふらん有ける所に、すゞかおほせしごとく、あふみの國にたか丸といふ鬼いできて、ゆきゝのものをうしなふ事數をしらず、いそぎうつて下さるべしとて、在々所々より申來る。此よしそうもん申ければ、たま〱將軍の在京なり、此年月のしんくをもなくさめんとおもひつるに、程もなくて、かゝる事こそうらめしけれ、さりなから誰

におほせつけられんものなしと仰けれは、俊宗は時のめんほく是にすきしとよろこび、御うけを申、まかり立て、すゞかへ此よし申さはやとおぼしめしけるが、いやいやつうりきにてとくしり給ふべきものを、時うつりてはあしかりなんとおほしめし、十六万きの兵を引ぐして、たか丸かぢやうへをしよせ、内の有さま見給ふに、石のつゐぢをたかくつきまはし、くろかねの門をさしかためて、せめ入べきやうもなし。俊むね門せんにこまかけよせ、いかに鬼ともたしかにきけ、只今なんぢかうつてにむかふたるものを、いかなるものとかおもふらん、いこくまてもかくれなき、藤原のとしひとのちやくしに、田村將軍藤原のとしむねなり、手なみの程はさだめてききをよび給ふらんに、何とてまかり出てかうさんして、命をつぎ、をのれが本國へかへらぬぞとの給へは、じやうにはなりをしづめておともせず。としむねはらをたて、すゞか御前のつたへ給ふくわかいのいんをむすびて、じやうの内へなげたまへは、くわゑんと成てやけあがる。たかまるは雲にのりて、しなのゝ國ふせやかだけへおちゆきける。田むらつゞひてせめられけれは、するかの國ふじのだけへおち行ける。是をもやがてせめおとされ、そとのはまにおち行けるか、是をもせめつけられて、たうだ日本のさかひに岩をくりぬき、じやうとしてひきこもりけれは、ろく地

につゞく程はせめけるが、海上の事なればいかゞせん、先ひきとり、兵船をとゝのへてよせんとてひき給ふが、十六万きのつはもの、こゝかしこにてうたれ、やう〳〵二万きばかりになり、都へ上り給ふとて、すゞかのさかの下、まかりのしゆくにつき給へば、すゞか御せん出むかひ、何とて只今ぢんひき給ふぞと仰ける。としむねきこしめし、その御事にて候、まかりむかふ時も御いとまこいに參らばやとぞんじ候へども、じこくうつりなんとおもひ、まかりとをり候なり、たか丸をはずいぶんせめ候へとも、今は海中に岩をくりぬきてひきこもり候あひだ、船をとゝのへんために、先都へ上り候、其上、人あまたうたれ候、此よし申上、やがて又打よせ候べしと仰けれは、すゞかきこしめし、船もつはものも、いかほどあつめ給ふ共、ぼんぶの身に叶ふべからず、つはものどもをは、いそぎ都へのぼせ給ふべし、わらはゝ〔こと〕參りたばかり出し、やす〳〵とうたせ申さんとて、じんつうの車にのり、只二人せつなが間にそとのはまにつき給ふ。たか丸は折ふしひるねして居たりつるが、かつはとおき、れいの田村か又來るぞ、用心せよといふまゝに、岩戸をたてゝひきこもる。その時すゞかは左のてをさし上、天をまねき給へば、十二のほし、二十五のぼさつあま下り給ひて、みめうのをんがくをそろへ、かのいはやの上にてまひあそび給へば、たか丸かてうあひ

のむすめ、是を聞、あらおもしろのをんがくや、天ぢくにありし時は、たび〳〵聞けれ共、か程のがくはいまだきかず、あはれ見ばやとこそあまへけれ。たか丸申やう、まことのがくとおもふべからず、田むらとすゞか我をたばかり出さんとて、する事ぞかし、かまへて見る事むやくなりといへば、むすめかさねて申やう、あらはにも出て見ばこそあしからめ、戸を細目にあけて見候に、何の子細の有べきといひければ、力なく岩やの戸を三寸計あけてのぞきければ、廿五のぼさつ天どうじあつまりて、殊にたえなるをんがくをそろへ、舞給へは、あまりの面白さに、あくるとは思はね共、ひろ〳〵とあきければ、すゞか、田村にあれあそばせとの給ふ。俊宗くろかねの弓に神通のかぶら矢打つがひ、しはしかためてはなち給ふ。いかづちのごとくになり渡り、たか丸かみけんをいくだき、こしぼねかけてうしろなる石につなぬかれける。その時つるぎをなげ給へは、たか丸おや子七人がくびを打おとし、八人つゝのにんそくにもたせて、都へ上り給ひければ、くんかうけじやうおもひのまゝにちやうだいして、又すゞかへ下り給ふ。御前はよろこびのみきをすゝめ、夜もすがらくはんげんしてあかしくらさせ給ふ。

有時、すゞか仰けるは、一とせ大たけ丸がけんみやうれんのつるきを取おとしゝゆへに、こんはく殘て天ぢくへ歸り、又日本へわたり、むつのくにきり山がだけにたてこもりて、世のさまたげをなすべきとのずいさう有、いそぎ都に上り、よき馬をもとめ給へと仰ければ、やがてしやうらくして、馬をたつね給ふところに、五條のかたはらにすみあらしたるやかたに立より見れば、二百さいにもをよびたるおきな、馬やのまへにねふり居たり。又よのつねの馬五つばかり一つにしたる程の馬を、かなくさりにて八方へつなぎたるが、百日にもまくさくれたり共見えず、ひきたつるとも一あしもゆくべきとも見えず。としむね此馬うるべきかと仰ければ、おきなあざわらひ、なにの用に此馬かい給ふべき、ほしくはあたひはいるべからず、ひかせ給へといふ。としむねうれしくおほしめし、明日ひかせ申さんとて歸り給ひて、かのおきなに百石百貫に色よき小袖をそへてくだしたぶ。おきな大きによろこびけるなり。さて其馬をかひ給ふに、世中にならびなきめい馬にて、俊宗のり給へば、山をかけり、うみをわたるもおなじ、平地のことし。ふしぎにおほしめし、すゝかへゆかんとおもひ、のり出し給へば、せつなが間につき給ふ。すすか御せんは御覽じて、あつはれ御むま候、これにめされて、むつの國きり山がたけを御覽しをかれ候へ、大たけ丸が來り候とも、こまのあしだちをしらせ給はゝ、たゝ一かせんのしやうぶそ

と仰られければ、やがて此こまに打のりて、ひがしをさしてうち給ふに、へんしの間にきり山あたりをかけまはり、もとの所に歸り給ふ。　かくて月日をすぐし給へば、あんのごとく大たけ丸かしんはくもとのごとくに成て、きり山がみねにゐて、人をさる事かぎりなし。　此よしそうもん申ければ、二十萬ぎのぐんびやうを、田村將軍につけ給ひて、いそぎうつたつべしとのせんじなり。　俊宗かしこまつてうけ給り、此よしすゝかにかたり給へば、人數はさやうに入べからず、たゞ御てせいはかりつれ給ふべしとて、みな人々を返し給ひて、五百よきのせいはかりめしつれ給ふ。　都よりきり山までは三十五日の道なるを、軍兵どもをばさきにたて、俊宗はすゝか御前としゆゑんくはんげんさま〳〵の御あそびにて、七月のすゑより八月なかばまて、夜と共の御ゆふさま〳〵なりしか、都を出て三十四日と申にすゝかを出る。　御せんはひぎやうの車にめす。　としむねはかのこまに打のり、へんしの間にきり山のふもとにつき給ふに、軍兵どもはいまたふた時ばかりあとにつきける。　去程に鬼神は山をほりぬき、口には大ばむじやくを戸びらとして、せめ入べきやうはなし。　されども田むらはかねてあんないはしるなり、からめでにまはり、せめ入て見給へば、大たけ丸はなかりけり。　門まもりのおに一人出、なにものなれは、我にあんないもい

はでとをるらん、物見せんとて、くろがねのぼうにてうたんとすれは、としむねあふぎにて打おとし、にくきもののふるまひかなとて、先いましめて引出す。　扨大たけはいつくに有ぞととひ給へは、八大わうと申は、我らかしうの主なり、ゑぞがしまにおはします、御見まひのためにきのふ御こし候程に、やがて歸り給はんと申せは、にはかにそらくもり、かみなりして、くろくも一むらの中より鬼のこゑすさましくして、あらめづらしや、田村殿、久しき程のげんさんなり、一とせ伊勢のすゝか山にて、御身はそれがしをうちとゞめたりとおもふらん、我はそのころ、天ぢくに用有て、玉しゐ一つのこしをきて歸るなり、それを我本體とおもふらん、人間のちゑのあさましさよとわらひけれは、田むら聞給ひて、それはさる事も有べし、なんぢかつるぎはいかにと仰ければ、是こそけんみやうれんよとてさし上る。　俊宗御覧じて、うれしうれし、二つのつるぎは給りて、日本のたからとなし、今一つのけんを取のこし、心にかゝりおもひしに、是までの持參、なにによりまんぞくなりとの給へは、大たけ丸はらをたて、あのわつはに物ないはせそ、三面鬼はなきかといへは、つらの三つあるあかき鬼おどり出て、大石を雨のふるほど打けれ共、一つもあたらず。　其時俊宗例の大弓にかぶら矢つがひ、しばしかためてはなち給へは、三面鬼かまつかういくだかれ、朝

の露ときえにけり、大たけ腹をすへかね、手取にせんと、半町ばかり一飛にとんで懸るを、飛ちかへて切給へば、首は前に落けるか、其まゝ天へ舞あがる。すゝか御前は御覧じて、此首たゝ今おちかゝるべし、用心あれとて、よろひ甲を重てき給ふに、二時計有てなり渡り、田村の甲のてへんにくらひ付。俊宗甲をぬぎ御覧するに、其まゝ首は死にける。残のけんぞく共には、なわをかけ、引上り皆切て、ごくもんに懸られける。又大たけ丸か首をは末代のつたへにとて、うちのほうさうに納、千本の大頭と申て、今の世までもみこしのさきに渡るは、この大たけ丸か頭なり。

去程に将軍の御いくはういよ／＼まさりける。かくてとしむね、すゝか御せんとなをあさからぬ中となり給ひけるか、すゝか御せんたゝ風の心ちと仰られしが、次第にをもらせ給ふ。としむね心うくおほしめし、さま／＼の御いのりあれは、すゝか此よしきこしめし、我はかりに此界に生るゝなり、此世のきえんつきたれは、いかに祈り給ふ共、かひ有まし、いとま申て、たむら殿、しやうりんをいとをしみ給へといひすてゝ、終にむなしく成給ふ。としむねの御なけき、中々申はがりなし。あまりかなしみ給ひて、一七日こがれじににしに給ふが、やがてめいごにゆき給ひて、くしやうじんをよび、なんぢは十王の下人か、さらは我しやばの田むらの大将軍としむね

なり、なんぢが主にたいめん申たきよし申べしとの給へば、くしやうじん大きにいかり、しやばにてはなにものにてもあれかし、今我等にさやうの事をいはんものむけんへおとすべしとて、くろきおにとあかき鬼かひきたてんとしけるを、高あしだにてころ／＼とふみたをし、我いふ事をきくまじきかと仰ければ、くしやうしんはきもをけし、たゝわきれはてたるはかりなり。やゝありておきあかり、せひの子細もなく、十わうの前ににげてゆき、此よしかくと申ければ、十王出給ふ。其時俊宗我つま七日いせんに身まかりて候、いそき返し給はるへしとの給へは、それはぢやうこうかきりあれは叶ふまし、なんぢはひごうなり、いそぎかへれと仰ければ、ぢやうごうなればこそ返してたべとは申候へ、ひごうなれはいひ分はなし、返し給はずはらうせきの有へしとて、くわかひのいんをむすびなげ給へは、大しやくでんやけあがる。其時、大とうれんをぬき給ひて、かけまはり給ふ。此大とうれんは文珠(二)のけしんなれは、十王もくしやうじんもいかでかたやすくおもふべき。ゑんま王はごくそつをめし、かのものを返せと仰ければ、ごくそつ申けるは、ぢやうごうのものなり、其上、はやからだも候はず、いかゞはせんと申ければ、すゝかとおなじ時に生れたる女の、みのゝ國とふかいといふ所に有、かれに取かへよと仰ければ、ごくそつ承て、

かのからに取かへて、田むらのまへに出しけるか、有しよりすがたもかはり、かたちおとりければ、としむね腹をたて、もとのごとくになしてたび給へと仰ければ、第三のみやうくはんを御つかひにて、東方じやうるりせかいのいわうほうしやくの藥をすゝめ給へば、なをそのむかしよりいつくしくならせ給ひけるとかや。　さてたいしやくの給ふは、今より後、三年のいとまをとらするなりとそのたまひける。　めいどの三年はしやばの四十五年なり。　さてこそ田村將軍とすゞか御せんの御ちきりは、二世のえんとは申なれ。　有がたかりしためしなり。

さてもこの大しやうぐんは、くはんをんのけしんにてましませは、しゆじやうさいどのはうべんに、かりに人間とあらはれ給ふ。　又すゞか御せんは、ちくぶしまのべんざい天女なるか、あつきじやしんをたすけ、ぶつだうに入給ふべきとて、さま〳〵にへんげ給ふも、御じひふかき事なり。　さて末代のためしには、清水寺の御こんりう、大同二年にじやうじゆして、大同寺と申せしか、水のみなかみきよくして、ながれのすゑも、久かたの、そらものどかにめくる日の、かけ清水の寺としあらためて、なを此寺のさかの上なるたむらだうの、軒ばの松のふかみどり、千代よろつ代のかげしめて、きせんくんじゆする事、ぶつほうはんじやうのゆへなり、此さうし見給はん人々は、いよ〳〵くはんをんをしんじ給ふべし。

辨慶物語

上

れうぎんすれば雲おこり、ごらうそむけば風さはぐ。かゝるためしあるにより、むさしばうべんけいがゐたるところに、いさかひのなきといふ事なし。そも〳〵この辨慶と申は紀州くまのゝべつたうべんしんが子なりけり。(コノ間脱文アラン)(異本辨慶物語ニべんしん四十にあまり五十のゐんにいたるまで、子一人もなかりける間に、やくわうじにまゐり、申子なきせい申されけるに、さびの羽を一云々トアリ)夫ふこれをかなしみ、にやく一わうじへさんろうして、申子をそいのりける。まことにわうじふびんにやおぼしけん、とびの羽一つ給はると御むさうありて、べんしんのきたのかた、やがてくわいにんし給ひける。九月のくるしみをすぎ、十月と申にもむまれず。かくて年月をふるほどに、三年三月にてさんのひもをとき給ふ。このすがたを見れば、つねの三つ子ほどにぞ見えたりける。かみはくびのまわりまでおひさがり、まなこはさらのごとくにて、おくばむかふばおひそろい、あしのすぢほねあら〳〵とたく

ましうして、おそろしきありさまなり。　むまるゝとひとしく、ひぢをついておきなをり、東西をきつと見まわし、かしらをふりあげ、あらあかるやといふて、から〳〵とぞわらひける。　べんしんこれをみて、あさましの事共や、あたわぬのぞみを申により、鬼子をさづけ給ふ、かなしやとて、こしのかたなをぬきいだし、すでにがいせんとし給へば、はゝのじひのありがたさよ、べんしんの袖にすがり、しばらくまたせ給へとよ、らうしは七十年があひだ、はゝのたいないにやどり、びんひげしろくなりて生れさせ給ふとうけたまわりて候へば、これも三年の春秋をたいないにてをくりたる事なれば、物をいふこそだうりなれ、六しゆ四しやうのその中に、いかなる人なればわれらがはらにやどるらん、たま〳〵にんげんかいにむまれたるものを、月日のかげだにおがませずして、つるぎのさきにかけ、しゆらだうへおとさん事こそふびんなれ、いかさまにやく一わうじより給りたる子なれは、やうこそあるらんとおぼゆるに、御心にあたはずは、うんにまかせ野山にもすて給ふべし、せんあくをばしんりよにまかせて御らんせよとの給へば、べんしんげにもと思ひ、さらばともかくもはからへとて、一日だにもやういくせず、ふかき山へぞすてられけるが、さすがおんあいのかなしさは、こらうやかんもぶくしけん、又はうへてもしするならば、けうや

うせんとて、七日と申に人をみせにつかはしければ、しなん事はおもひもよらず、ある木のもとに木のみをひろふて、ぶくしつゝ、せいするものゝあらざれば、思ふまゝにあそびけるが、此つかひをみつけて、をのれは何ものぞ、われらがむかひにくるかとて、はしりかゝりければ、此こゑを聞よりも、きもたましゐも身にそはず、とつて返し、にげければ、あとをしたはんとしたりけるが、こゝかしこににげかくれ、やう〳〵にげのび、あせみづをながし、いきつぎ、べんしんの御前にかしこまり、しばらく物もいはざりけり。　女房これをみてあなあさましや、いかなる事ぞととひ給へば、さん候申もおほそれいりて候へ共、此山は鬼のすみかとなるべく候、それをいかにと申に、むまれ給ひて、いまは十日にもたゝざるに、あらけなくをひたて給ひて、それがしをめがけをひ給ふを、やう〳〵にげのびて、是まで参りたるよし申ければ、べんしんやすからぬ事かな、ころすべかりつる物を、ふかくせいし給ふゆへぞとて、こうくわいし給ひけり。　其後、此山へいるものはなかりけり。　まことににやく一わうじのうち子なれば、こらうやかんもしゆごしけるが、三七日の程をぞをくりける。　其ころ、都に五條の大なごんと申人おはしけるが、是も子のなき事を、ごせぼだいの事を心くるしうおぼしめし、にやく一わうじへ参りいのられければ、七日にまんずる

おかつき、ふしぎのしけんをかうぶりけり。　この山のかた原にうち子一人すてをきたり、とりてやういくし給へ、こんしやうは惡人なり共、ごせぼたいはたすくべしと、御むさうにあづかつて、夜のあくるをまちかね、人おほく山へ入、かなたこなたを尋けるほどに、かのおさなき人にたづねあひ、これこそ大納言殿の御むさうに得させ給ふ御子よとて、やがてこしにうちのせ、じゆくしよにぞ歸りける。　みめかたちはあしけれども、目本たゞしく、いかさまたゞものとは見えざりけり。　大なごんおほきによろこびたまひて、やがてにやく一と云名をつけ、てうあひかぎりなし。　かくてすぎゆくほどに、七さいのはるのころ、ひゑいざんさいたうはゝきのりつしけい心のばうへのぼせられけるが、此ちご成人にしたがひて、一をば十共さとり、筆を取ては、めうをゑたり。　文をまなぶにくらからず、じくわんのまごのほかに眼をさらし、しいかくわんげんのみちにもたづしやなり。　しゆえんらんぶの上手の名を得たり。　たゞしこゝにせうしこそあれ、まりなどは申におよばす、日くれぬれば、庭上のしらすにいでて、ひたゝれの袖をそばにつけ、はかまのそばをたかく取、のりこへ、はねこへ、ちからくらべ、ゆみはつねのあそびとて、太刀なぎなたのさやをはづし、をふつ返しつ、ぬけつくゞつゝ、ぶげいのたしなみしきりなり。　りんばうのちごたちとがけあわせ、いさかふ事せひなし。　そのゝち、かちをちかづけて、一尺二すんにかなぶちうたせ、八かくにかどをたてゝ、かざ〱にやいばをつけ、あひのひしをばいかいかとほらせて、こくしつにぬらせ、もち所はふたへかわをたゝみ、がんぎがたにまかせたるを、みぎのこわきになし、あつこう・ちやうちやくする間、らふにやくしゆがくの者ども、若一殿の手にかゞり、きづをつかぬはなかりけり。　はじめのほどこそ師しやうにも父大納言にもめんじけれ、此事度々におよぶ間、一さんの大しゆことごとくごうしんにそせうをこそいたされけれ。　そも〱當山は一ちご二山王の事なれば、ことさらてうあひ申べきに、若一どの御成人にしたがひて、いよ〱しゆがくの思ひにこゝろをそめ（られはイ）これさうおうしてめでたかるべきに、そのぎはかつてましまさず、うやまひ申せば、かへつてあつこう・ちやうちやくにんじやうにおよぶ、よし〱しゆとの事はともかくもあるべし、すでにちごたち、其ほかのわらんべどもにあまたのきずをつけ、生れもつかざるかたわになし給へば、そのしんるいども、そせう、たにことなり、今より以後、當山に心ざしあるとても、おさなき者一人もあぐる事あるべからす、にやく一殿一人に一山のそせうをむなしくし給ふべきか、いさゝか御はからひあるべしと、ごうしんに申されければ、けいしんの給ふやう、しゆ

き尤いはれあり、いかさま此ちごを親父のかたへをくり候べしとぞ申されける。
やがて此事をちごにの給はんとしけれ共、ちごは人のけしきをみては、犬の眼にか
どをたてゝみ出し、ほうぼねわれ、ちすじさしあらわれ、とき〳〵のはがみをしてに
らまるゝ間、師しやうなれども、よりかねてぞまし〳〵ける。去程に、やう〳〵きげ
んをとり、ぶけいのみちの物語り、一つ二ついひいだし、其後の給ひけるやうは、御へ
んは萬事にさがしうましませば、げん世たうらいまでも、たのもしく思ひ奉れども、
一山のそせうこれ〳〵にて候へば、先しばらくかたはらにもしのばせ給ひて、しゆ
とのきをもやわらげて、其後おつてれうけん有べしとおほせければ、ちごは是を聞
給ひて、さてはそれがしをにくみてのたまふぞとこゝろへて、さらば一おどしおど
さばやと思ひて、ほうぼねをいからかし、ちまなこになりて、我をこさがしきとおほ
せられ候は何事がさがしく候やらん、ぜひ承はらんとぞいひける。慶心はせきめ
んなしておはしけるに、ちごつく〳〵とあんじかへし、もとよりわがなしたるあく
ぎやうなれば、かさねてとかくのぎにもをよばす、さらば御坊いとま申とて出ける
が、こゝろのうちに思ふやう、日本國より此山にのぼりては、かみをそるぞかし、われ
この山にひさしくすみ、ぞくたいにて寺をいでんこそ、本意ならね、かみをそらばや

と思へども、ばうをさへおひださるゝうへは、いづれのばうへかたちよるべき、つら
〳〵ものをあんずるに、日本國の中に、おそろしきものたゞ三人もちたり、すてられ
たりといへども、おやなれば別當、又やうふにてましませば大納言、さては一字千金
のかうをんなればりつしなり、又人をたのみてかみをそらせば、ししやうのごとく
うやまふべし、あらむつかしの事やとて、みづからかみをときわけて、じぞりにこそ
し給ひけれ。やがてかいをたもたんとて、かいだんさしてゆきければ、だうもりの
法師これをみて、くだんのにやく一どの來り給ふぞや、たうざんをばはらはれて、い
つのまにかしゆつけし給ひけるやらん、あらおそろしや、この人に見あひてはかな
ふまじとて、戸をおしたてゝ、ぢやうをおろしにげにけり。若一殿來りて、こゝをあ
けよとの給へ共、おとするものなし。にくきものゝふるまひかな、一々にかうべを
うちくだきてみせん、たゞしかいをたもたんに、せつしやうしかるべからず、あけず
ばもの見せんといふまゝに、とをおしやぶり、うちへ入てみ給へば、人一人もなし。
そのゝち、人もゆるさぬかいだんを、一時ばかりぎやうだうして、名をも佛の御まへ
にてつくべし、わふぞんさしもへだゝらず、うちも方なきものしゆする事あるべか
らず、五かいのうち三かいをばたもつまじ、よく〳〵御ほとけ聞給へと、みづからい

ひ、みづからこたへ、はやかいもたもちたるとて、ぐぎやうらいはいして、十町ばかりゆく所に、はゝきのちうぎじゆんかいとて、六十あまりのらうそうちやうけんの衣に、せいかうのけさをかけ、長刀をつえにつき、ゆきむかふ。其時、辨慶たちより、袖をひかへて申やう、これはかねてもきこしめしおよびつらん、じせん御らんじたる事も候か、たうざん一のくせものに若一丸、たゞいま出家仕りて候、名をばさいとうのむさしばう辨慶と申候、法師にはなりて候へども、父にもしやうにも捨られて、ごろもを一ゑもたず候、しかるべくは、御坊の御ころもをたび候へといふ。しゆんかい聞て、いやとよ、思ひもよらずと申されければ、辨慶きひて、そなたはおもひよらず共、こなたが思ひよりて候うへはといふて、まなこにかどをたてければ、しゆんかいこれをみて、ゑせものと行あひ事しいだしては、あしかりなんとおもひ、やがて言ばをなをし、さらばわがばうへ入せ給へ、かはりの衣を参らせんといへば、辨慶申やう、御ばうにて給はらんもおなじ事、たゞこゝにて給はるべしといへど、ぬがれざれば、べんけいはらをたて、ごしをかゞめ、ひざをかゞめたるほどは、あしだをはきたるしゆんかいとおなじやうに見えけるが、眼にかどをたて、つゝとのびあがり、にくき御坊のふるまひかな、しやくそんごうのしゆぎやうを、さだめてきゝこそをよぶら

ん、さつたわうじはいかなればうへたるとらに身をあたへ、じひ大わうと生れ、はどのはかりに身をかけてこそ、しやかによらいとはげんし給ふなれ、さまでの事なしとも、御ばうほどの大名が、衣一ゑにさほどつゐへはあるまじ、ころもやおしき、いのちやおしきといふまゝに、すでにくだんのかなぶちにてうたんとする。其とき、ぬぎ申さんとて、いそぎころもをぬがれけり。したなる小袖もぬぎ給へ、その大くちもぬぎ給へとて、かたびら一つにはぎなして、われはもろきこそでに大くちをきて、ちやうけんの衣にせいかうのけさをかけ、ぬりあしだをはき、長刀つえにつき、よく候か、御ばうといふ。あしきとは、いかでいふべき、一だんよき法師にて候とおほせければ、ほめられ申て給へば、みにとつてはめんぼくなりといひけるが、心の中に思ふやうは、あさましや、たゞいま佛の御まへにて、ちふどうかいをたもちつるに、ぬすみたる事にてはなけれ共、おしむ物をおさへて取は、もしかいをやぶりたるにやならんと思ひて、見ぐるしく候へども、きがへを参らせんとて、ひたゝれ大くちにいろ〳〵の小袖を、これき給へ、御ばうと申せば、この年にていかでか、さやうなる色々しき物をき候べきとの給へば、さやうにおほせられ候へば、一かうめんぼくをうしなひ候、人のよきものに、あしきものをかへたるやうになり候、只りをまげてき給へと

いふて、にらみつけたる眼ざしの、おそろしさに、ふるい〳〵ぞき給ひける。かんだうをゆかんとすれば、大道へおひ出し、さばかりのらうそうに、御どうしゆくなくては見ぐるしく候、御とも申さん、中だうへ御入だう候へとて、さきにおつたてゝぞ參りける。中だうよりしゆんかいいとまごひして歸らんとし給へば、すゝむるくどくなればとて、山わう七しやへも御さんけい候へとて、せんだちにしてある程のだうしやぶつかくのこらず參りける。もとよりしれたる物なれば、なぎなたのゑを取のべて、らうそうのかしらのうへをひらめかすあやうさに、いとゞこしをかゞめてぞあゆまれける。六十あまりのらうそうのこしをふたへにかゞめて、いろ〳〵の小袖にひやうもんのひたゝれきて、辨慶をこうけんと見えければ、老てふたゝびちごになるとは、かやうの事をや申べき。やうやくその日もくるゝほどに、じゆんかいのばうへをくり申て、かゝる御ころものこゝろざし申つくしがたく候、御ばうをばよくみおき申候、又此衣ふるく成候はゞ、何時も心おかず參りて申うけ候べしといひすてて、京の方へぞのぼりける。さて辨慶思ふやう、とても山はいでつ、ゑせものゝ名を取うへは、日本國をしゆぎやうして、いさかいをはじめて、わがてうに、我にうへこす者なくば、たうどへ渡るべし、もし又われにまされるものあらば、其とき、

大道心をおこして、じやうぶつすべし、なを〳〵上のめいじんあらば、しう共うやまひ、天下をたなごゝろのうちににぎるべし、とかくいさかいをせんには、太刀かたななくてはかなふまじとて、三でうのこかぢがもとにゆきて、申けるは、これは右大臣むねもりこうのつかひにて候、太刀を四尺六寸、かたなは三尺九寸、おなじく一しやく八寸のうちがたなあひそへうちてしん上有べし、やがてぶぎやうにはそれがし參りて候とて、まほりつめてぞうたせける。きずあれば、うちなをさせ〳〵しけるほどに、百日と申にたちかたなをぞ打出しける。辨慶おほきによろこびて出させ給へ、御ひきで物よきやうに申て參らせんとて、うちつれてゆきけるが、こゝにまたせ給へとて、かぢをば門外にまたせおきて、われは御もんよりかいちがひてぞはしりける。一日まてども見えず、日はくれぬれ共、あまりにおそさに、むねもりへ參り、御そうしやをもつて、此よしを申あげければ、まつたくさやうの事はなしとおほせらるゝあひだ、むねちかはちからなくて、そくばくそんをして、わかやどへぞ歸りける。そののち、辨慶たちかたなはふそくなし、たゞししやうぞくに事をかきたり、其ころ五條の吉内左衛門とて、かなざいくの上手のありけるもとへゆき、小松殿の御つかひなり、此ぐそくどもにしやうぞくゝして參らせ候べし、やがてそれがしぶぎや

うに參りたりといふ。されはそのころ平家のおほせといへば、何事にかいぎにお
よぶべき、やがてりやうしやう申たり。さて何とかつくり申さんといひければ、辨
慶申けるは、上のおほせには、太刀は竹にとら、かたなはしゝにぼたん、いかものづく
りに、まつしろに作らせよとの御事に候といへば、やすきあひだの事とて、このみの
ごとくに作り出しける。辨慶よろこびて、かなざいくののぶさだをあひぐしてこ
まつ殿へまいりけるが、みちにて申けるは、此間それがしをよく御もてなし候こと、
又は太刀かたなのかなぐよくいでき申候、かた〳〵もつてよきやうに申、御ひきで
ものたてまつらん、しばらく御まち候へとて、うちへいりにけり。日のくるゝまで
まち居けれ共見えざりければ、此よし小松殿へ申あげけるに、さやうの事はおもひ
もよらずとおほせくだされければ、ちからおよばす歸りけり。七條ほり河に四郎
左衛門吉次とてはらまきざいくの上手ありける所へ行、是はひやうごのかみより
まさの御使なり、御しゆつしのひたゝれのしたにめすべき御ようなり、くろいとお
どしのよろひはらまきおなじくさうのこてすねあてともにとゝのへ參らすべし、
引出物の事はのぞみのまゝなるべし、やがてぶぎやう申べしといひて、さねをえら
び、かな物をこのみけり。くもにほうわふのさうのこて、びやくだんみがきのすね

あて、はらまきそへて、御ぶぎやう御らんせよとぞいだしける。辨慶これをみて大
によろこび、御まへにて、それがしきてぐそくのかゝりを見申候はんとて、かのはら
まきにこぐそくさしかため、くだんの太刀かたなうちかたなどもとりつけて、かな
ぶちとりそへ、其後、四尺六寸の太刀をするりとぬき、つぼのうちへとびいて、あら人
きりたやと大ごゑあげて、おどりあがり〳〵しけるが、かゝりのさくらをずんとき
りて、にほう立にぞたつたりける。よし次これをみて、思ひ出したる事あり、此あひ
だ三條のこかぢと五でうの吉内をたらしたる法師のあるといふは、是なるべし、ひ
きでものこそとらざらめ、ぎられてかなふまじとて、いそぎうちへ入、しとみやり戸
のかきがねをかけまはし、すきまよりのぞきければ、辨慶申やう、くるしうも候まじ、
出させ給へ、はらまきいますこしものかゐに候ほどに、ちとはしりて見せ候べしと
いひて、くだんのひらかけをはき、つゐぢをおどりこへ、せんごのくさずりをゆつり
あわせ、三度つゐぢをうちそとへとこえけるが、其後はいづくともなくうせにけり。
よし次申けるは、そんの事はせひなけれ共、此ものが目のまへにありつるほどは、い
かなるめにかあはんずらんと思ひしに、うせぬる事こそうれしけれとて、大いきつ
ひてぞゐたりける。さてべんけいつく〴〵と思ふやう、すでに佛の御まへにてた

もちつるちうさうかいをやぶりぬるこころあさましけれ、さらばさく人のもとへゆき、たからをこひ、此三人の物どもにさくれうをとらせばやとて、其ころわたなべげんばのせうとて、京いなかにならびなきふけんの物と聞えければ、かれがもとへゆかんとて、むさし殿が共日のしやうぞくには、くだんのはらまき、さうのこてすねあて、太刀かたなさし、なぎなたつへにつき、家の四はうを見わたせば、たいぼくどもうへをき、やぐらひまなくあげ、四町まちに大堀をほり、らんぐひさかもぎひきかけて、わかたう数十人やぐらにのぼり、ゆみやひやうぢやうをさゝのへ、しせんの事あらば、まことにようにたゝんと、われも／＼となみゐたり。　されども辨慶人を人ともおもはねば、ばんしゆうけいごのものにもめをかけず、もんのうちへゐんなひにもをよばず、いるまゝに、庭のしらすをしづ／＼とあゆみ、ひろえんにちかづけば、ていしゆの行春むらさきにくちばかさね、せいかうの大くちにこがね作りのかたな前さがりにさしなし、はらまきにかぶとあひそへ、小長刀をたてをき、いろ／＼のさかな、大づゝへいじたてならべ、只今のみたるとおぼしくて、でうしさかづき取ちらし、家の子らうどう数十人ごしやうぎすぐ六などをさせ、まことにけふある所へ、辨慶大のこゑにて、これはをんごくより熊野さんけいのじゆぎやうじや也、らうまいに

たび候へと云。　ゆきはるこれを聞、おほきにはらをたて、こはいかにしゆぎやうじやだうしんあれなかれ、ころもをきけさをかけて、まことにうへるをかなしむこそあれ、ひやうぐをちやくし、くら一つとこうこそふしぎなれ、いかさま夜打かふたうのたぐひとおぼゆるぞ、わかたう共あれめしとれといふ。　辨慶聞て、ゑさせん物をこそくれざらめ、たうぞくの引かけこそはにくけれ、いで／＼、さらば物見せんといふまゝに、ゑんへおどりあがる。　是を見てゆきはるにげんとする所を、つつとよりて、行春がうわごしをみじととり、いつのまにかぬきたりけん、四尺六寸の太刀にてくびをなづるやうにして、つみつくりにころしはせじ、たゞいまはきたるくちのためしをならはさんとて、太刀のきつさきよりつばもとまでひきあて／＼しけるほどに、ゆきはるはいきこゝちはなかりけり。　数十人のわかたうどもさしより、たちかたなをぬき、さわげ共かひなし。　その時辨慶申やう、矢の一すじもいんとせば、ほそくびねぢきりて、御へんどものこしのかたな一々にふみおりてすてんずるぞとて、大のまなこにかごをたて、のびあがりたりければ、其たけ七八尺もあるかとみゆる大の法師なり。　いかなるきじんてんまといふとも、是にすぎじとぞ覺えける。
さるほどにゆきはるが女房はしりより、ゐなかさくにんのならひ、人をみしり申さ

ぬなり、今のていしゆがあつこうをば、ひらにはらはにゆるし給へと、手をあわせておがみければ、辨慶もとよりかうこそ有べしとてゆるしけり。げんばのせうやうやうにげ、戸のくちにふるいゆめこゝちして、うちうつむきて居たりけるに、女ばうたちよりて手おひ給ひたるかとゝへば、この女房をむかへて、いまだ三日なるに、ふかくのいろを見せぬるよと、はづかしさにこゝへ來りて候へばさて、にげたるとはおもひ給ふなかたきとひつくみてせうぶをけつせんと存つれども、いま一度御目にかゝるべしと思ひ、いままでながらへ候なり、御坊の太刀のきつさきが、うしろにあたりつるか、きれたか、きれざるかといはんとするが、あまりあはてゝ、ふるひ〳〵云やう、御ばうの太刀のきつさきがうしろにあたりつるか、せなかはうしろになりたるか、よく見給へといふ。女房こらへかねてわらひける。辨慶はちやうだいまでずんとゆく。すぐ六ばんにこしをかけ、あふぎをひらきつかひけるが、またはら〳〵とたゝみて、くさずりうつてひやうしをとり、いまやうをこそうたひけれ。一度はかうと思へども、此世はほどもなきものを、ゑいぐわははるのゆめ、くさ葉のうへにおくつゆの、かせまつほどのいのちにて、なにとてたからをおしむらんと、かれうひんのこゑをもつて、うたひすましたりければ、女ばう此よしうち聞て、われらせんせのしゆくゑんにて、こんじやうとくの身となりたれども、けふけするせんちしきの御はしまさぬに、いかさま是は佛のはうべんにて、むじやうてんへんの浮世をしらせ給ふとおぼゆるなり、たからはなにをかめさるべき、うけ給はつて參らせんと云。辨慶きひてよろこび、女房はおとこにもまさりたるせん人ぞとおもひ、あらはづかしやと思ひながら、申かけたる事なれば、たからを見申て、ぶんりやうを申べしといへば、くらをあけさせ、數々のたからを見せけるに、金ぎんべいせんは山のごとく、ゆみや太刀かたな、そのほかまき物あやにしき、何にのこる事はあらじ、御このみしだひにまいらせ候はんといふ。辨慶もとよりよくしんはなし、おほくののぞみなし、おりものゝ小袖三十人してもつほど給るべしといひければ、女ばう是を聞、あらこと〳〵しうおほせられけるが、さほどやすき御のぞみかや、たからと仰候へば、くらのひとつもめさるべしとぞんしさむらふに、いそぎとゝのへ、人そくどもに申つくる。べんけいこれをうけとり、かゝる御心ざしこそ申つくしがたけれ、いかさまこの小袖みなになり候はば、又申入べきとて、京のかたへぞのぼりける。此人そく共を十人づゝ、かのさいく三人がかたへをくりける。思ひのほかの事なれば、さいくのものども、とかくの返事にもをよばず、なをもいかゞとおそろしさに、

せきめんしてゐたりける。 かくてべん慶は熊野さんけいとこゝろがけ出けるが、日くれければ、あるふるだうの大なるにたちよりて、佛だんのしたにいり、せんごもしらずふしゐたりければ、夜はんばかりの事なるに、人のこゑしければ、ふしぎにおもひ、耳をそばだてゝ聞けるに、ぬす人どもがあつまりて、こゝかしこにての夜うちがうたうさんぞくかいぞくの物語をし、しゆはんをさゝのへふくしけるが、なかにもおとなしきもの申けるは、こんやのよりあひいかにさだめ給ふぞ、せんなきさけをすごして、こゑたかにめん／＼の手がらばなしはむやく、かべにみゝ、てんにまなこと申ぞや、ひそかに御だんがう候はすば、九郎はまかりたち、りんがうにて、やせうしの一疋もひきあしたのいちにてしろかへねば、さいしをば何とはぐくみ候べきと、事あたらしく申ければ、つぎなるものこれをきゝ、尤にて候、それがし思ひよりたることをりを申べし、たれかれと申共、わたなべのげんばのぜうがもとほどなるたからのやまはあるべからず、たゞし夜打などにて、あつたらたからを取のこさんはむねんなり、大舟にとりのりて、ひやうぐをぶねそこにかくしをき、一度に四はうよりおしよせて、せめやぶらん事あんのうちなりとて、一身どうしんして、さらばあすのたつのこくに、せいをそろへ、ひつじのこくにおしよすべしと、さだめて、みなたい

さんするを、辨慶聞て大によろこび、げんばがおんをなにとしてかおくるべきと思ふところに、ねがふ所のさいはいとて、やがてげんばがもとへぞ行けり。 いまださうてんの事なれば、ばんしゆはなきか、あけよとて、あげさせて、しゆでんをさしてゆきければ、ていしゆきいて、あらあさましや、又れいの御坊きたるぞや、いかゞせんとふるひける。 女房これを聞、ふかくなりとよ、きわめてたけき人をば、よくもてなせば、かへつてちうをなすならひあり、みづからにまかせ給へとて、やがてわかたう二人出して、じやうじ入、しゆはんをすゝめけり。 そのうち、辨慶、まだけふはつとめをせぬとて佛せんに参りて、ほけきやうをどくじゆする。 もとよりをんきよく一りうきわめたれば、きくに心もたえがたし。 女ばうも、ゆきはるも、そのほか、家の子わかたうども、いままではおに御ばうとおそれしが、此きやうをちやうもんして、かゝるちしきのあるぞとて、かんるいきもにめいじけり。 さるほどにじこくうつりて、四方よりむしや共が、みち／＼て、げんばがたちへおしよする。 何事ぞとたづぬれば、くばうよりのおほせにて、大せいをもつてせむるなりとおめきさけぶあひだ、ちがきあたりの物一人も出あはず、げんばがたちをふたへ三へにとりまはし、ときをどつとぞあげたりけり。 ていしゆもつてのほかにぎやうてんして、きもたましゐ

も身にそはず。さりながら行春もくつきやうのようがひなれば、もんをさしかため、ざぶなくせめいるべきやうもなし。げんばがらうだうやぐらへはしりあがり、矢たばねときさんざんにいたりけり。辨慶はかねて聞たる事なれば、おどろくべきにもあらず、法花八くわんおはりければ、もとのごとくまきかへして、一けん一念すいきじやとくとかれたれば、いはんや二心なく一佛せうにおいては、此經のくりきにて、只今うちじにせんもの共、しゆつりあくじゆとんせうぼだいとゑかうして、目しばたゝきてゐたりけるが、かたき大せいにてせめければ、たちのうちのものどもなんぎに見えけり。そのとき行春、おなじく女ばう、辨慶のまへにひざまづき、手を合、御すけ候てたまはれと申ければ、やすきほどの事とて、じづ〳〵とものゝぐをさしかため、ぐだんの太刀はき、うちかたなさすまゝに、大長刀かなぶち取ぐしてもちけるが、四方をきつと見わたして申やう、みかたのもの共たしかにきけ、もんをひらき、そら引して、うちへひき入て、其後もんをさし、橋をひきはづせと下知しければ、辨慶が申やうにしたがつて、もんをひらき、きつて出たゝかひければ、かたきよろこびて、一所になりてせめたゝかふ。もとよりてきをひきいれんとのしたくなれば、そら引するとはしらずして、くつきやうのむしや三百余人、きつさきをそろへ、せめいりける。すでに大庭さしてみだれいる。みかたのせいはやすみ給へ、この法師があらきりせんとて、なぎなたかなぶちをばたてをきて、三げん渡りのなげしのあら作りしておきたるを取のべて、すそを一度にさつとはらへば、よきむじや數十人うたれける。二三度はらひければ、たちまち此木にあたりて、こしより下をうちおられて、ばんしはんしやうにしてふしたる者、百七十人にあまれり。おほもん小門よりおつるものどもをばおひつめ、三十人うちとゞむる。五町七ちやうにげのびて、ふしたるもの數をしらず。みかたはきようがいにたてこもつて、たゝかふほどに、手おひもなかりけり。そのゝちゆきはる、おなじく女ばう家の子らうだう共よりあつまり、辨慶をこれは神かほとけか、たゞ事にて有まじとて、手をあわせらいはいする。去程にべんけい申やう、先度三十八人の人ふにもたせ給はり小袖にも、このものどもがぐそく太刀かたな、けうりやうすれば、さのみおとり候まじきとぞ申ける。扨行春はいそぎ上らくし給ひて、小松殿へおほせあげられよど申ければ、べんけいがおしへにしたがひ、京とへ申あげければ、あんのごとくこまつ殿きこしめして、大にかんじ給ひて、かうみやうしんびようなりとて、御しよりやうをくだされ、いよ〳〵はんじやうしけるとなり。其後武藏坊熊野へさんけいをまづ思ひとゞ

まり、いさかいしゆぎやうにいでにけり。ほくろくだうに下りけり。やがてゑちせんの平せんじへ参り、佛せんにしばしねんじゆしてあんずるに、ものをわすれたるやうなるが、ふしぎなり、もしみちにてなにかおとしたるかと、色々あんじけれども、さる事なし、よく〳〵思へば此四五日いさかいをせずして、とせんなるが、是にてあるべし、さらばいさかいして、ほとけのゑかうに入べしとて、寺中をありきまはれ共、じがるべきおひてなし。あるばうへ立入て、見ければ、ちご大衆、とをさぶらひより、にはのしらすまでなみゐたり。座上にはしゆゑんのていなり。庭上にはまりをける。此中にも辨慶があひてにとおぼしきものはなけれども、けふいさかいをせずば、いかゞ有べきとおもひけり。そうじて辨慶かたきの大せいあるをようこびて、門より内へすいさんして、物申さんといへば、何事ぞとこたへける。まことはいふべき事のなければ、御坊たちのけまりせ給ふ物は、なにといふものぞと申ければ、人々まりをばけずして、おこがましくうちわらひ、これは物をしりたる者はまりと云ぞとこたへければ、辨慶此ことばに取つき、すゝみよりて申様、しらぬ物なればこそとひ申せ、あらうれしや、いまこそよく承りて候へ、まりと申ものは御ばうたちのかしらによくにて候といへば、しゆとの人々はらをたてゝ、けうがる法師のことば

かなといひければ、辨慶かさねて云やう、此ほうしがひが目にて候か、かゞみを御らん候へ、まりもかしらもおなじやうに候へば、われらがやうなるそこつ者は、めん〳〵のかしらをもけつべしといひて、大ぐちをあきてわらひければ、わかき大しゆ大にはらをたて、出さらば物見せんとて、おちえんよりはしりあがり、めん〳〵に太刀長刀のさやをはづし、我さきにとかゝりければ、べんけいはよろこび、誠に佛神のはからひにて、けふのなぐさみまふけたり、あらいたいけの御坊たちや、こゝは所せばくして、あしもと然るべからず、ともぐそくにてあやまちし給なよ、こなたへ出させ給へとて、大庭さして出けるが、こしよりよこぶえを取出し、ねとりさまして云やう、うれしや、けふはすこしなれ共、いさかいをしはじめたる事のおもしろさよとて、あふぎをひらき、これへ〳〵とまねきけり。しゆとのなかに、いにしへ山法師なりしが、みしりて、しばらくしづまり給へ、せんなきしにぐるひむようなり、是こそおとに聞えたる西塔の武藏坊辨慶なれ、一山がおこりてもたやすくはうたるべからず、むやく〳〵とて引かへせば、すゝむ者こそなかりけれ。其とき辨慶やすからず思ひて、おのばうへ行ては、しゆぎやうじやに物見せんと、おほせられし大しゆは、これにましますかといひ、このゐんちうへゆきては、もの見せんと仰候かた〳〵は、いづくに

渡り候、げんざんに入申べしとはしりめぐれども、出あふ者こそなかりけれ。此うへはあひてなければ、ちからなしとて、へいせん寺をぞ出にけり。ほくろくだうのいさがいの門出よしとて、よろこびける。これより又中國へ下りけるが、ほどなくはりまのしよしやへ參り、佛せんにて心しづかにねんじゆして、じんぎれいちしんのごしやうをさきとして、けつしやうを五かいとたもちたり。佛の御まへに六しゆのくもつをとゝのへて、三つのくげんのこうをつみ、いんぐわの道理心にかけて、ことさらつみをいましめたり。しばしさんろふしておりければ、けふがるふせいの法師かなと、しゆざみなこれをてうあひす。有人申けるは、西塔の武藏坊辨慶とて、めいよのおほおこのものと聞つるに、念ごろなるていにて、きやう法をなしけるふしぎさよ、まことの辨慶にてはよもあらじと申。又ある人申けるは、惡につよきものは、かならずぜんにもつよしといふ。すでに大しゆ二人むさしと云、いや辨慶にてなしと云、そうろんにこそおよびけれ。又若き大しゆ申けるは、ろんはむやくたゝなぶりて見よかしといへば、みな尤とてやがてむさしにおほさげをすゝめけり。本よりも大酒にて、もつてのほかにゑひ出ければ、大かうだうのかたはらにせんごもしらずふしたるを、よき折節と思ひ、大衆より合、右のほうさきにあれたる駒をかき、一首のうたをかく

むさしばうあれたるこまにさもにたり、ひやうしをはけてつなぎとめばや。

またひだりのつらに、ひらかけをかきて、

べんけいはひらかけにこそにたりけれ、めよりはなをすげてはかばや。

べんけい是をばしらずしておどろきて、時うつりなんとて、佛の御前にて花をさゝげ、らいするに、ちご法師むさしをみてわらひければ、今にはじめぬむさしがつらぞかし、もし日比のあくぎやうつもりて、はなばし人にかゝれたるかと思ひて、さぐりけれ共、こくそく一つもかけず、扨はすいけのはたにゆきて、水かがみをみれば、かゝる事を見出て、あら道理のわらひ事や、人のうへならばさこそおかしかるべしと、みづからかゞみにむかひて、よこ手を打てわらひけるが、辨慶思ふやう、人のなしたるわざはひをかへさでいかゞ有べきと、此はぢをすゝがんとすれども主をしらず、いかゞせんとおもひけるが、もとよりりこんは人にすぐれたる事なれば、きてんを得て、其ころのちやうり、かためつぶれて、聲小おんにておかしかりけるを、らくしゆにして、とがめん所をたよりとして、ほんまふをとげんと思ひ、やがて大かうだうのはしらに、

しよしや法師、われひきめにそにたりける、かためしいてはいつるおとなし。おりふし、ちやうりの同じゆくえだうしけるが、是をみて、此よしかくと語りければ、ちやうり大にいきとをり、同宿・わかたう物のぐひし〳〵とさしかため、かうだうへのぼり、かねをはやくつかせ、山中のしゆをぞまたれける。　かねにおどろきて、大しゆは、よろひきるものはかぶとをきず、ゆみをもち矢をとるものもとりあへず、みな大かうだうへぞのぼりける。　ちやうり大しゆにむかひて申されしは、我當山に上りて六十余年のせいさうををくりむかふ、かための事はきん年らうたいによつてぞんぢたる事其かくれなし、こゝろはもとよりせうをんなり、いまはじめてらくしよにおよぶふ事、いこんせんばんなり、あひてをしらぬ事なれば、せうぶをけつするにあたはず、しよせんはぢをきり、老ごのはぢをきよめんとて、すでにかたなのつかに手をかけければ、大しゆおの〳〵取つきて、おほせもつとも、よぎなしと、さま〳〵に申とゞめ、大衆ゆめ〳〵しらざるよし、きしやうもんをぞかいたりける。　さてはきやくそうしゆきやうじやのわざやらんとて、きやくそうしゆぎやうじや一々にからめてかうだうのまへに引すへたり。　辨慶は佛せんにつとめしてゐたりけるが、いまはじふん能なりぬとて、おひの中よりくだんのしやうぞく取出し、かちんのひ

たゝれの菊とぢしげくしたるをき、くろいとのはらまきこてすねあてさしかため、四尺六寸の太刀をはき、うちかたなにかなぶち十文字にさしそへ、弓手のわきにまさかりをもつて、めてのわきに長刀かいこふて、たかあしだをはき、大しゆの中へおどり出、四方を見まはし、あらおびたゝしの大しゆやといひて、からめおきたるしゆぎやうじや共を、くだんのうちかたなぬき、一々になわをきりてはなす。　其後、辨慶まなこにかどをたて、大しゆたちをはつたとにらんで、當ざんの大しゆは、心がじやけんで、くほうしゆかくの心なし、かゝる所にましますしゆぎやうじやこそはかなしけれ、なむさんぼうとゝなへて、二王立にぞ立たりける。　其時、ちやうり、一の弟子しんをんばうめうしゆんといふ人、むくらんぢのひたたれきて、三枚かぶとのををしめ、三尺一寸いか物作りのたちをはき、しらえのなぎなたわきにかいこうて、大衆の中よりすゝみ出、大おんじやうにて申やう、そも〳〵たれがはからひにて、あの御坊は、人もゆるさぬに、しゆぎうじやのなはをばきりたるぞ、其うへしゆとのましまス所に、たかあしだこそらうせきなれ、それぬぎ候へ、ぬがずばはからふべしとぞ申ける。　辨慶是を聞、あざわらひして申やう、あしだをぬげとや、當山に武藏がうやまふべき人なし、わうもましまさず、師しやうもなし、扱たれをかうやまふべきぞ、たゞし

仁義れいちしんの法なれば、いかゞぬくべきなれ共辨慶かつらにかゝれたるあしだにてしゆとのつらの上をはきたり共、ひが事にてはよもあらじ、はしらにかきたるうたはそれがしがわざなり、さら〳〵しゆぎやうじやたちにとがあらじ、はかり事をもつてしゆとをあつめ、その中にてあひてを尋きがんためなりといふ。しんおんばう聞て、よし、たれもせよかし、御坊にそれほどあつこうせらるべき者、當山におぼへずといふ。辨慶きいて、さては御へんが、きたるか、かゝざらん物ゆへに、くち聞がましくさし出て、まつかうちわられなといふ。その時、しんおん、なにかはたまるべき、長刀取なをし、武藏にとんでかゝる。辨慶かいちがふて、なぎなたをうばい取て、かうだうのうへになげあげたり。しむをんなぎなたをとられて、太刀をぬいてきつてかかる。べんけい是をみて、御邊も心はがうなりとて、うちそばめて、是をもかうだうの上になげけり。ぐそくどもはとられて、おまりにせんかたなさに、あたりなるあんしつへはしり入、大なるもえくひをもつて、うつてかゝる。むさし坊うちわらひ、ばく中に火をふるは何事ぞ、あやまちするなとて、是もうばい取て、おなじくたうの上にうちあげたり。しんおんこちへかね、むずとくまんとはしりかゝる。辨慶につことわらひて、弓でのわきにかいはさみ、つれ〳〵なるに、小法師共

のかしらをわりてあそばんとて、かなぶちをぬき出し、かぶとのはちをちやうとうつ。心恩が同宿にたんごばうこれをみて、ふしなはめのようゐをくさずりながにきなし、五まいかぶとのををしめ、四尺あまりの大太刀うちふり、きつてかゝる。辨慶がまつかう二つになれと、ちやうとうつ。いつのまにかは取合、わきにはさみだる心おんにて、ちやうとあわせたり。たんご坊がたちより、辨慶がしんおんをふりまはすは、いとかろげに見えたりけり。そのとき、しんおんわれをきるな、たんごばうといへば、たちをすてかゝるを、むさしたんごばうをもまたわきにはさんで、かぶとと甲を一度にからりと打あわせ、能かねのをとかなどいふをみて、犬じゆはこらへかね、一度にたちなぎなたのさやをはづし、きつさきをそろへ、きつてかゝる。武藏串やう、じこうじとつくはよといひて、二人のかぶとゝかぶとをしたゝかにうちあわせければ、みぢんにくだけて、じににけり。そのゝち、かた手に長刀、かた手にまさかりをもつて、きつてかゝるは、てんぐばうひらめくごとく、辨慶はきりあてられねば、手もおはず、あたる矢もさねよきはらまきなれば、うらかゝず。其後、太刀をぬき、せんごさうを指かためて、一方へおひむけ、きつてまはるあひだ、たちまちむねとの大衆五十餘人きりふせて、大せいを東西へはつとおひちらし、辨慶、中に有かと思

へば、ぬけつくゞつつ、せんご左右をとびめぐる程に、いる矢もあたらず、けつく大衆おほくいころさるゝほどに、いくさ中ばに、風しきりにふきあげて、かうだうのうへになげあげたるもえくいたちまちにやけあがりければ、しゆとこれをみて、あなあさましや、きやうろんしやう經を取出せとて、十方へはしりける。辨慶是をみて、もんせんさして出けるが、立歸り、申やう、がらん佛たもうらみ給ふな、しゆとの惡ごうをいたさば、いく度も御だうのわかれし給ふべし、さりながらはうべんをもつて、此たびは、やがてべんけいが作りて參らせ候べし、いよ〳〵衆とのあくごうをしめし給へとて、京へぞ上りける。しよしやより京へは、上下四日あまりのみちなるを、馬のこくのおわりにいくさはてゝ、さるのおはりにきやうへのぼりつきて、まづ内裏へ參り、はりまのしよしや山、けふの馬のこくにゑんじやうつかまつりて候、いそぎ御ざうりうあるべし、しからずば天下の御大事いでくべし、これこそがらんの御つかひなれと、大をんじやうをもつて申、いづく共なくうせにけり。又入道相國・小松殿へもゆきて、今のごとくふれよばわりて、うせにけり。去程にきんちうにもおどろきおぼしめして、入道相國のもとへ、ちよくしをもつて、御尋あり。やがてこまつ殿よりしよしやへはやむまを立て、尋らるゝに、上下四日にはせ上りて、事の由申け

れば、入道相國父子ともに參内あつて、かゝるふしぎこそ候はね、馬のこくの事なるが、さるのこくにつげたる事、人げんのわざにはあらじ、まことにがらん佛ぼさつの御はからひにて候、すなはちじやうかいこんりうの御うけ申され、いそぎかぢばんしやうをめしくだし、やがてしよしや山こと〴〵くたてられけり。

下

そののち、辨慶又しよしやへ參り、佛の御まへにて申やう、此御寺をやきたる事、わがなすわざなれども、さしたるつみにてはよもあらじ、こんりう申も又べんけいがれうけんなり、ふるき御堂をあたらしくつかまつりてまいらせ候へば、そくばくの御奉公ぞかし、されども此べんけい、ざいほうをもたねば、ほうがには入がたし、もとよりあくぎやうをこのむ身なれば、平家のさぶらひ共、てうおんにほこり、ますく〳〵むけんのごうをまねくあいだ、おさへてすゝめに入べし、かれらが太刀を千ふりうばいとりて、くぎの代にまいらせん、ゑいざんのぶつせんにてたもちつるちうたうかいも、此度ばかりは御めん有べしといふて、らいはいしてぞ出にける。そののち、辨慶らくちうにて、平家のさふらひ共の太刀をとりけるに、むねとの大名、そのほか、ゑつ

ちうのせんじもりとしかづさの惡七兵衞かげきよなどいふ一人當千のつわものどもをえらびてぞとりける。辨慶とはたれもしらず、八尺ばかりのほうし、かみおつつかみなるが、ざかぶらたかく、ほうぼねあれたるが、京いなかにて平家のさぶらひ共の太刀をとる事、たゞごとにあらずとひろうあり。さういなく九十九ふり取たりけり。いま一ふりおさめの太刀なれば、おとにきく源九郎御ざうしのこがね作りの太刀をとらばやとぞ思ひける。此義經と申はこさまのかみよしともの御子なり。ようせうよりくらま寺にて、兵法のおくぎをきはめ給ひたる人ぞかし。此たちをとらばやと、うかがふ所に、六月十五日の夜、月くまなきに北野のしやだんにて行あふたり。辨慶いつもこのむしやうぞくなれば、しろきかたびらに、かちんのひたたれに、くろいとおどしのはらまき、くもにはうわふのさうのこて、ひやくだんみがきのすねあて、くろがねにてすぢがねをたて右つきふかくいれさせ、あいかわをたたんで、がんじまきにまかせたるを、ゆん手のわきにかひごうて、うちかたな取そへて、さすまゝに、二王だちにぞたつたりける。たれをかたきとはなけれども、東西をきつとにらめば、おそれぬものなし。去程に御ざうしは、はなやかなるひたたれに、その比みやこにはやりける、六はらのゑぼし、こがねづくりの御はかせめされ、しやだんにむかひ、念じゆしてこそおはしけれ。辨慶こがねづくりにめをかけて、あつはれこのたちをうばい取、千ふりにたさばやと思ふが、先しやだんのかたをふしおがみ、おほいらたかのじゆずをとり出しだらにしんごんとなへつゝ、さらぬやうにて、御ざうしの御まへを一兩度とおり、三度めにくだんのぼうにておどりあがつて、ちやうどうつ。御ざうしはじめての御あしにて、辨慶かひぢをちやうとけさせ給ひ、いつのまにかはぬき給ひけん、御はかせをふりあげ、うしろとびにゆんづえばかりとびのきて、夜中の事なれば、もし人たがひにやとの給へば、おとこははやき者かな、人たがひなりとも、うたばなどうたざらんとて、うつてかゝる太刀にてはあわせ給はず、とびはづしとびちがひ、はじめの程はむしんにあひしらひ給ひて、辨慶がひざうのばうをすぢがねひるまきかけて二尺あまりきつておとし給へば、辨慶大にわらひて、あつきれたり、太刀かな、よきたちをもちたるこくわじや殿かな、其儀ならば手なみの程をみせんとて、四尺六寸のたちをするりとぬいて、すきまもなくきつたりけり。其とき、御ざうし、べんけいなりとおぼしめし、くびをうちおとさばやとおぼしめしけるが、あつたらものをしばらくたすけ見んとて、御ざうしはひやうはうのじゆつをとり出し、ひぎやうじさいのふるまひなり、御はかせをもつてべんけい

のかしらのあたりを、てんぐ坊のごとくに、ひらめかし給へば、辨慶こらへかね、目をふさぎ、ぼうぜんとしてたつたる所を、太刀のむねにてかいなをちやうどうつて、太刀をうばい取、うしろへ二三げんほどとびすさり、あらにくの法師がふるまひや、衣のうへにかつちうをたいし、かゝる惡ぎやうをすることそきつくわいなれとの給へば、辨慶つぶやきけるやうは、おほくの人のせうぶをしけれ共、此くわじや殿にあふて、ふかくをすることそむねんなれとて、たちすくんでぞゐたりける。御ざうし、このたちほしきかとの給へば、わが物なればほしからで有べきかと、りこんげにぞ申ける。さらばたちをばとらするぞとて、はらまきのむないたを指てなげつけ給へば、地にもおとさず、ちうにて取、やがてさやにそおさめける。　此くわじやを見れば、ぐそくもきず、すはだなり、心こそはがうなり共、我ちからにはをよばじと思ひ、いざやくまんと云まゝに、さうの手をひろげ、おどりかゝる所を、義經、辨慶がゆん手のわきをうしろへ、つつとぬけ給ふ間、うしろを見れば人もなし、てんをかけるか、地をくゞるかと、ふしぎに思ひて、あきれてぞたつたりける。　しばらくこゝろをしづめてあんじけるが、たうしやは諸神にこへて、じひふかふましませば、こゝろもをすみにそめながら、惡ぎやうをし、じやまんがまむをおこすつみをいまめし給はんために、かりにおとこ

よすがたをげんし、辨慶めがけうまんの心をやわらげんとの御事かや、ありがたさのとて、しやだんにちかづきらいはいす。　そうじて、あくぎやうの者とはいひながら、内てんげてんぐらからず、其うへ法花のおんぎよくじやずうなり。　しよぼん第一よりけつぐわんして、いまより以後は、無理むだうを心中にたくむ事有べからず、げん世あんをん、ごしやうぜんしよとゐかうじて、しやだんをたち出、四五町ばかりゆきけるが、いつのまにかは道心さめつらん、さもあれ、すぎし夜のおとこは神か、佛か、何者ぞ、もし此おとこにあふならば、何とかせん、百日のうちをば御神ゆるし給ふべし、百日が中に此男にあふならば、ひつくんでさしちがへて、しぬべし、もし又あわずは、衣のいろをも心思ふかくそめて、ごじやうぼたいよりほかあるまじと、又たちかへりらいはいして、京のかたへぞかへりける。　同き七月十四日の夜、いつものしやうぞくにて、くだむのばうのきりのこしを弓手につき、法性寺の方へぞあゆみける。　御だうの内にまことにたへ成ふえのねが聞えける。　辨慶何となく立より見ければ、くだんのこくわじや成。　しれものよと思ひて、御そばちかくより、長刀の石づきにて御あしをつかむとし、あふぎをもつて御ぐしをなで、ねずなきしてこそとをりけれ。　御ざうしは御らんじて、にくき者かなとおぼしめし、一ちやうばかりや

りすごし、あをめなるいしのかどのあるにて打給ふ。つぶてはてんぐ坊の物なれば、此石いる矢のごとくにはしり渡り、辨慶がちやう〳〵にはつたとあたりて、此いしみぢんにくだけたり。辨慶は眼くらみけれ共、ふんばりたちすくみ、はのねをくいしばりてぞこらへける。其後、べんけい、きを取なをして申様、此くわじやはつぶての上手かな、それがしのしやうとくかながしらなればこそやぶれざれ、出さらばへんたうせんとて、太刀をぬきてぞかゝりける。御ざうし御らんじて、あまりに物あひちかし、こゝへ〳〵との給ひて、たうのもとをしさり給ふ。辨慶つゞいておがみ打にちやうどきる。義經なにとかとび給ひけん、うしろとびにたうのしたのちうへとびあがり、それより一ぢうづゝしだい〳〵にとびあがり、九りんにこしをかけ、御ばう心ざしあらば、是へのぼり給へ、物申さんとおほせければ、べんけい見あげて、はらをたて、いよ〳〵たゞものにてはなしとて、もとの宿へぞ歸りける。おなじき八月十七日の夜、ことさら月くまなかりければ、かのくわぢや殿、淸水さんけいしてぞおはしける。むさしもいつものしやうぞくにて、きよみづへ參りけるに、もとより十七日の夜の事なれば、きせんぐんじゆして、佛ぜんよりぶたいさきまで、どうぞく男女なみ居たり。もとより辨慶人を人ともせざれば、太刀のさやなぎなたのゐ

をふりまはせば、人をそれてとをしける。しやうめんのかうしぎはまでやぶり入けるが、おもてのひだりに一座せんと見るに、くだむのこくわじや殿まし〳〵ける。辨慶物おそろしきと思ふ事しらね共、此人をみて、むねうちさはぎければ、ふかく成とよ我心とて、みづからむねうちさだめ、まじかくよりて思ふやう、ほつたいとして男の下につかんもむねんなり、いかゞせんと思ひやすらへば、此殿はりやうがんをふさぎ、ねんじゆし、がつしやうして、おはしければ、よきひまとおもひ、こわきをすくひなげんとて、りやうの手を指よする所を、御さうし、みぎの御あしにて、辨慶かむないたをちやうどふみ給へば、うしろへどうどまろびけり。大の法師のはらまきに大ぐそく取つけ、思ひの外にたふれければ、ぐんじゆのうへにふしかゝり、おほくの人をおしふせて、かたわになるものおほかりける。辨慶思ふやう、あらはづかしや、是程おほくの人の見るめをいかゞせんと、ふしながらきつとおんじ出し、おきなをりさまに、とのはいまにはじめぬにがされかなと、しる人のやうにぞもてなしける。其後、べんけい、御ざうしをかなはずして下座につき、ねんじゆしてぞゐたりける。はつたとにらみや、殿、佛せんしやだうにては法師こそ上座すれ、ぞくたいとしてほうしのうへにゐ給へば、じんぎにもれ、佛道にもそむき給ふべし、法師入道み給はゞ、

ざをさりてしやうじ給ふべきに、あまつさへらうせきのふるまひかなこといへば、義經きこしめし、此ほうしはよく物をしりたるや、佛の御をしへのぞくたいをばしらざるか、衣をき、けさをかけたらば、座をさりてもをき申べし、ほつたいかと見れば、かつちうをたいし、ふしぎのくせものをば、だうのうちをはらうべきに、御だうの内にふゐにおきたるを、よきにせよとに〳〵と返事し給ひて、又ねんじゆしてこそおはしける。さんけいの人、是をみ聞て、そも〳〵此とのは、いかなる人にてましませば、おにがみのやうなるものを、あのごとくの給ふぞや、あらおそろしやと申ければ、其中にくらま法師のありけるが、よく御ざうしをみしり奉り、こゝなる殿こそげんじの御ざうし義經にてわたらせ給へ、かやうにだうざ申事も、其おそれ有といへば、辨慶此よしを聞、さてはうたがふ所もなし、よし經にて渡り給ふぞとて、其時、べんけいひざをなをし、御まへにちかづき、こごゑになりて申しけるは、それがしをばいかなる者とおぼしめす、さいたうの武藏坊辨慶と申者なり、殿はこさまのかみよしとも の御子九郎よしつねにてわたらせ給ふかと申ければ、御ざうしきこしめし、扨は御邊をこの程何ものぞと思ひ、きつてすてばやと思ひつるに、能こそたすけをきたれ、さては熊野のべつたうが子西塔の辨慶かとて、わらひ給ふ。べんけい申けるは、たび〳〵御手なみのほどは見申て候へども、むぎやうじさいのじゆつどうかとおぼへて、打ものゝせうぶつけがたし、さりながら今一度さんくわい申、せうぶをけつし候はゞやと申せば、しさいにをよばず、たゞしたび〳〵御ぶんはよしつねをけしやうし給ふ程に、今度はよしつねがくびをおとさるゝか、御ぶんがくびをはぬるか、二つのうちにせうぶあるべしとおほせられければ、べんけい申やう、それまでは（むイ）やく、かち申たらば義つねなりとも、べんけいがらうだうと成給へ、わふ（にイ）ぞんちかき武藏をさけ給ふべきにもあらず、又うちかち給はば、辨慶御内にめしつかはれ、朝ゆふはうこういたすべしと申ければ、義經おぼしめすやうは、さてもまくる事はあるまじ、りやうじやうして、めしつかはんも（にイ）一人當千たるべしとおぼしめし、さらばとも、かくもせうぶをけつすべし、たゞしだうのうちは、あまり人目然るべからずとて、二人さもなつかしげにうちつれて、清水さかをぞくだられける。さてかつせんの當所はいづくぞと仰せければ、やがて此へんこそしかるべけれとて、五條のはしにたち出る。八月十七日の夜はんばかりの事なるに、源九郎義經正年十九さいと御なのりあつて、御はかせをするりとぬき給ふ。辨慶もしやうねん二十六と名乘、四尺六寸をするりとぬひて、渡りあふ。くわんをん參りの上下のしゆ、此みちをさし

ふさぎ、ふしぎのけんぶつ出來とて、きせんぐんしゆしたりけり。たがいに手なみのほどを見せんと、うけつ、ながしつじて、打物より火ばなをちらし、ゐいごゐあげてぞたゝかひける。辨慶ははらまきに、こぐそく共はさしかためつ、太刀のすんはのびたり、こびんよりあせをながして、きつてかゝる。もとより御ざうしはすはだにて、てふ鳥のごとくとびちがひ、たゝかはせ給ふ間、辨慶がひざのくちをきり給ふに、すこししりぞく所を、指よりて太刀をうばい取、うしろなるきしのうへにとびあがり、さてしゆう〴〵のやくそくはいかにとの給へば、べんけい今はことばなくして、ごうげんいふたる事なれば、ちからなく御まへにかしこまる。其時、義經、辨慶におほせけるやう、いかにむさし、我身こそあらめ、御ぶんさへみちせばきものとならん事の、ふびんさよとおほせければ、辨慶申けるは、主從のけいやく申よりしては、そこもとは心得て候、御身はあるにまかせてすみ給へとて、うちつれて京中をこそめぐりけれ。よしつねにさいたうの武藏あひそうて、らく中をめぐり、平家をほろぼさんとするよし、ふうぶんしければ、入道相國聞給ひて、やすからぬ事かな、へいぢのらんに、ちうすべきこくわじやをたすけをきたるかうおんをわすれ、かへつて此一門をほろぼさんたくみ、あまつさへべんけいといふくせ者をあひかたらうこそきつく

わいなれ、いかにもして、この二人のもの共をからめてまいれとおほせける。さぶらひども承はつて、ねらひけれども、ひやうはうのじゆつをきはめ、あり所をもしらせず、うつべきやうはなかりけり。一もんの人々、れうのひげをなで、とらおふこゝちして、ぶつけいしやさむも心やすくはし給はず、いかゞして此ものをうちとらんとせんぎある所に、有人、じやうかいの御まへにて申けるは、此辨慶は山門の西塔はゝきのりつし慶心のでしなり、此りつしをめし出し、べんけいがあり所をとはせ給へと申ければ、此儀然るべしとて、やがてなんば・せのをに、三百よきあひそへてぞつかはされける。けいしんのばうを七へ八へに取まいて、つかひを入て申けるは、御でしの辨慶といふ惡僧、九郎よしつねにごうしんして、御一もんにあだをなさんとす、辨けい候はゞ給はるべしといひければ、其ものゝ事はちごにて候時、一山のそせう有て、この坊をひらひて候程に、さらにあり所をもしらずと申されければ、官人ども、其のぎならはけいしん下らくして事のやうを申されよといへば、さもかくも我身にとがのあらばこそ、じたいにも思ふべけれとて、かうぞめの衣に、おなじいろのけさかけて、こしにのりてぞくだられける。去程に御ざうしも、べんけいも、北白河邊におはしけるが、べんけいこの事を聞をよび、師しやうの六はらへ參らせ候も、わ

れらが身のうへにつきての事なるべし、ししやうのためほうこうをこそいたさざらめ、われゆへにうきめを見せ申さん事、むねんに候、御いとま給はりて、師しやうの身にかはり、平家の手に渡り候べしと申ければ、義經御涙をながし給ひて、ししやうの事なれば、申もさる事なれ共、とがなき身なれば、さだめて、やがてと山あるべし、御ぶんが渡る程ならば、きられんことは一ぢやうなり、たゞまげてとゞまれかしとの給へば、辨慶かさねて申けるは、たとひきられ候とも、たちまちにをんりやうとなつて、へいけの一もんをほろぼし、源氏のしゆご神とならん事うたがひもなし、いまだうんつき候はずば、おもしろく申ぬけ、やがて參るべしとて、出にけり。あとにとどまるは三世のしゆくん、さきにすゝむは三世の師しやう、いづれもおろかはなけれども、一字千金のかうおんをはうせんと、さもあらけなきまなこよりも涙をながしつゝ、六はらをさしていそぎけるが、むかししたしかりし人あんしつむすんでありける所へゆき、師しやうの慶心、ぐしんがあくぎやうゆへに、六はらへいで給ふよし承り候間、それがし罷出、御坊をばやがてきさんさせ申べし、此ぐそくをあづけ申なり、辨慶、六はらにてしゝたると聞え候はゞ、此はらまき太刀かたなにて、そうをもくやうしてたび候へ、若又しなずば、かやし給はれといひすてゝ出けるが、辨慶其日

のしやうぞくには、かうぞめのころもにかちんのけさかけ、ときん、まゆ八ぶんにせめこみ、くろきはゞきさしはいて、せのをがかこみてゆくけいしんのこしを目がけてはしりけるに、程なくおつつきて、師しやうのこしのながえに取つき、大音聲にて申やう、そも〱此けいしんはいづくへ行給ふぞといへば、こしかきどもおそろしさに、ふるひ〱六はらへといひければ、御ぶつじか、又は堂塔の御くやうの事ならば、大せいのぐんびやうにてはよもあらじ、何事ぞととへば、りつし聞て、たれ共しらず、辨慶がことをたづねらるべきためぞと申されければ、さらばらう僧までもなし、辨慶とは我事成、なに事を六はらにはたづぬべきためぞや、むやくの老僧のくわんけのしゆつしかな、いそいできさんし給ふべしとて、こしをおしかへす。その時、りつし涙をながし、どうぎやうにて見つる後は、今こそはじめ、わが事は年より、よめいもいくほどなし、なんぢはわかき身なれば、しばらくしんみやうをつぎ、らう僧がぼたいをとぶらひ給へとて、とがもなき身なれば、平家へ申わくべし、是までくだりたるうへは、我こそいづべけれとの給へば、其儀ならばけいごのぶしども、一々にふみころし、はらをきるべし、御きさん候はゞ、なはをかけられ、六はらへゆかんとて、はがみをしてたちけるは、いかなる四てん八てんのあら作りといふ共、是には過しとぞ見えたりけ

る。其時、けいごのぶし申けるは、りつしの御出も辨慶の事尋られんためなり、さいはい我出んとの給ふうへは、けいしんはと山あるべしと、くち〳〵に申ければ、此上はちからなしとて、こしをかきもどしける。そのとき、辨慶、師しやうにむかひ、涙をながし申やう、この年月は御ふけうのぶんにて、朝ゆう此事をなげき存候つる、いまはこの間の御ふけうを御めん候へかしと申ければ、りつしの給ふやうは、一山のそせうなればちからをよばす、まづいづくにも候へと申たる事なれ、まつたくふけうとは思はぬぞとて、衣の袖をかほにあて、涙にむせび給へば、辨慶もさてはまことの御かんだうにてはなかりしを、うらみ奉りし事こそかなしけれとて、なきければ、見る人々もあのおそろしさにても、なみだはありけるよと、あはれながらもおかしがりけり。さて時うつるにとて、りつしは山へ上り給ふ。べんけい何とか思ひけん、たち刀をば師しやうにわたし、手をのべてなわをかかり、なごりをしげに見をくり、やすらひけるこそあはれなれ。其後武藏申樣、わかき者共がのりたる馬いだせば、殿ばらが馬にけたてらるべきかといへば、やがてのりがへにのせて、まことにくわんにん共よろこびいさみて歸りけり。辨慶是程のなわならば、十すぢもかけたる共、ひききり、ほんまふをたつすべき物をと思ひければ、あざわらひして六はらへこそつき

にけれ。辨慶ぐして參りたるよしひろふしければ、入道相國大によろこび給ひ、一門みな〳〵出あひて、庭上のしらすへこそめされけれ。むねとの大ちからども十人あまりなはに取付、是は御まへぞ、かしこまれとて、ひきすへんとすれば、此者どもをひつたてゆんづえ三づえはがりまへへすゝみける。これはうへさまの御前ぞ、御ばうといふ。辨慶是を聞て、なに上とはたれぞ、くわんむのすへといへども、わうそんはるかにへだゝりたる平家のせんぞなり、京わらんべもわらひし人、世にいでゝあきのかみきよもりといひしが、しゆつけして今じやうかいといふ人ごさんなれ、べんけいも天地天皇の御するゑ、すゞきたうのせうりう、熊野の別當べんしんが子なり、うぢはますともおとるべきか、たれをうやまひつくばはんといへば、じやうかい聞給ひて、大にはらをたて、其ぎならばあの法師をもんぐわいへ、つき出せとの給へば、人々あまたよつて、おせども〳〵はたらかず、たゞ大木をおすにことならず、其時、おとにきくむさし坊がありさまを見んとて、一門のくぎやう殿上人、そのほかさふらひ一人ものこさず、庭上のひろえんになみゐたり。其時、辨慶こごゑになつて申けるは、ざしきひろえんにまします人々の名をおしへたらば、ひかれて門外へ出べしといへば、なは取共大によろこび、さらばおしへ申さん、入道殿ひだりの座上は

小松殿右大將むねもり・しん中納言とももり・三位中しやうしげひら、右の座上は平大納言ときたゞ・三河のかみとものり・三位のみちもり・のとのかみのりつね・藏人の太夫成盛以下の人々なり。　おさぶらひには越中せんしかづさの惡七兵衛・へいけむねとの人々のけみやう・じつみやうをぞ語りける。　辨慶、座敷をきつと見まはし、あつはれかたきや、のゝすゑ山のおくにても、我君の御心にかけ給ふ人々はこれぞかし、これほどよきおりからに、此なはをしめきり、ぐそく一つうばい取、入道どのこくびのきりよげに、しろ〳〵と見ゆるをうちおとし、其後、小松殿、其外の人々とせうぶをせばやと思ひ、すでになはをきらんとしけるが、又思ひ返して、とても一度はほろぼすべき平家なり、入道父子のうちにおなじくは一人、御さうじの御手にかけたくおぼしめすらんと思ひて、とかくしあんずる所に、小松のおとゞ、武藏がまなこつき所あり、わか者共ふかくすな、それ程のなはをなにとか思はん、かなくさり成とも、引きるべききしよくをば、たれ〳〵も見しり給はぬかとの給へば、辨慶大にわらひて、こゝにいればこそ、人々にまほられ候へ、いざ各とてなは取どもをひきたてゝ、せのおがもとへぞ行にけり。　入道此よし御覽じて、あらすさまじや、此法師めの入道にも取付、めん〳〵にもつかみ付べきまなこざしなり、ちかき所におくべからず、ようじ

んせよとの給ふ。　さぶらひども承り、大門・こもんさしかため、けいごひまなくまはりけり。　辨慶は本よりこくじやうせかひなんなふにつながれて、ねがへ共きたらず、いとへ共さるべからず、南無三ぼうと打ゑいじて、あざわらひしてゐたりけるが、しやうじをへたでゝ若さぶらひども、よりあひていひけるは、おとに聞武藏坊がたづね出されて來りたるぞや、一門のくわほうかな、義經もいまのごとくならば、やがてとらはるべしと思ふ也、さだめて辨慶はさうなく義經のざい所をばいふまじ、火せめにすへきか、水せめにすべきかとさゝやきけるを、武藏聞て、あらかたはらいたの事どもや、まことにとふべきならば、辨慶がちからは人にもあづけず、又おちもせねば、此なはひききりて、此家のけたうつばり取はなし、さうのはきにはさみ、むかふものをうちたをし、一とびに御ざうしの御ざい所へ參らん事、あんのうちなるべしと思ひければ、わ殿ばらたち辨慶は、がくもん・つせん・いさかひ・すまふ、其ほかはやわざ・ちからわざもしつ、あたらぬ草木もなけれ共、いまだきうもんといふ事をしらず、きうもん・がうもんはにがき物か、あまきものか、ちとこゝろみしたやとて、大ぐちをあけてぞわらひける。　この由、入道殿にしか〳〵と申上げれは、扨此法師めを何とかせんとおぼしめしわづらわせ給ふ所に、吉内左衞門すゝみ出て申ける、此もの

はきうもんにては、いかにせめ候共、よしつねのざいしよを申べからず、思ひきりて我と参る程のものが、おつる事は候まじ、それがしこの者をたばかりて、よしつねの有所を能々きゝて申上候はんと申ければ、入道殿大に御かんありて、此儀尤然るべし、よく〳〵とひきはめよ、ときの引出物はなになり共、なんぢがのぞみにしたがふべしとぞおほせける。吉内左衛門心のうちに思ふやう、とひおとしたらば、くわぶんの御所りやうを給はるべし、其時たれをかだいくわんにくだすべしと、そらあてがいこそおかしけれ。さる程にざつしやうとゝのへて、ながびつに入て、せのをがたちへぞかゝせける。扨吉内左衛門は辨慶がゐたる座敷へ出、種々のしよくぶつをぞすゝめける。辨慶この間はさんやをすみかとして、しゆはん遠かりつるに、これ程ねんごろなるもてなし有まじ、是は師しやうや君にいのちをかろんずるゆへごさんなれ、あはれきうもんせよかし、此しゆはんのちからになはしめきり、けいごのやつばら一々にけころして、御さうじの御ざい所へ参らばやとぞ思ひける。辨慶もとより大食なれば、さしうけ〳〵たべにけり。さて吉内（左衛門イ）ころはよかるべしと思ひて、くちびるくいしめし、うちくつろぎ、物語よげにし、ちかづきたり。其時、べんけい申やう、かゝる御わづらひこそ存より候はね、くげのまじはり仕り候はぬ程に、平家

のさぶらいたちを見しり申さず、たれ人にて御渡り候やらんといへば、吉ないと申ものなり、人づてならず申べき事ありて、これまで参りて候といへば、なに事ぞといふ。かやうのしだいを申候へば、かへつてびろうにて候へ共、御坊の御ためにはかたのごとくげしやくにつけて、御一門のはしに参りて候、はうばいどもも、みな存て候へば、人の心をはばかり、またはほうこうにひまなき身にて候間、思ひながら今までまいりさむらはざりしなり、さて武藏殿御事につけて、當家の御ないだん共候、たぶんはちうし申さんとおほせられ候所に、いまにはじめぬ小松殿御いけんには、むかしは源平とりのつばさのごとくにして、げんじに事出きぬれは、平家これをやわらげ、へいけに事あれば、げんじ是をしづめ、たがひに和合ありし時は、世のみだれもなかりしに、しんゐんほんいんの御あらそひの後、げんへいのなかあしくなり、たうじはげんじほろび、へいけはんじやうす、さりながら、一方かけては、つばさもかけりがたし、ことに義經は兵法のじゆつをきわめ、ぶりやくにたつしやなれば、國々のげんじ同心し、當家もいかゞ有べき、ほろぼし、ほろぼさるゝ事はたがひにむくひて、せうれつなし、あだにて返せばあだつきず、あだををんにてかへせば、かへつてとくをうくるといへり、此よしつねをかまくらにすへ、せきより東三十三ヶ國をばげんじの

ちぎやうとし、西三十三の國をば平家のちぎやうとし、本のごとく源平あひならんで、天下をしゆごし奉らは、たがひにゐいくわをながくしそんにつたえん、一たんの德にほこり、後のらんをしらざるはぐちの至り也、此御同心なくば、是より以後萬事しげもりに御だんかう有べからずとおほせ候程に、入道殿も御ごうしんにて候間、御一もん、各此儀尤もとごうせられ候て、義經の御ざい所を尋申され候、此やうを御心得候べし、是は御坊の御ためを存、かやうに申候、此うへは世にあらん共、御ぶんのはからひよといふ。　其時、辨慶うちうなづき、ありがたし〱、いづくにももつべき物は一もんなり、たれか來りてかやうの御ないだんをばきかすべき、たとひよしつねを出してしざいるざいにおこなはるべきためなり共、きうもんにをよぶはらば、辨慶か身、石かねにてもあらばこそ、ありのまゝに申べきに、まして我君三十三か國の主になり給はば、辨慶も四五か國もちぎやうすべし、てきみかたのうちにもしんるいほど有がたき事はなし、あひかまへて〱、よの人に語り給ふなよ、御へんひとりに申ぞといへば、吉內大によろこびて、ひたひとひたひをさしあわせ、こごゑになりてきかんとて、扨義經の御在所はいづくぞとこへば、今はなにをかかくすべし、日本國雨が下の內にましますといへば、吉內大にはらをたて、御坊はなにとて人をあざ

むき給ふぞとよ。　辨慶いふやう、日本國とは我君の御座ある所のそう名ぞかし、六十六か國の中何れの國の何れのこほり、何れのさと、たれがしが家に渡り候といはんとすれば、聞もこゝけず、やがて心みぢかくはらだちぬるかな、くはしくかたらんといへば、其時きちない左衛門ときしよくをなをし、其ぎならば然るべし、たゞし御ばうのうんつきなば、ともかたらじ、御坊のためを思ひてこそ、はらをもたつれ、われも人も世にありて、源氏へ申べき事あらば、武藏殿につき申すべし、へいけに御用の事あらば、吉ないに承りてひろうすべしといふ。　其とき辨慶、それは申にをよばず、なに事につけても、かた〱のやうなるよき人につきそはねば、心ことばのやわらぎなし、今より以後、萬事御いけんこそうれしかるべけれど、こゝろよげにわらひければ、吉內いよ〱よろこびて、さていづくに御わたり候ぞといへば、辨慶かしらをふり、そらへかほをさしのべ、あのくものしたにましますといへば、吉ないそうじてたてはらなるおとこにて、せんかたもなく無念に思ひ、なにとてかさねて人をてうろふし給ふぞといへば、辨慶申やう、わどのをてうろふのきはなきぞ、すんをとへばすんをこたへ、しやくをとへばしやくをたさふといふみやうもくのあるをしらざるか、わどのが人をすかさんには、又わ殿をもすかし候はであるべきかといひて、あ

ざわらひけり。吉内無念ながらもすべきやうなければ立歸り、入道殿御前にてはずいぶんしゆだんをはき、じゆはん共についやして、しごくてうろふせられて、まことにはうばい共の前へも、めんぼくなふぞ見えたりける。辨慶程のものが、我とかたきの中へ來り候へば、吉内などにたらされん事思ひもよらず候、ない〳〵人もにくみわらひける。入道相國は聞給いて、たばかられんとは、はじめよりふちやうと思ひつるぞや、とり得たるこそかんようなれ、いそぎきれよとの仰なり。扨大せいの中へうちかこみ、六條河原へ出けるに、辨慶がさいごを見んとて、きせんぐんじゆする。べんけいをよく見せんとて、たかき所にしきがわしかせ、西むきに引すゑたり。吉ないてうろふせられたるがむねんさに、わざときり手をのぞみ申、きり手になつてぞ出たりける。其時、べんけい四方をきつと見まはして申やう、わが身、法師にてたがき所にのぼれは、高座と思ふなり、御邊はきりに來るか、ちかづきたるはたんと見えたり、人のおほく見物すれば、ちやうじゆのごとくなり、いかに吉内ちやうじゆおぞしとまつらんに、せつほう一座のべんといふ。吉内聞て、にくき御坊のきやうげんかな、只今きられんずるに、念佛は申さずして、よしなきくちの閑事やといへば、辨慶いふやうは、念佛をすゝむる程いとおしくは、よもきるまじといひて、から〳〵

とぞわらひける。吉内かさねて申やう、いまは何かはおかしかるべき、人によわげを見せしため、高名も、ふかくも、こんじやう一たんの事なり、たゞ戀しきはうゐの都にてとゞめたり、ひごろのがまんをさしをき、いまをかぎりの事なれば、さいごのねん佛申させ給へ、うれうべき所にてうれえず、なげくべき所にてなげかざるは、かへつてふかくなり、じやまんがまんをすて、まことのみちに入給へといへば、辨慶うちうなづき申けるは、はづかしや吉内どの聞給へ、しやうとく太子のきもんに、まつだいにならば、ぞくは衣をき、かふざへあがり說法せば、出家はかつちうをたいし、いくさをすべしと見えたり、辨慶法師なれども、じやけんにして、いまも惡心をさしはさむ、御へんはぞくたいなれ共いむくわにくらからず、法師の身さしてけうげをうけたる事かへす〴〵めんぼくなし、しよせん善ちしきに賴なり、せつせんどうじはきしんをらいして、はんちをうく、しやくそんはきつねをらいし、師しやうとす、ぞくなり共道理によるべし、三びやうどうのくわんねんも、ふしやうなればしんこんたうにもかなはず、きやうろんはなんぎやうなり、ぞくあくふせんのきなれども、ぢきに西方とだんずるにはすぎず。吉内申けるはそれも念佛申べしといひければ、いかに吉内殿、なをけうげし給へ、念佛は一ねんかたりきか、一かうかせんけか、何を申べ

きぞとわらひけり。吉內はらをたて、御坊にわらはせんといふまゝに、ひたゝれの袖を取てそばにつけ、はかまのすそをたかくとり、太刀をするりとぬき、うしろにたちまはりければ、辨慶かしらをふり歸り、あらおそろしのしろき御はかせや、かねかこほりか、もたせ給ふはつめたふはなきかとわらひけり。吉內はがみをして、太刀のつかくだけよとにぎりて、ちやうどきる。いつのまにかははづしけん、前なる石をぞきつたりける。二のたちをうたんとするに、いざやきられんといふまゝに、すんとたつかと見えたりしが、さきへ四つ五つとびければ、人みなはつとちりにけり。やがてあしをふみそろへ、はしりければ、おわや辨慶がはなれたるはとて、おつかくる。こゝにあはれなる事あり、吉內がちやくなんに、五郎兵衞とて、六十人がちからをあらはしたる者あり、心もがうなるものぞとて、うしろのなはをひかへさせけるが、父が申けるは、辨慶たゞ者にあらず、わろくして取にがすなといひければ、此なはをはらまきのうはおびにしかとむすびつけたり。辨慶は生れつきたるはやはしりなれば、とらのかけるにもをよびがたし。ひきたてられて、太刀をぬかんとて、すこしあゆみとゞまる所にて、うつむきにたふれけり。そのまゝ引たてられ、河原をはしれば、おのづから石車にのりてこけたるは、只あら馬をつなぎたるくいのぬけ

て、なはのさきにつきたるに事ならず。よこさま、たてさまになりてひかれけるほどに、みぢんにかしらをうちくだきて、正年二十七と申に、まことにつゆちりとぞなりたりける。べんけいは大みね八大こんがうどうじときねんして、さうの手をのべければ、さしもつよくこしらへたるなは共、ずん〳〵にきれにけり。べんけいかはらのいしをもつてうちければ、せいひやうのいる矢のごとくなり。人おほくつぶてにあたりてしゝたりけり。おりふしれんじつあめふり、川水ふかく出けるにとび入ければ、さぶらひ共、くつばみをそろへて、川すそへまわり、水のさかまく所をいつつ、きつして、さだめてしもへながれよると、まつ所に、辨慶は五六町川上へおよぎ上り、かわ中に大せきの有にのぼりてみれば、かたきははるかのしもに見えける程に、大おんあげて申やう、辨慶これに候、御用あらばこなたへ渡り候へ、殿ばらとよばわりければ、大せいのもの、又河のきしにつれて上り、うち物にてはかなはじとて、さし取、引つめ、さん〳〵にいけれ共、あがる矢をばくゞり、さがるやをばおどりこへ、一つも身にはあたらず。其時、べんけいいふやうは、こゝにてじがいすべし、たゞし入道殿へ言づてもふさんといふほどに、やをとゞめて聞ければ、ろくはらへ參り、三つのごとくあり、一ッにはししやうをとゞめ申事、二ッには入道殿をはじめとし

て、御一もん何れも見しり申事、三ッには辨慶がふるまひをせう〳〵御目にかけ候、御一門の人々よもろうきよしては御座あらじ、御ざうしと二人してしのび〳〵にきり取べし、こんりんざいの玉もひろへばつくると云事あり、平家の人〳〵もせん〳〵にきりとらば、つきぬ事はよもあらじといへば、たゞいとれやとて、さん〳〵にいけれども、此程は御ざうしに矢ちがへの法はならふつ、むじんに身をつかへば、一すぢも身にはあたらず。　さて又水の中へ入、かたきのありける川ぎしにあがりけれども、人々これをしらず、かたきのもつたる長刀をうばいとり、辨慶とはしらざるか、こゝまで來るに、もてなしなくてはかなふまじとて、大せいの中にわつて入、くもで十もんじにきつてまわれば、さぶらひ共申やう、おに神とてもかたきはたゞ一人ぞや、うちとれ〳〵とてかへしあわする所に、にわかに川きり立て、東西をしらず、たゞともぐそくにてそくばくうたれにけり。　辨慶つみ作りにと思ひ、いくさを見物してゐたりけるが、しばしやすみて、北やまさしてかへり、よしつねの御まへにかしこまり、辨慶ふしぎの命たすかりて、たゞいまこそ參りて候へと申せば、よしつねも六條がわらよりたゞ今かへりたると仰らるゝ。　辨慶御そら事やと申ければ、まことか、そらごとか、なんぢがこれを出てより、今までの事をかたらん、聞候へ、まづ朋

友のあんじつに行、はらまき太刀、その外ぐそく共あづけおきしはいかに、すゞかけばかりにてかたきの中へゆき、師匠をきさんさせ、御へんは縄をかゝり、六原へ行しはいかに、入道の前に引すへんとすれば、二わう立にたつて、淨海にあつこうせしもきいつ、おかしかりしは御へんを大せいして、ひけどもはたらかず、そのゝちなわ取にさゝやきしは何事ぞ、平家一門の名をとひけるか、またせのをがもとにて、吉内ざつじやうかまへて、義經が事をとふに、てうろうせられてはらをたてかへりしも見つ、さて六條がわらにて、吉内太刀とりなほし、きらんとする時、吉内くびうちおとし、御へんをつれてかへらんと思ひしか共、御へんきらるべきまなこざしもなく、くびのもちやうこそよかりつれ、其後一の太刀のはづしやうこそおもしろけれ、二のたちをうつひまにとび出はしりたりしは見事かな、五郎兵衛がなわとりして、ひきころされしふびんさよ、なわひききり、川にとび入、大石の上にて矢ちがいこそおもしろけれ、其後、入道の方へことづてして、かわに入、かたきおほく、うしなふ事こそむやくのつみ作りなれ、平家さぶらひ共、思ひきつて見えし程に、もしながれ矢にもやあたらんと思ひて、にわかに川ぎりのふりしは、よしつねがわざなり、ずいぶんのひじゆつなりとのたまひて、から〳〵とわらひ給へば、辨慶なみだをながし申やう、かげ

のごとくあひそわせたまひて、むさしめを御けいごありし事こそありがたけれ、たとひ國をへだて、大將を承り、かつせんをいたし候とも、御まへにてたゝかひ、君の御らんずるよと存、いさましく候べし、返々かたじけなき御事かなとて、かんるいをぞながしける。　御ざうし涙をおさへ仰られけるは、かまだ兵衛がうたれし時分に、よしつね今程せいじんしてあらば、などまさきよをうたすべき、まさきよながらへ、辨慶と左右にたつるほどならば、平家をほろぼし、ほんいをとげん事やすかるべしとて、御袖をかほにおしあて給へば、辨慶いよ〳〵たのもしくぞ思ひける。　そもそも辨慶をにがしつる事、入道聞たまひて、おほきにさわがせ給ひ、よしつね一人あるときだに、心ぐるしくおひもしに、あひおとらぬむさしめ、一身してひやほうのじゆつをならひきはめ、がすみをたてゝその身をかくし、此一門をうかゞはんには、入道父子はまづろうきよすべきかとのたまへば、小松殿仰ける、辨慶がていじやうにひつたられし時のすさまじきまなこざし、なわをもしめきり、われらとせうぶせんとあんじいたる物なり、それを見てこそしげもりは、さぶらひ共、やうじんせよとは申けれ、けつくは九郎もきたり、うかゞひつらん、あたゝかなる風のそよと吹て、ていじやうのしらすをまくりし風は、あやしかりし、此一門佛神にうんをまかせ、じひのせ

いだうをとりおこなふ間、てんだうのかごあらんほどは、よしつねがひやほうもむやうなり、れいぎをたゞし、じひの心ふかからんは、すなはちひやうほうのあふぎなるべし、辨慶にげさまにさぶらひの五十人三十人そんじ申たるはものゝかずならず、かくまでのさけなるものどもが、ふやうじんにて一人もいきのこりたるこそは、かうみやうなれとのたまひて、御心にあたわぬおもむきなれば、吉内はちやくしのしぬるのみならず、めんぼくをうしなひければ、にくまぬものなし。　さてべんけい、せけんのやうをあんじつづけ、御ざうしにたづね申ける、六はらへ御出候しとき、なにとて辨慶に御しらせあつて、じやうかい父子をうち給はざるぞと申ければ、さればこそ、ない〳〵そのためにわれもゆきけるが、じやうかいのゐたるざしきを見わたせば、一もんなみゐたり、よきひまとおもひ、うち物のつかをにぎりて、ものあいをみるに、れいの小松のおとゞちやくざして、じやけんのつるぎをじひにうわのころもにてつゝみ、まなこのそこにかどをたて、よしつねがある所をふしんげに見けるが、じげもりがかうべのうへに、ともし火のやうなる物一むらたちあがり、その中によしつねがとりはきしんじんをいたすこんがうのせんじゆ六七寸ばかりにてあらはれ給ふあひだ、ごゝにて入道をばうつとも、しげもりはうたるまじきと思ひ返

したり、そのうへ平家ほろぼさば、じげもりをうちてこそ、ほんもうなれ、小松はせいじんにて、せいだういたす、よしつねはあくにんにてせけんをうかがふあひだ、佛神しげもりをしゆごし給ひ、よしつねをはなし給ふとおぼへ、おさましきぞと、のたまへば、辨慶申やう、平家うんつきなば、小松いつまでながらふべきとぞ申ける。　さるほどに二人うちつれて、とき〲らくちうへいで、佛詣などし給ひけるに、辨慶もとよりしれものにて、行あふものをけたをし、ふみたをす事、たび〱なれば、辨慶にげて後、京中しづかならず、くち〲に申ければ、入道殿仰せけるは、よしつねも、むさしも、おなじぼんぶぞかし、たとひ人おほくそんずるとも、うちゑぬ事あるべきか、かんのかうそが三尺のけんも、うんつきてはいらず、此比たうけのくわほうさかんにして、なんぞうんつきたるよしとも、子共にほろぼさるべき、このもの共、夜ごとに出京して、あくぎやうするときく、九郎はこおとこにていろしろく、辨慶はいろくろく、たけたかきほうし、うちとり、くんこうのぞめと、おほせければ、みやこ中にて、小おとこ大なるほうしあまたきらると聞えければ、さがなきものをころさんよりは、まづ奥州へくだり、みやこをあんおんにすべしとて、おくへくだり給ふ。　辨慶いつものぐそくどもとりつけ、たゞいま御ざうし、おくへ御くだり、むさしばうも御ともを申

なり、うちとつてくんこうのぞめとよばはれば、もん戸をとち、出あふもの一人もなかりけり。　そのとき、辨慶申やう、百日のうちにきつてのぼり、おごる平家をこと〲くきりしたがへ、らくちうあんどすべし、平家の人々よ、じやうかいの義をかろんずるか、二人をうちとめずして、後日にこうくわいするな〱とよばわりて、おうしうへこそくだられける。

異本秋月物語

いつれの時にかはんへりけん、都に京極の大納言と申ておわします。御かたちけいのふ人にすくれて、萬めてたくわたらせ給ふ。きたの御かたはみなもとの中納言の御むすめにて、これと世にすくれてきこゑ給ふ御かた〳〵にておわします。その中に姫君壹人出來させ給ふ。御かたちうつくしき玉をのへたることく、ひかりさしそふ心地し給ふなり。かゝるほとにひめ君七さいと申に、はゝきみれいならすなやみたまいて、ほとなく露ときへ給ふ。大納言殿の御なけきもろともにきへはやとおほしめし、こかれ給ふとも、つれなきは人の命なり。せめての御慰には御あとねんころにし給ひける。つなかぬ月日のならいにや、なけきなからも大三年もすきけれは、いかてさのみひとりかちにておわしますへき。御一門の御はからいに、三條のさいしやうのきたのかたにておわします人、さいしやうにすきおくれておわするを、むかへまいらせて、北のかたとそかしつき給ふ。これもおなしほ

との姬君壹人持給ふ。御かたち人にすくれて、やうはいとうりのよそおい、御人さまやさしくおわしける。これをはあいしの君とそ申ける。殿の姬君をはあいきやうの君とそ申ける。いかゝうけう(ママ)つくしくおひたち給へる。御すかた、秋野におみなめし露おもけなるさまに、うちしほれたる有樣にてそおはしける。たゝあけ暮母上の御事のみなけき給ひて、御おこないおこたり給ふ事なく、なむ大ひ、こひねかはくは母上のくけんまぬかれて、あんやうしやうとへむかへ給ふさそいのりける。いかてか佛もなふしゆたれたまはておわすへき、いとあわれにそ見へ給ひける。かくて二人の姬君たちたかひにわりなくおほしめして、春は花のもとに日をくらし、秋は月のまへに夜をあかし、四方のむしやうをもともにくわんして、蕊たくひなくこそおわしましける。扨大納言殿は此姬君のおわしけれは、さすかに世をも捨給はて、母上の御事露ほともわすれ給はす、御袖のかわくひまもなし。姬君いとおしくおほしめして、月見の御所を玉をみかき、しつらひて、十二人の女房逹をつけ奉りて、かしつき給ひける。扨もはゝうへの今はの時もうち參りの事をのみの給ひし事なれは、大納言御心ひとつにおほしめして、いとなみ給へとも、誠ならぬ御なかなれは、おなし御心のやうにもおわせぬ事をのみなけき給ふ。大納言のむすめは、とうたいの女御にておわしますか、此姬君御子にし給ひて、女御にまいらせんとさため給ひける。さるほとに此姬君をきく人心をかけなやますといふ事ならされは、宮たちも御心をかけ、たまつさをかよはし給へとも、おさなくおはするまゝ、何となく過行給ひぬ。さるほとにまゝはゝの姬君は、花みの臺にすみ給ふ。是もおなしさまにかしつき給へとも、御かたちはおとりて見へ給ふ。あいきやうは蕊すくれ給ふかひそなき。されはむかしも今も誠ならぬ御中なれは、女御まいりもいとなみ給ふ御けしきもなし。その頃、御門は白河院におりさせ給ひて、式部卿の宮御くらいにたち(たまふ脱カ)ほとに、女御參りもいそかはしく思召ところに、姬君なやましくて、うつまさへまいり給ふ。折よくくわんはく殿(の脱カ)きんたちに二位中將とこそ、此頃世のおほへいとしく、御かたちけいのふ人にすくれ給ふ事、むかしさいこ中將けんしの大將も、いかてこれにはまさるへきと申あいけり。これもうつまさへこもりたまへは、拜(ママ)のつほねに女房のあまたこもらせ給ふ。いみしく忍ひて、おはしけるを、中將御心にかけて、もののひまより見給ひ、上らうたちはあまたあれとも、ひやうぶきちやうひきたてけれは、見へ給はす。扨女房逹申けれは、はや七日にならせ給へは、あれは御むかひにまいるへし、けふはかりにて候へは、ほとけの御まへにてお

こない申させ給へと、申あいければ、中將きこしめして、扨は今宵はかりにてあるへきに、いかがしてあるしをみるわさもかなとおほしけれとも、さらに見ゆへきやうもなし。其日にもなりしかは、御むかひのくるままいりたり。くるまにのり給はん所を見はや、忍ひ給ひきちやうひ（のせ）まより見給へは、まことにらうたき事かきりなし。おほくの人を見つれとも、かほとの人はいまたなしと思召て、人にとひ給へは、京極殿の姫君とそ申ける。それより御心あこかれて、たゝ神ほとけにいのり給ひけり。何かたにもきらひ給ふへきにはあらねとも、女御にたち給ふへき姫君にておはしけれは、いかゝとおほしけれとも、やむへき心地なく、いかなる便かなと思召けるに、大宮に下つかひの女ほうしらかはと申者ありけるに、京極殿にゐんあるものにて有けるを、中將いかゝとしてきゝ給ひけん、此ものをよひてとひ給ひける。京極殿の御かたをしれるとのたまへは、よくはそんし候はねとも、きたの御かたさむらい給ふ人々、しる人にて、つねにまいると申けれは、扨は姫君おわしますかとと い給へは、世にうつくしわたらせ給ふ事限りなきやうにうけ給りたりと申けれは、御ふみもちてまいるへきと仰けれは、いさやそれはいかゝ候へき、女御に御まいり有へきと承り候と申けれは、さもあれ、いゝよりて見んとの給へは、さして文たまは

らんと申せは、うれしく思召て、ふみをあそはしける。

きゝしには心のそらにあくかれて、見ては露けき袖のうへかな。

とあそはして、引むすひたひけれは、たまはりて京極殿へまいりける。月見の御所にまいり、御めのとの大貳のつほねに申けるは、うゐのおはしましさふらひしは、つねにまいり候へとも、わたらせ給わぬ後は、かきたへまいり候はし、あまり御床しくおもひまいらせ候て、たゝ今參りて候、いかに姫君のめてたくおはしまし候はんと申けれは、大貳のつほねの給ふやうは、まことや、いにしへのひとなれは、ゆかしく候つるに、おとつれ給ふ事のうれしさよ、姫君のおひたち給ふは、目出度うつくしくわたらせ給ふとの給へは、さこそと御床しくまいりはんへるなりとて、ふみを取いたし、これは二位中將殿のふみにて候、あまりに〳〵御心つくさせ給ふあいた、持てまいりて候と申けれは、大貳のつほね、左樣の事はおもひもよらす、御うちまいりにて候へは、かいあらしとそ仰ける。かやうの事はいかゝと申て候へとも、あまい（に）りにあくかれさせ給ひ候ほとに、申也と申せは、いさとよ、姫君はゝうへの御ほたいのみいのらせ給ふて、申ほ（もカ）あわれまさりける、扨又申上るまてもなしとて、返し給ひぬ。是を北の方きゝ給へて、あいしのめのとおにかはらにのたまいけるは、まことやあ

いきやうのかたへは、人のふみ参けるときく、浦山しや、我姫君も父宰相のおはしまさは、かくこそあるへきかと仰けれは、おにかはらうちきゝて、やすきほとの御事にて候、大武殿うちまいりとて文かへさせ給ふよし承候、さためてまたまいるへし、その時かの御つかいをよひて、くわしく申へし、御心やすくおほしめし候へと申けれは、うれしく思召ける所に、又ふみもちて白河まいりけるに、おにかはらさし出て、こなたゑとよひ入申ける。　月見の御所へ二ゐの中將殿より文参り候とうけ給り候、とてもあいしの君もおはしまし候へは、あいきやうにおとり給はす、なをこそまさらせ給ひ候へと申て、此君をあわせ給へとすかしけれはとて申けるほとに、まつわらはかひきて物せんとて、ふしかさねの衣一重とり出し、酒をすゝめてとらせけれは、やかて心よくなりて、さらは中將殿には御こゝろさしの人と申さんと申けれは、うれしくの給ひたりとて、北の方にかくと申けれは、悦給ひて文もとり寄、やかてあいしの君におわして、此ふみ御らんせよ、二位中將とて、目出度人のふみなり、御返事申させ給へとの給へは、あいし開給ひて、あら御心あさや、いかてかろ／＼しき事仰候そや、御門の御ふみ成ともたゝ一度に御返事申へきか、かやうの御返事は何と申候そや、そんし候はすとのたまへは、たゝ申させ給へ、はや、さひ／＼文参候へとも、見

せたてまつらすとの給へは、ちからなくて御返事あそはしける。　白川文給はりて歸りまいり、御返事と申けれは、中將よろこひ御覽すれは、さもうつくしく書給へり。其後、たひ／＼御文かよはして、ほとなくあひたてまつりて、御覽すれは、見し人にてはなしと思召て、こはいかにとおほしけれとも、これもさすかなつかしくて、かよひ給ふ。　さるほとに北の方は、二位中將と申は、大貳のつほねの心もさすかとて、御名をかへてとく大寺の中將とそいゝのゝしり給ひける。　月見の女房達はめてたく御事や、あいしの御方にはとく大寺の中將のかよひ給ふと申あいけるは、世におかしくそきこゑける。　扨中將は大宮にて、白川をめしてうたてしき事かな、月見へとこそはいゝたるにとの給へは、白川とかく申かたくて、さやうに姫君たちのあまたわたらせ給ふ事はそんしまいらせすと申けれは、けにもかれかはからひにてはあるへからす、むかしすみよしの姫君とりちかへたるやうにそあるらめと思召て、いまは京極へもかれ／＼にそおわしける。　さりなから月見のかたのみゆかしくて、あいしに、心さしはなけれとも、心ならすにとき／＼かよひ給ひける。　秋も半に成ぬれは、夜寒の風もすさましく、枕の下にきり／＼す、折から哀をもよほして、枕はあまのつりするはかりなるに、いつくともなく琴の音のつまおとけたかくきこゑけ

れは、枕をそはたてゝきゝ給へは、月見の方なり。いよ〳〵あくかれて仰けるは、あいしはきゝ給ふかとの給へは、あれこそ大納言の姫君あいきやうとておわします、いつも母上の事のみ思召て、涙かちなる袖のうへ露けき御ふせい、あまのよそなるみるめまても引給ふ、わらはも初よりあはれきゝなしさふらいぬと、何心なくかたり給へは、中將は聞給へて、我心の內はし(ら既カ)せ給はて、うちとけてかたり給ふの哀さよとおほして、いよ〳〵いとゝあこかれ給ひて、其あけほのに、淸水へ參りて、なむ大しひのくわんせおん、ねかはくはゆきいゑのおもひはしめし君に、此世にてあいみん事かなはすは、命をとゝめし｜て、後世のちきりをむすはせおわしませと、ふかくきねん申給に、あいきやうの君は二月八日にうちまいりとさため給ふ、御心なやみ給へは、四月にのひける。中將のいのり給へるしるしとおもへける。中將は時のくわんはく殿の御いきあいと申、御門の御おほへと申、あめか下にてならふ人あらしと見へさせ給へは、いかなる院宮はらの姫君成とも、此中將の心つくし給はは、かなはすといふ事あるましけれとも、女御參りの事なれは、身をこかしつゝ、いにしへさ衣の大將のいわねと色との給ひけん、いわし忍ふの戀路には、身のみくたけてあふよしもなし、せめてそこともいふならは、尋ても見んと、なけきのもりの下草はし

けれと、わろふ隙もなし、浦山しや、いかなる人の物思はておわすらんと、餘所の人さへ浦やましく、世をもいとははとおほしけれとも、人の行ゑのさたまり給ふを見て、ともかくもならはやと思ひて、いつも詠かちにおはしまして、かくなん、

　下もゑにくゆるけふりや我ならん、身のみこかれてとふ人もなし。

とうち詠給ひて、なみたくみておわしける。あいしの御心もいかゝとおほしめして、さらぬやうに仰けるは、よものむしやうをくわんするに、萬さためなくこそ候へ、いかにもなりなは後世とふらひてたひ給へとの給へは、あいしうちきゝて、いと心くるしくて、なみたをなかしおわしける。扨其後、御前の女房達もしほのまへ、をわりの君とておわしけるか、物の哀をもしれる人にて、あいしに申けるは、姫君は中將殿の物おもひをはしろしめされて候と申せは、いさや何とか心くるしくてとの給へは、されは中將の思ひをはきたの御かたの御はたらきにて候そや、初より月見の御かたへの御心さしなるを、世にきこゑ給ふへけれはとて、取ちかへさせ給ふと申けれは、きゝ給ひて、扨は御心さしもなき事に、うらめしや、月見の御方にさこそおかしくおほすらん、たとへ我に心さしあるとも、母上の御身にては、まつ大納言の姫君をこそ世にもたて給ふへきに、心さしもなき人をかへす〳〵もはつかしや、あさま

じき御わさかなとのたまへけれは、おわりのきみ申けるは、月見の姫君は女御にたゝせ給ふへきとてこそと申けれは、さることなれ共、又人もなきやうにはからい給ひけるこそ物うけれとて、御なみたせきあへす、おわりも、もしほもことわりとそ申ける。　あいしおふせけるは、なとやそれほとしりたらは、はしめよりゆめはかり我にしらせさりけん、うらめしさよ、今は何とそしてあいきやうの君にあわせ申さんとの給へは、もしほのまへ・おわりのきみ申けるは、こなたへ入らせ給ふ人ときゝ給ひて、やわかもちひ給ふへきかと申ける。　けにも心ふかき人なれは、さやうなるへし、さりながら是へおはします人をは、とく大寺の中將と人もしり、殿もしらせ給ひたれは、くるしからすと仰ける。　かくて暮程に又中將いつものことくうちしをれていらせ給へは、あいしいとはつかしけにての給へけるは、何をさのみつゝみ給ふそや、御心おかすの給へかしと有けれは、中將色をもらさしと思召て、何を思はんする、我かくせにて、いつもつきせぬ心にて候とて、なみたをはら〳〵となかし給へは、あいしはいとかなしく思しめして、はや〳〵御心の內殘りなくかたり給へ、もしかなふへき事ならは、つたへてみむとの給へは、中將殿さもやと思召、仰けるはかやうに申候へはとて、君をおろかに思ひたてまつるへきにはあらねとも、何となく思ひ

そめにしことなれは、何とやらん心をもそらにまよひてと、わりなく語り給へは、あいしの御心の內はつかしくおほへめしての給へけるは、なとやさほとの御事ならは、今までつゝみ給ひけん、うらめしさよ、かなふへき事は、しらねとも、傳ゑて見むと有けれは、中將殿世にうれしく思召けれとも、さすかはつかしくおほしける。　扨あいしは此事もらさしと思召て、もしほのまへをちかつけて、かやうの事ゆめ〳〵よそへちらし給ふなとて、月見へおわして、いつものやうにあそひたわむれ給ひて、なにとなきやうにの給ふは、何事も互に御心やすく〳〵と候まゝ申、大宮の中將と申て、目出度人のおわしまし候、姫君の事仰られ候、その御內にうへ女ほうの御かたと申は、わらわかためにはいとこおはにて候か、もとより立出て、此程は御宮つかへも物うくなり、こもりおわしまし、あこかれ給ひて、世をうき物と思召候と申傳へしとて、むかし今の事まて引かけての給へは、大貳のつほね申けるは、まことに何の頃やらん、さやうの事候へかしか共、うち參りにてわたらせ給へは、うち過ぬと申けれは、あいしは御心の內いとゝはつかしく思召て、又おふせけるは、覺へすくなき御うちまいりよりも、中〳〵御心やすくわたらせ給ふへき、天のみかとと申はかりこそちかひて候へ、何事かおとり給ふへきと有けれは、めのと申けるは、左樣の御事は大納言

殿御うかゝひ候はんやと申されけれは、あいし何しに大納言殿御には申へき、あしき事ならはこそあらめ、きのふもきたの方の給ひしは、うちまいりも何とやらん、今はおもひとゝまりて、いかなる人にも見せたてまつらんと、大納言の給ふよしかたり給ひて候つると仰けれは、御めのとたちは、何事ときこしめして、御うちまいりのとゝまりの給ふらんと心くるしくそおもひ給ひける。日も暮けれはあいしかへり給ひぬ。中将はいかにとの給へは、いかゝ候へきやらんと有けれは、世に心くるしくておわしける。扨二三日ありて、あいし中將へ申させ給ひけるは、此君を申うかめむ事は、ちひきのいしはなをかろかるへし、さりなから文あそはして給り候へ、また申て見むとの給へは、中將は思ひわけ給はす、心のうちにおもひしなは扨ありなんものを、軒端のおきのほに出初て、今一しほの物おもひかなと、おほしけれとも、かやうにの給へは、扨おもひやむへきことならねは、かくあそはしける。

朝夕に露のみしけき袖のうゑ、なさけはかりにあはれともしれ。

かやうにあそはし、引むすひ、よしなき事なれとも、御なさけをうけ給へと申とて、うちなきて大宮へ歸らせ給ひける。噫あいしふみとりておほしけるは、あわれものうきはゝの御はからいかな、こゝろをつくし、ひよくのれんりのかたらひも、かわるはおとこの心なり、いわんやことそへの人の心さしを、我にちきれとむすひ給ふこそはかなけれ、とにかくに御身をうらみ、世の中をあちきなくおほしめして、なみたくみてそおわしける。扨もしほのまへ、おわりの君と申けるは、此程なとやらん、姫君うちしほれさせ給ふ、いことをしさよ、きたの方よしなき御はからいをし給ひて、御物おもひさせ給ふ御事よと申けるを、姫君聞給ひて、なとやはしめよりしるならは、夢はかりしらせさる事のうらめしや何と世の中を知さる人なりとも、心さしなくはかいなし、いわんやあまのよそなるうかれふね、こかれ給ふはことはりなり、今はいかにもしてあいきやうにあわせたてまつらんと思ふはかりなり。もしほのまへ御ともにて、御ふみたもとに引入て、月見へおわしまして、あそひ給ふ。なつかしけにおわしけれは、女房達あらありかたの御中や、まことの御おとゝひにてわたらせ給ふとも、かほとのおわしまさしとこそ申あいける。扨はるかに有て、ひとひ申ける人の文とて取出し、御かたはらにおき給へは、姫君はあさましく思召て、御顔うちあかめて、うちそはみてそおわしける。あいしの給ふやう、なとやそれ御覧候へ、心くるしやと有けれとも、とかく物をもの給す、いよ〳〵しつみておわしけれは、あいしはちからなくてかゑらせ給ふ。中將いかにとの給ふを、されはさま〳〵に申、

候へとも、かなはすと有けれは、中將物もの給はす、おもひ入たる御ふせい。あいしの君御覽して、あら心くるしや、いわきならねはまた申給へかしと、うらみ給ふけしきはなくて、いかゝとおほしたるさまを、中將御らんして、あら有かたの御けしきや、たかきも、いやしきも、かやうのみちはねたむならいそかし、此心さしいつの世にかはわするへきとそ思召ける。扨月見の事あいし申給ひて後は、大みやもおはしまさす、うち籠ておわしけれは、北の方はあいしに心さしふかくうちそひておわしますと思召、嬉しくもてなしかしつき給へは、あいしはかたはらいたくそおほしける。扨も中將は、花ほとゝきす、月雪にこと葉をつくし奉り、たまつさのかすはかよへとも、姫君はとりあけ給はねは、御返事はおもひもより給はす。中將かなわね物ゆへに、なにしにあらはしつらんと、くちをしくそおほしける。さる程に、あいしは月見のめのとたちをめしての給ひけるは、此程申せし事なとや露ほともきゝ給はぬ事のうたてさよ、姫君も御おとゝひもおわしまさす、わらはもちさふらわねは、たかひにおろかならす思ひ奉れは、なにしに御うしろくらき事を申へきとて、さま〳〵わりなくの給へは、大貮のつほね二位のつほね申けるは、まことにあいしの御心さしわりなくおはしませは、わろき事をははからひたまはしとおもひたてまつれとも、姫君の御心、露ほともくつろけ給はねは、心くるしく候、さりなからもと申て、かゑらせ給ひける。そのゝち、たまつさをかす〳〵かよはし給へとも、つや〳〵とり上給わす、あいしのおわしますをもむつかしくおほしけれは、大貮のつほね申されけるは、なとやあいしの姫君はたゝせ給へは、うらめしけにおはしますそや、かほとに御心をつくしかよひ給ふに、一筆の御返事はくるしからすと申給へは、姫君、いかてさやうの事の給ふそや、此程父大納言殿何とやらん久しくおはしまさねは、心くるしくおもひへ(ママ)るに、よしなき事うらめしやとの給へは、めのと御ことはりとおもひ、いよ〳〵申なき給はんやうもなし。其後、大納言殿かきたへまいらぬとて、月見の御所へいらせ給ふ。姫君よろこひおほしめし、誠になつかしけにその給ひける。扨大納言殿、大貮のつほねにの給ふやう、あいしの御方には、とく大寺の中將かよひ給ふときゝ、心ゑて女房たちはしちかく出給ふに、また姫君なとやらんおとろへ給ふこそ心くるしけれ、あまり〳〵御おこなひしけくし給ふな、さためて母上はしやうふつし給ふへし、哀母上のわたらせ給はゝ、うゑはあらし、今わの時もうちまいりの事をの給しものを、今ははやかなふまし、いかなる人にも見せたてまつるへし、女房たちなとや月花をも見給ひ、姫君なくさめ給へとて、たち給ふ。扨姫君はいかな

る事をきこしめして、女御まいりのさまりけるよと、世の中おそろしくおほゆるに、よしなき御返事なとせよとの給ふことのうたてさよとの給へは、いよ／＼御ことはり申へきやう、さらになし。扨北の方におにかわらのまへはから（た脱カ）い給ふやう、あやしき月見のかたよりあか月ことに歸るなとゝいふのゝしらせ給ゑは、大納言殿も女御もきこしめして、いかてさやうの事あるへきかとおほしめしけれとも、かくさなからいかてかたしけなくはさて、うち參りもおほしめし、さまり給ふ。さるほとに北の方月見へかきたへておはしまさねは、姫君あはれまことの母上にておはしまさねは、つねにわたらせ給ふへきにとて、さま／＼こうちなけきてい給へは、御ちの女ほうたち、あはれあいしの君は北の方にはまさり給ふものかなと申あいけれは、姫君ことあいしの君ならては御心やすき事におほしけれとも、此ほとはよしなき事をの給ふとて、御うらみ顔にておはします。扨も中將はたひ／＼の返事なけれは、世の中にもあちきなくて、いから（な脱カ）ん山のをくにも引籠り、花のたもとを墨染になしつゝ、ひとへにらいせのちきりをいのらはやとおほしめして、なをしの御袖をぬらし給へは、あいしの君は世に心くるしくおほしめして、ひとしものこそおほきに、いかなるつみのむくひにや、かやうのうき事にあいけんこさのかなしさよ、此

事かなわすはいよ／＼中將の御心のうちもはつかしかるへきと、おほしめして、の給ひけるは、此ほと心をつくし申かいはなけれとも、さりなから文あそはして給り候へ、まいり候て見はやとの給へは、中將嬉しくおほしめして、文まいらせ給ふ。やかて月見へおはして御覽するに、折ふし姫君は手習しておわしける。むかし少納言の戀路にまよひ給へる所をあそはしけるを見給へて、仰けるは、いかにむかしの人も戀する事のあれはこそ、今の世迄もつたへつらん、扨もあわれにおはします人は、命もあやうきほとゝきゝ候へは、さためなき世にふしきの事も候はゝ、御身のつみのいかゝとおほしめすとて、文取出し、御前にさし置給へは、姫君はつや／＼見給わす、あいしの君、あら御心つよや、人のおもひは一念むりやうこうとて、つみふかし、なさけの道をしらさるはしやとう／＼をうけ、小野の小町なひくけしきなけれは、かこをひちにかけ、わらひを折、道行人に物をこい、うき世をすみけるとかや、むかしうつくしかりし人も、ひとの思ひをはらさ（こ）りしかは、あるひはおにとなり、あるいは物くるひておはすて山の月に面をさらしつゝ、らい世もたかふ事なしとつたへきく、朝夕の御おこなひに、母上もろともにしやうふつとこそいのりて、しか寺の上人の御手はかりをむすひ給ふとかや、戀する人をそほとけもなふしゆたれ給ふそか

しと、さま〳〵におとしすかしまいらせて、さりとてはそれ御らんして、一筆の返事あれとの給へは、いとゝしつみ給ひて、御顔もあけ給はす。あいしの君は、かくおはしますらんことのうたてさよ、わらはか申あつかはは、一度の御返事あるへきとこそおもひしに、またむなしく返し給ふへきかと、かきくときうらみかほにての給へは、大貳のつほね御ことはりとそきゝなして、かほと御こゝろつくさせおわしますに、なとや少の御情はかりも文御らむせよかし、何かはくるしかるへきと、わりなく申けれは、御心ならすに見給へは、まことにやさしく書給へり。

かす〳〵に　むすひそかへる　たまつさの、
さのゝふなはし　ふみかへし、　いく度袖を
ぬらすらん、　おもひを人に　つけそめて、
いそたつ浪の　おのれのみ、　くたけて物を
おもふかな、　いつまてうき世に　なからへて、
つれなき人を　うらむへき、　露の命の
きへはてゝ、　けふりとならん　はてまても、
おもふあたりは　たつしきに、　こゝろなき

なにはのあまの　袖までも、　やされはこそは
月もさせ、　なさけを　うつす世のならい、
あるかなきかの　かけろふの　はかなき
夢としりなから、　心つよくて　つれなくも、
あるしかほなる　おそろしき、　さてもいかに、
たへぬ思ひの　くつおれて、　我身はかなく
なりはては、　戀のけふりの　余所までも、
名のたちぬへき、　扨いかに、　御身のうへの
いたわしや、　まよふ戀の道　思ひ置まて
かなしかりけり。

我戀はよし野の奥の山なれや、思ひ入ともとふ人もなし。

とあそはしたるを、大貳三位のつほね見給ひて、あらおもしろや、筆のたてやう、もしのならひ、むかしのなんはんしうやうかかきゝ筆、かんせうしやうの有ひつも、これにはいかてまさるへき、あしからの明神も戀せはやせぬへしとの給ふも、けにことわりやと、あはれにおほしめして、一筆の御返事さふらへと申けれは、姫君もなさけ

はしろしめしけれとも、世の中もいふせく、人の心もいかゝと思召て、うちそはみ給③へは、あ(い脱カ)しなにしにこゝろよわくとりつきまいらせて、わらはさへなさけしらぬものと、おほさんことのはつかしさよ、わらはは姫君のおほせならは、火の中、水のそこまてもとこそ思ひたてまつるに、此ほとに心つよき御筆のうたてさよ、今より後はみつからも、雲井のよそになりはてゝ、かりの音つれもたへなんとの給へは、姫君世にくるしけに思召て、なにしにさやうにおもひたてまつるへき、さらはあいしあそはし候へとありけれは、わらはかお手をわしり給ふ人也との給ひ、墨すりなかし、筆に染、はや〳〵とすゝめ給へは、あやしけにて御心ならす、かくなん、

露の身のあた(公脱カ)るものとしるならは、こゝろにかけてさのみおもひそ。

とあそはし、うち置給へは、御心やす〳〵嬉しく候とてひきむすひ、たもとに入て歸らせ給ひけり。扨中將おはしけれは、御文取出しまいらせ給へは、中將はうとんけの花まちへたる心地して、御覽すれは、誠にうつくしさかきりなし。つく〳〵と見給へて、うれしきことにもけふり。はたへせさりけり。此歌の心は古今集(に脱き)あり。

今更にはかなき世をはおとろかとしりていとわぬ身をなけくやと。

此歌の心なり。いとゝやるかたなく思召けるにも、あいしの御心の内、なとかなさけもおはしまさて有へきと思召て、の給ふやう、かやうに候へはとて、君をおろかに思ひ奉らすとて、うちわらひ給へは、あいしもとより我に御心さしにて候らはす、なにしにうらみまいらせ候へし、いかにもとこそおもひ奉れとこその給ひけり。扨も大宮の關白殿は、中將京極へかよひ給ふは、夢にもしろしめさすして、いつくにひきこもりおはすらん、うちの御宮つかへもし給はて、さのみめのとの方にかとの給へり。扨五月五日の夜、たいりに御せちへとて、くぎやう殿上人あつまりたまふ。大納言も北の方も女房達引くし參り給ふ。あいし、よきひまと思召て、月見へおはして、大貳のつほねにの給ふやう、姫君の心にまかせはかなふまし、今夜はよきひまなれは、あいちかつけまいらせはやと思ふ也との給へは、めのとたちこゝろへ申と申せは、うれしくおほしめして、姫君に參りて、今夜はだいりに御あそひとて、みな〳〵まいり給へり、いさやわれらもくわんけんして遊ひ候はん、昨日ほうしやうしよりまれ人來りて候、ひわの上手にて候、くるしからぬ人なれは、めしてくわんけんせさせ給へとの給へは、はしめたる人は、はつかしとの給へは、うたてや、さのみ御心なおきたまひそ、われにもしたしき人なり、はつかしき人にもなく候と仰けれは、さらは御はからいとの給へは、あいし嬉しくおほして、中將に此よし申給ふ。いかに心を

つくし候へとも、かなわしと、夜忍ひやかにいらせ給へと有けれは、中將有かたき御心さしかな、少もほいなきけしきもなしと、いよ〳〵うつくしき御心はせに見へ給へは、なさけふかき御心かなとの給へは、あいしはおもはぬ外のちきりこそ誠はつかしく思ひよりなから、君はわすれ給ふとも、わらははかわらしと有けれは、中將此ほとの御なさけは、いつの世にかはわすれ申へきとその給へけり。扨も中將の御くしをなでゝ、御かつらかけさせまいらせて、藤重のから衣、紫のうちきにくれないのはかまめさせて見給へは、まことにうつくしき上ろうなり。あいしは、さきに中將はなかに、もしほのまへ御ともにていらせ給ふか、ませかきのほとりにて、あいしの給ふは、かの君まことによのつねならすおはしめせは、御覧するよりしては、人のなさけをもわすれ給ふへし、此ほとの御名残、たゝ今はかりとの給ひて、御袖はさなから須磨のあまのしほたれ衣とそ見へ給ふ。中將あわれとおほしめして、いまさらなにしにさやうにの給ふそや、いかて此御なさけたしやうこそふるとも、わすれ奉るへきかとて、さすかに御袖をぬらし給ふ。もしほのまへもうちなきてまいりける。扨月見へおはして、ありつるまれ人つれてまいりたれと、あいしきちやうのうちに入給ふ。まれ人は屏風のかけにゐ給ふ。御とのへ火ほのかによく見へと

も、きちやうのほころひより、姫君はりんとうの唐衣五ッかさねて、紅梅のうちき、ちしほのはかまめし、うちそはみ、ことしに御手をかけてわたらせ給ふ御有さま、まことにらうたき事かきりなし。八月十五夜の月のあいきやうこまやかに、やうはいとうりのよそほひ、せいたいの匂ひみちたる御有様、ゑにうつしても、筆にはかよはし。おなしみやこにむまれあいて、かほとの人に一時なりともちかつかん事、いきなからしやうとへまいりて、しやうしゆほさつにましわりたらんも、これにはすきしとそ思召ける。扨あいしの給ふやう、はや御琴あそはやとの給ひけれは、まつまれ人にこそと有けれは、さらはまれ人ひき給へとそ仰ける。中將はひわをあわせて、さうりくわのきよくをそひき給ふ。あいしもひわのはち音けたかくたんし給へは、姫君ことをたてなをし、つまをとけたかくひき給ふ。中將は姫君たちの御のふのほとを御らんせんとおほしめして、あまたのかくにうつり、ひきよくをひかせ給ふは、二人の姫君すこしもたゞ〳〵しくもなく、本かくりんせんきよく、次第〳〵に引給ふ。中將あらおもしろや、いつれもおとり給はす、ありかたさよ、たいりの御(あ脱カ)そひもこれにはいかてまさるへきとおほしめしける。扨くわんけんも過けれは、あいしの君、夜もはやふけぬらん、かゑらはやと思召て、いさやまれ人うつらせ給ふ

との給へは、姫君はまれ人のひわのきよく、まことにおもしろくこそ候へ、はしめたる人はつかしく候へとも、はや御らんし候へは、つねにはとの給へは、あいしさこそさてたち給ふ。もしほのまへ心をあわせたることなれは、燈をうちけして、あら物うや、あやまちしたりと申せは、大貳の君三位のつほね、女房達いかにや、これはとて立めくる。そのひまに中將はきちやうの內へ入給ふ。姫君の御袖をひかへ給へは、大貳の君と思召て、はやあいしはかへらせたもふやとの給へは、はやかゑり給ふとの給ふこゑ、あらぬ人なり。少納言かと有けれは、おともせす、中將はいかに姫君との給ふこゑ、あらぬ人なれは、こはいかにとはかりにて、たへいり給ふ。めのとの君たち、御ことはりに思ひて、やう〳〵に御心を取なをし奉り、中將もきもをけし、の給ひけるは、あまりにわりなく、さま〳〵の給へとも、つけわたるしのゝめの空もあけゝれは、人めつゝましく(こ)おほへけれは、いつしか心ならす歸り給ひて、仰けるは、かほと心ふかき人なしとの給へは、さやうに心ふかくおわすれはこそ、此ほとわらはか心もつくして候へ、いかにも御こゝろをとり給ひ候へ、さりなから今は御心やすくこそ候へとて、まことにゆゝしくの給へは、中將いよ〳〵やさしくおほしける。扨大宮へおはしけれは、關白殿御らんして、なとや夕へのせちへには參り給はぬそ

や、いつくにおはしましける、さやうにふさたにては、世をたもちへきかさて、しか〳〵との給へは、中將は御みゝにもいらす、たゝ京極のことのみ御心にかゝり、はう〳〵として、おわしける。扨日も暮けれは、姫君月見のまへをめして、夕へのやうに火なとうちけすもの有、かうしなとよくつよくなんとゝおほせけれは、心ゑぬものにてよくこしらへてふしけり。扨中將おはしけれは、少納言みなみのかうしより、いれ奉りけり。中將はさま〳〵にわりなく、此ほと御心つくしたるやうを、よくすかし、あわれをの給へとも、姫君いとゝしつみて、御へんしもなし。かくてよな〳〵かよひ給ふほと、北の方きゝ給ひて、世にほいなく思召て、おにかはらのまへをめしての給へは、あさましくおかふとてめにかけて見るほとに、ある時あさかゑりを見出して、かくと申せは、北の方なのめならすの給へは、あいしきゝ給ひて、いかて左樣の事おほせしそや、もとより我に心さしある人なりとも、かわるは人のならひなり、いわんやとりちかひ給ふこそ、人きゝもはつかしく候へ、かやうの御はからい、初めよりしるならは、なにしにあい見るへき、左樣になをもの給へは、みつからみとりのかみをきりすてゝ、花のたもとをひきかへ、こき墨染に身をなして、いかならん山の奥にも引こもりなんとの給へは、北の方さやうにはからい候も、人の爲ならす、御身を世にあ

らせんためにてこそ候へ、今より後はともかくもとて、歸り給ひぬ。さるほとに、中將殿、あか月かへり給ふに、琴の音かすかにきこゑけれは、おもしろの琴の音や、いつくなるらんときゝ給へは、あいしのたいにきゝなして、こはいかに人の御心さしをほとなくわすれけることのあさましさよ、いかはかりうらみ給ふらんと思召て、たち給へは、あいしさすか心ほそくてかくなん、

人さわぬひとりまろねのさひしさを、まともる月にとわれぬるかな。

とうちゑいし給へは、まことにあわれに思召て、たゝすみ給ふに、はき糸の花ききやうかるかや女郎花しおんりんとうわすれ草われもかう、離を忍の草むらことに、かうろきはたおりきりきりす、こゑ〳〵にすたく蟲の音まても、折しりかほにきゝ給へはあいしかくなん、

我こひはひとのなさけとなりぬかや、うらみかほなるむしのこゑ〳〵。

とうち詠給ひて、けいしやううのきよく、男にすてられて物思ふといふかくのつまおとけたかく引給ふ。中將あわれに思召て、たいのかうしをほさ〳〵とおさつれ給へは、もしほのまへ、秋はけしき風の音かやとて、あけられけれは、中將おはしまし、いかにや姫君、此ほとかきたへまいりはんへらぬ事、いかはかりうらみ給ふらん、

心つよき心をなひかさんとて、おもひなから、すきゆき候へは、御なさけをわすれたるとおほすらん、世々みらいをふるとも、御心さしいかてわすれはんへらんとの給へは、あいしは少もうらみ給ふけしきもなく、まことにおつる涙をにひつゝ、もし御かとたかへかやと、うちゑみ給て、いかにも御心なひかして、すへ目出度おはしませとの給へは、中將有かたの御心とて歸り給ひぬ。さるほとにきたのかた、もとより御心さしとおほへとも、うらめしや、

雲の井にあれたるこまはつなくとも、ふた道かくる人はたのまし。

といゝけん事、今身のうへにしられたり。月花よりもなをめつし[に]しきあいしに、物をおもはするうたてさよとの給へは、おにかはらのまへ、我もおとりまいらせす、うらめしく候なり、たゝ大納言に申させおはしませと申けれは、けにもと思召て、大納言殿ゑきこへるやうに、あいしの方におはする人、此頃月見へかよふなるよしきゝ候へは、ふしきにこそ候へ、なとや御うちまいりもとゝまり候はゝ、いかならん人にも見せ給へかし、かたちはいみしき人の、ひとりかちにてはよき事の候か、人きゝ見くるしく候、なのめならすの給へは、大納言きこしめして、ふしきなるしさひかな、なりから左樣の事あるへきに、大貳のつほねしらてはとて、くちおしく思召ける。其

後はるかに有りて、大貳のつほねをめして、大納言殿の給ふやう、姫君きさきにたつへきなりしかとも、何くれにとゝめぬるこそうたてけれ、さりなからうちこもりてはよしなし、こんゑの中將に見せたてまつるへしとの給へは、大貳のつほねはかゑりまいりて、姫君に此よし申給へは、中將の事、父きこしめされたる事のはつかしさよとて、雪霜ならは消もせてと、やるかたなくそしつみ給ひける。扨中將おはしけれは、大貳のつほねさま〳〵と申給へは、中將おとろき給へて、いそき大みやへうつし奉へし、此廿日は吉日也とさため給ふ。さるほとにこんゑの中將は、ひめ君の事を傳へて給ひて、あけくれなやみ給へとも、きさきにたち給ふ人なれは、なかなか色にもいたしかたくて、うちの宮つかひもなく、たゝ引籠てあこ（ふ脱カ）れ給ふ所に、さいみやう寺の中將まいり給ひて、なにをさやうになけき給ふそや、大納言の御むこになり給ふへしと、さま〳〵と申給へは、まことならすとてうちふしなきぬ。いかていつわり申へきと、さま〳〵にかたり給ふ。中將まことに嬉しくて、かやうにうちこもり候も、此君ゆへなり、御うちまいりの御事なれは、申つたへへきにもあらす、たゝしつみ居りてはんへりつるに、難有事よとて、今は雲の上のましはりも申さんとて、悅給ふ。大納言は月見へおはして、御覽すれは、姫はいとゝ露おもけな御ふせい、

まことにあはれに思召て、の給ひけるは、かへす〳〵もきさきのくらいにそなはり給ふ。（脱文カ）さるほとに北の方、おにかはらにきこゑ侍やう、大納言殿は、廿三日にこんゑの御所へうつすへきとの給へは、中將は廿日に大宮へあいきやうをむかゑ給一ふへきよしつたへきく也、あいしすてられなは、じゆせのうらみなるへし、いんくわのむくいのうらめしさよ、いかなる瀨へもしつめはやとの給へ。（脱カ）おにかはらうちきゝて、やすきほとの御事なから、わらはかいとこ□□□□もとはほうしやう寺殿ゑさふらい、此頃は九條殿に候、かのものゝふをめして、姫君を何方へもなかしすて給へかしと申されは、北の方きゝあへり、よきやうにはからへとの給へは、二人のものゝふめしよせて、酒をすゝめ、此よしかくといゝけれは、思ひもよらぬ御事也、我かたのみ申たる九條殿の御ためには御一門也、かたしけなくも、いかてさやうの御事をと申けれは、おにかはら申けるは、せんそを申せはほうしやう寺なり、北の方はほうしやう寺殿の御息女なり、しかもなんちは二葉なり、せんそのしう君の仰をそむきはんへる物かな、よそのものたにたのむといへはさこそあれ、うたてしくも申ものかな、わらはかためにもなんちたちはよそならすとて、かきくれいゝけれは、力なくて、ともかくも申さりなから仰にしたかひはかたしけなし、またそむき申せはめうか

なし、いつれものかれかたき御事なれは、十九日のあしたと定めけれは、おにかはらのまへ申けるは、引出物を御くたし候へと申けれは、なんりやう、拾両つゝみ、白あや一重つゝみ添てひかれけれは、たまはりてかへりける。こんゑの御所には、世にきこゑたる京極の姫君むかへとり申、中將に心やす〳〵見せ奉らん、うれしさにこそ、初て御所をたまをみかきつくり給ふ。□□をは御門も、さう宮も、みやたちも何れも心をかけこかれ給ふ人なれは、父母嬉しく思召て待給ふ也。中將はもとより日の暮、夜のあくるをかそへ給ふこそあわれ也。扨もたいりにはさひせうかうとて、みくきやう天上人我おさらしと參りあつまり給へは、大納言もまいり給ふほとに、みな〳〵御ともとて御所うちには人もなし。あいしは月見へおはして遊ひ給ふ。きたの方もほとなく久敷とておはしける。扨姫君御めつらしきさまにておはします御ふせい、何にたとへんかたもなく、らうたき御さまに見へ給へは、北の御方さすかにうつくしく思召て、御心におほすやう、へたてある事はいかなれはかほとによらいのかたちもうけて、人にすくれ給ふ君を、なかさんと思ふ人心、我なからふしきさよ、さりなから中將かよひ給へは、うらみとそおはしける。扨花そのはな御覽して御遊給ふ。北の方もはへ〳〵しくあそひ給ふ。ひさしくおはしまさぬ人

のおはしけるは、そらおそろしき、何事も仰のまゝなり。頃は八月半のことなるに、はきはらの花おきすゝききちかうかるかや女郎花しけりあいけるに、あるなる花のおかしさよ、これなる花のいたひけさよとて、何心なく女ほう達にたわむれ遊ひ給ふ。北の方、なとや姫君たちも出て御覽せぬとの給へは、あいし出給ふ。なとやあいきやうはとの給へは、けしからぬ思召さんもわつらわしくとて、みすより外に出給ひ、月花を御覽しける。さるほとにものゝふは暮かたに參り、うかゝひたゝすむ折ふしなれは、よきひまと思ひ、はきはらの中よりはしり出、姫君をいたき、内より外にうせにけり。めのとの君女房達こゑ〳〵に、こはいかにひめ君とて、つゝきてはしり出給へは、すなはちたちかへり、たちのむねにてうちふせけれは、さうさいくれてふしまろひ、かなしみ給ふ。その間にいつくへかうせけん、あいしの君は其まゝみすのきはにふししつみ、たへいり給ひけれは、何れをわかすさわき給ふ事かきりなし。北の御方もさすかきもをけし給へける。大納言殿に此よし申けれは、いそきかへらせ給ひけれは、みな〳〵ふししつみ給ふを、御らんして、こはいかに姫君はとてなけき給ひて、なをしの御袖をしほり給ふ。十方へはや馬をたて、尋給へとも、御ゆくへもなし。扨大宮の中將は、その夜はしゝんてんの御やくにておはしま

す。何とやらん御むねさわぎ、京極の事のみ御心にかゝり、あけほのにいそぎ京極へおはして御覧すれは、大弐の局女房達一所にあつまりてなきこかれけれは、こはいかに何事そとの給へは、姫君を夕へ、もの〻ふにとられはんへりぬと申けれは、中將きゝもあへす、きちやうの内に入、御覧しけれは、手なれし琴も有、何れもたかはねとも、姫君はいつくへゆき給ふらんとて、天にあふき、地にふして、行ゑたにしるならは、いかならん火の中、水のそこなりとも尋ぬへきものをと、なけき給ふ、あはれにこそまさりけり。いやしきしつをしつのめにいたるまて、袖をしほらすといふ事なし。扨中將大宮へ歸り、やかて引籠て、ふししつみ給ふ。御めのとの參りて、何とてうちふしおわしますそと申けれは、みたれ心とのゝ給へは、父母きこし召て、さま〳〵の御いのりあり。扨もこんゐの中將は、此事きゝ給ひて、たゝうつゝともおほへす、なけき給ふよりかきりなし、いかならん山のおくにもとちこもりなんとおもひしに、ふたゝひ物をとふ事のかなしさよとて、又とちこもりてなけき給へは、まことにあわれにておはしける。さるほとに姫君は、その夜のうちに、よとの津よりあやしきこふねにめさせて、あまかさきひやうこの島をうち過て、ひるかこしまへつきにける。扨ひやう〳〵たる大きなる松一本おひたる、かの本におろしたてまつりて、

かたしけなくも姫君の御そはちかくまいりける。君の御さいこたゝいまにてわたらせ給ふと申せは、あいきやうはとられ給ひしより、うきぬしつみて浪のうへ(に脱カ)たゝよひ、御心もなくなり給へは、ことうしかさねてたからかに申けれは、姫君夢の心地にて、御めをすこしひらきて御覧すれは、月見の御所にてはなし、めのとの君とおほしけれは、おそろしけなるもの〻ふなり。又御心まとひて、きへ入給ふ。もの〻ふもさすかいわきならねは、あわれに思ひ奉り、なみたせきあへす。扨あるへきならねは、御身ちかくたからかに、いかにやきこしめせ、かいりきいみしくわたらせ給ふ君の、なとや御ほたいをしろしめされぬか、御ねんふつ申させ給へと申けれは、姫君御心に少たてなをし給ひて、扨はさいこにて有か、これはいつくにてあるそやとの給へは、もの〻ふかしこまつて、ひん後の國ひるか小島と申せは、扨いかなるとかにより、これまてはと仰けれは、中將殿、あいしの君とす(ゑカ)て、姫君に御心をうつさせ給ふとて、北の方ほいなくおほしめして、我らにおふせつけられて候と申けれは、扨なにとなるへきそや、みつからほとつみふかきものはよもあらし、母上にはしらておくれ、父にはさきたちて、なけかせまいらせん事のかなしさよとの給ひて、西はいつくそと仰けれは、もの〻ふきゐ入心地して、あの山のはと申せは、すなはち心ならす

つるきをもつて、御うしろへ立まはりけれは、姫君の給ふやう、いかにものゝふ、たしかにうけ給はれ、しする命はいつれもおなし道なれとも、つるきにかゝるはしゆら道の苦をうくるといふなり、左様の苦をのかるゝやうにはからへとの給へは、ものゝふあまりに心まよひて、はうせんとしていたりけるか、姫君御手をあわせて、南無西方極樂のきやうしゆあみたによらい、ねかはくは今生にて父にはなれまいらせ候つるとも、來世にて母もろともにひとつはちすの上にむかへ給ふと、ゑかうもいまた過さるにかなはし久しく物をおもはせ奉る、ものうきとて、つるきをぬき、うち奉らんとしけれは、つるき三ッにおれにけり。　ことうし申けるは、もとよりつるきをいとわせ給へは、島にすておき奉り、又つるきのおれけるも、たゝ事にてはなしと申けれは、かなしといふける(二)、それはさる事なれとも、いかならんあまのつり舟もきたりて都へつけ奉りて、我らか命有へからすとて、ゆみにていたてまつらむとすれは、もとはすよりおれにけり。　かやうにてはちこくうつりぬとて、かきいたゝき海へ打入奉り、いそき舟にのり、さほさしてこき行程に、あわちか島のせとにて、俄に大風ふきて、波山のことになりけれは、かれら武人は都にておほくの賞を給わりけれとも、今は何とやらすくわほうめてたき人をうしない奉れは、わらはかみやうかつ

きぬとこうくわいすれとも、舟うちかへし、そこのみくつとなりにけり。　扨姫君は夢の心地して、御覧すれは、浪うちきわに、大きなる龜、手をあわせてなけくけしきにて歸りけれは、姫君ふしきやな、いかなる佛神の御たすけや、むかしの山かけの中納言わかさ(二)かりかやうに有とこそ聞けとて、いよ／＼御きやうたつとくあそはしけることそあわれなれ。　扨も都には京極殿の姫君うせ給ひぬときこゑけれは、くきやう天上人以下のさむらひまて、御とふらひのこしくるまなかへやりちかへて、たうそく男女にいたるまで、御とふらいのなみたをなかしける。　御門きこしめして、御とふらいとて、藏人の少將を御つかひにて御文あり、

　きゝしより露おもけなるなてしこを、初秋風にちらしぬるかな。

とあそはしけれは、おなしく女御よりも、

　なく／＼もあとわかの浦つたひ、いかなる浪にたちわかれけん。

とあそはしける。　大納言かたしけなさになみたせきあえす。　宮の御方よりはふかく御うらみなれ、御とふらひはなし、内々には御袖をしほり給ふこそきこゑける。さるほとにさふらいとも東西はせちかい、尋奉れともかいそなき。　大納言の御命あやうくそおはしける。　こんゑの中將はくらまのおくしゆつくわうゐんにて、と

ちこもり給へけれ。父大臣殿、母上も京極殿におり給はすなき給ひけり。扨も姫君は、ひやう〳〵たる島に磯打なみの音すさましく、さつ〳〵とある松かせ心をなやまし、へしんも有へきやうもなし。暮方になりしかは、浦々の濱千鳥こきうかれたるあまのおふね、しをかまのけふりかすかにて、おもはぬかたへふきなひくけしき御らんするにも、いとなみたせきあへす。八月半の事なれは、月もくまなき松のもとをたよりにて、おはしけれは、磯の浪物すさましくゆらめきけれは、おそろしさかきりなくて、きへ入給へとも、たれかはこととといまいらせすへき。かゝる所に玉のかむり着給ふそくたいのしやうそくの人、つほよりきなるくすりを取出して、姫君の御くちにふくめ給へは、あちわい少おほへて、たゝなをり、ちからつきて見給へは、かむりめしたる人なり。いか成人なるやらんおほしけれは、我はこれしやかつたりうわうの第二のわうしなり、たすけ申さんためこれまて來るなり、氏神飛れうこんけんも、清水くわんおむも、みな〳〵これにおはします、心つよくわたらせ給へは、たゝいまもみやこへつけ申へけれとも、いまた世の中しつまらす、あすのむまのこくに風を出してつくしへくたし申へし、すへたのもしくおほしめし候へ、君をたすけ申つる龜はめいとの母なりとて、さま〳〵になくさめ給ひて、うせ給ひけり。

姫君有かたく、いよ〳〵御きやうあそはし、なみたもしほもあらそひて、たとゑんかたもましまさす、いまた露の命きゑ給はねは、うきみなからも、おそろしくそ思召ける。

折からかねのおとつれけれは、

我ことくものおもふらん、かりかねの、あわれもうきもおもひつらねて。

かりかねよ、都のかたゑ行ならはし、はしとゝまれこととつてもせん。

とかやうに心ほそくおほしつゝけて、おわしける所に、風俄ふきて大きなる浪こゝもとにうちけれは、おそろしきかきりなし。なみにたゝよふ舟のありさま、しところもところに風にまかせて行も有、あるひはろかひをとりあへすこと（さこ）有。姫君かれを御らんし、世の中のさためなくおそろしきも、御身にしられて、ねかはくはあの舟此しまへよせてたひ給へ、なむ大し大ひのくわんおんとねんし給ふ所に、大なるふねふきよせたり。人々いさや此しまへあかりてやすみ、命たすからんとて、めい〳〵にあかりけり。あの松の本にけしやうの物有、此島のぬしかやとははりけれは、あま君御座舟よりおりさせ給ひて、御覽すれは、うつくしきかきりなし。あま君たちより給ひて、この島のぬしにておわしますか、またりうくうよりいらせ給ふかと申給へは、姫君ほれ〳〵として御なみたをおさへ給ひけるは、さやうのものにても

さむらはす、都に宮つかいせしものなり、わろき事有て、じうのかんとう有て、なかされたり、しかるへくは、何くまてもひとしくおはして、宮つかい給ひ候へとなけき給へは、人々はおそろしやとおそれあいけれは、あま君はいたわしや、これゆへうせなはちからなし、いかてか見すてへきとて、みつから御手を引給ひて、御座舟にのせまいらせ給へは、おほくの人々こはいかに、りうくうの姫君をのせ給ふ事よ、あま君はたゝ心にてはわたらせ給はぬ、あさましさよとて、おそれとも、もちい給はす。扨あしき浪風もしつまり、海のおもてもうらやかになれは、これさへふしきなると申ける。扨舟おし出し、ひるか小島をよそに見て、かいしやう穏こき出る。扨もあま君一人の養子もたさま〳〵に、是ひとへに御熊野の御りしやうと悦て、御くしかきなて、やう〳〵に慰め給ひて、いろ〳〵の御衣はかま花やかにしやうそく奉りて、かしつき給ふ事かきりなし。明年は姫君もろともにくまのへまいらんとその給ひける。さるほとにはりまの國をよそになして、ひんこの國にそ着給ふ。姫君御心のうちにいつくともしらす、いかなる人にせられてなと成行うき世そや、都のかたはとき（ほカ）さかり、いよ〳〵行末つくしのはてときゝ、心ほそくて、さなきたに舟路の旅は物うきに、ならはせ給はぬ舟のさまやかた、浪にゆられてあさましや、もしほのけふ

りかすかにて、うらつたい行あまを舟、いそ松風のたえまより、寄てはかへす浪のたつ、ほのかに見ゆるかゝり火まても、哀にて、御袖のみしほり給ふ。折ふし、からのしろき鳥を御覧して、あれは何といふやとの給へは、都鳥と申せはなをもなつかしくおほしめして、かのあり原のなり平、いさことゝわんと有し事まても、思ひつゝけて、亦うちなき給へは、あま君まことにいとほしく思召て、とかくなくさめてこき行給ふほとに、日数つもりけれは、あきの國いつくしまの明神ふしおかみ、周防長門を過て、もんしか關にそ着給ふ。あくれははかたの津に着給ふ。それより御こしにめさせて、秋月の御所へそ着給ふ。くまのより御下り可申とて、みな〳〵まいり給へは、あま君御物語有やうは、御物まいりの御りしやうにて、めてたき姫君をまふけたりと、まことにうれしけにかたり給へは、一もんの人々は、何人にてかあるらめ、さりなから此世の人とは見へす、うつくしさよとそ聞へけり。さるほとに、いにしへの國司内くらんと殿のすみ給ひし花の御所を、玉をみかきしつらひて、きちやうにもやのみすをかけならへ、歌をよみ、くわんけんに心へたる女房達をつけまいらせて、かの御所にうつし奉り、わひらめ申さす、いつきかしつき給ふ事、なか〳〵申もおろかなり。姫君、御所のありさまを御らんすれは、都のほとはなけれとも、よしあるさ

まことそおほしける。たゝ朝暮都の方戀しくて、涙かちなる袖のうゑ、ほしかね給ふそあはれなり。かくて都にはあいしの君、あいきやうの事のみふかくなけき給ひけれは、北の方を初め奉て、淺ましやあいきやうなかしつるも、御身を世にあらせんと思ひてこそとの給へは、あいしは母上の御心さしのせつなる事は有かたくはんへれとも、佛神の慈悲、せうしきによつて、りせうをあたへ給ふと承り候との給へは、さすかおもやくおほしける。御所の女房たち申けるは、かほとことはりをしろしめす事のあり難さよと申あいける。扨大納言殿はみなみのたいにおわして、あいきやうのかたみにあいしをつねに見奉らんとの給へは、あいしの君いと御なみたにむせひ給へは、女房達もみな袖をぬらし給ふ。あいしはなからへても、人めのはつかしけれは、花のたもとを引かへ、こきすみそめに身をへんし、いかなる山の奥にもとちこもり、父さいしやうの御ほたいをもとふらひ、又はあいきやうの御いのりをも申さはやと思しけれとも、さすか母上に思ひをさつけ申さん事のおそろしく、うち過給ひぬ。御心ほそくてかくなん、

　墨染は着かたかりける衣かな、うき折ふしは思ひたてとも。

とうち詠給ひて、もしほのまへをちかつけ、清水へまいりて、あいきやうの御いのり

申さんとの給へは、女房達引くして、忍ひてまいり給ひける。中將は思ひにしつみ給ひて、うちふし給へは、父關白殿、母上大きにおとろきたまひて、さま〳〵の御いのり隙もなし。されとも戀のやまふなれは、そのしるしもなかりけり。思ひのあまりに京極へゆきて、なき跡なりともせめて見はやと思召て、いらせ給ひて、御覽すれは、めのとの君、女ほうたちはいつくいかなる所にかおはすらんと、ふしこかれけれは、いとゝなみたせきとめ給はす、爰かしこを御覽すれは、何れもたかはねとも、きちやうの内はものさひて、いと哀もますかゝみ、いかてかかけをはうつさんと、うらみなからもなつかしや、いつの世にかはわするへき、松風のはけしくきちやうにかよひけれは、

　なき人のすみあらしたる寢屋なれは、ものさひしくもかよふ松かせ。

とうちゑいし給ひて、なをしの御袖をかほにあて給へは、一しほあはれそまさりける。さるほとに中將殿は姫君の御行ゑをもいのらはやと思しめし、清水へまいりこもらせ給へて、夜もすから晝はひめもすにきせい申給へは、七日にまんするそのある月、御たうのうちよりかれうひんかの御聲にてかくそ聞こへける。

　君かとふ人はこれより西にあり、こゝろつくしに行てたつねよ。

ときこへけれは、ゆめのうちに御返事、申、させ給ふ。

しらぬ道心つくしに尋ても、いつくの國のそことしらせよ。かやうに申と思召て、夢さめて難有おほしめし、扨はいまた此世におわするを嬉しく、くわんおんの御りしやうと難有ふしおかみ給ひて、御下かう有。道にて仰けるは、供の人々皆〳〵、是より歸るへし、忍ひて行へき所あり、あすの暮かたに、これまてむかいにきたるへし、其ほとは父母に申へからすとの給へは、御供の人々いかて御くるまにめされす、道のほとも人め見くるしきと申けれは、忍ひやかに行へき所あり、たゝかへるへしと仰ありけれは、力なく、あすはとくまいるへしとて、めい〳〵に歸りはんへる。扨清水さかいにいかなる山ふしの有けるをかたらひ給ひて、すゝかけと衣をしよもふなりとの給へは、山ふしうれしくおもひ、やすきほとの御事なりとて、まいらせけれは、中將はそくたいの御しやうそく、みな山ふしに給はりて、かのすゝかけ衣を召て、わらくつはき、めしもならわぬ物をめし、西國しゆきやうと心さし給ふ、御心のうちそ哀なる。扨山崎・せきとうち過て、やわた八まん大ほ（さ脱カ）つをふしおかみ、尋る人にあわせて、二度都へなにとそ歸へし給へときねんして、いそき給へは、宮野といふ所に着給ふ。あくれはひやうこへ着給ひて、ひ（ん脱カ）せんをたつね給へと

も、更になし。いかゝすへきと思召折ふし、としのほと廿四五はかりなる（を脱カ）のこ、みのかさきて、さもいやしけなるか來て申けるは、きやくそうはいつくへおはします、もしつくしへ下らせ給はは、おなじ舟にひんせん申たきと申けれは、中將うれしく思して、我はさらにたひのあんないもしらぬ物にて候に、嬉しくこそ候へ、さらはつれたち申さんと仰けれは、おとこ舟を尋出して、のせまいらせて、こき行ほとに、都をは浪路はるかにへたて、夜晝こき行ほとに、むろのとまりも打過、ひんこの國につき給ふ。扨都には中將うせ給ふとて、父母なけき申におよはす、一もんくきやう天上人の御なけき、くるまをやりちかへ、京中のさふらひはせまいる。みやこのさわき申はかりなし。さる程に御門きこしめし、人おゝき中にも、中將ほと萬すくれたる人な（脱カ）りしにとて、御なけきかきりなし、扨關白殿・母上あまりの御なけきに、晴明かなかれのあるをめして御うらなわせ給へは、ふみをひらき申やう、これは波の上にたゝよい給ふなり、いか樣さいこくしゆきやうと見へ給ふ、來年きさらきやよひの頃はからす、おほくのくんひやうにて、都へのほらせ給ふへし、人の御うへまて目出度事あるへし、ゆめ〳〵御なけき給ふましと申けれは、扨何としてたつねへきと仰けれは、いかに尋給ふとも今はかなふまし、たとへ御尋候ともおしき事候へし、明年

まて御尋候へと申けれは、關白殿御悦有て、かすのたからをくたし給ひて、中將都へ歸りて、御悦有へしとそ、いまた此世に有と思へは、としをまつこそ久しけれとも、後は嬉しきにとて、山々寺々にて御いのりはひまもなし。扨中將はひんこの國をすき給ひて、みなみはそうかいまん〳〵として、ふたらくせんをふしおかみ、くわんおんのしやうこもゆかしくて、北は青山かゝとそひへたり。屛風を立たるやうなるいわやは、ふとうのすませ給ふかとたつとく覺て、松風さつ〳〵として琴引ならす心地なり。日も暮方に成ぬれは、入江〳〵の濱千鳥、なみまのかりまくら、あまのおふねのこきうかれたる有さまを、中將御覽して、いとゝ哀そまさりける。いり日に添てかくなん、

なこのうら雲井はるかになかむれは入日をあらふ奥津しら浪。

となかめ給へは、くわしや申けるは、あらおもしろの御歌や、わらはも御返事申さんと申けれは、舟の內の人々手をうちて笑ふ。あの有様にして、いかやう成事申へき、世にはくせものおゝきて（こ脱カ）殊の外に笑ひける。此男申けるは、いしやうはいまのかり物、色のくろきはむまれつき、唯人は心にてこそ候へ、かのくわしやか申さん事をきゝてわらはせ給ひて、いまた申さぬさきに笑はせ給ひて、かゑりてわらはれたも

ふなと申けれは、中將けにくわしやの事わりなり、はやよみ給へと仰けれは、きやくそうの仰ならは申さんとて、

あらへともなかれもそらはありけり、なみのそこにもそらはありけり。

と申けれは、中將はふしきにおほし召て、いかさまにしさい有人也とて、そ舟の內を慰め給ひける。扨わらいける人々は、みなはしをそかきける。人を笑ふ事あるましき也。かくてこき行けるほとに、あかまかせきにそ着給ふ。其日は浪風あらくして、しゆくにとゝまり給ふ。此宿にはよしあるちやう、かすおゝき中に、かうますと申ゆふ君有、中將を見たてまつり、いかさま此山ふしはたゝ人にてはあらす、天上人の西國しゆきやうに御身をやつし給ふと思ふなり、いさやもてなし奉らんと、わかきちやうあまた引くして、まいり、酒をすゝめまいらせて、いまやうをうたひ、琴ひきひわを出してもてなし申せは、中將はなさけ有君かなと思召て、琴のひきよくをそつたへ給ふ。くわしや申けるは、都のほり候へとも、かやうの面しろき事はうけ給り申さん（こゝ）と申せは、君とも何かきゝなして、かやうにいふらんとわらいける。扨かうます申けるは、これほとの上手はいまたなし、しかるへくは二三日も御とゝまり候へて、かくをもおしへ給へかし、さもあらはこれよりあしやへおくり申さんと

申せは、中將とまりたくは候へとも、大事の御つかいにくたるほとに、とうりうなとはかなふまし、命なからへ候はゝ、都へのほり候はん、その時、かならすのほり候はんつるとて、出給ふ。 かうますちからなくてかくなん、

かきりありてめくりあふへき命とて、おもはゝこそはすゑもたのまん。

となかめけれは、中將かくなん、

かきりあらはめくりあいなん山のはの、空行月もたのもしきかな。

とあそはしけれは、くわしやとりあへす、

頼そとちきれることのさもあらは、もんしかせきにかきとゝめけれ。

とゑいしけれは、君ともこれをきゝて、やさしの申事や、されはすかたにはよらさりけるとて、ほめにけり。 かくて舟をし出して、かせにまかせて行ほとに、舟はしたいにとをくなる、島かくれして見へす。 かうますちからなくて、我屋にかゑり、おもかけ身に添て、一日二日と、日かすをふるほとにうちふしけれは、ちやうちや、これを見て御身のはかなき物おもひし給ふものかな、わかき時のならいにて候へは、心くるしくこそ候へ、きやくそうはさためてのほり給へし、それをまち給へとそさまさまにけうくんすれとも、戀の心なれはしるしもなし。 妹の龜君・母もろ共になきか

なしみけれは、かうます申やう、母上や龜君に名殘おしう候へとも、よしなき人を見初て、はかなさよ、もしきやくそうとをり給はは、此ふみを見せ奉れとて、龜君にあつけて、泪をなかしてかくなん、

夢の世にはかなき人にちき（り脱カ）して、露ときへぬるあとをとへかし。

とうち詠て、ほとなく露ときへにける。 母上や龜君なけく事めもあてられぬふせいなり。 長者も人おゝき中に、かうます程のゆふ君なしとて、なけきける。 中將はあしやの入こと（江カ）に着給ふ。 其後かちにてあゆませ給ひける。 三尾濱をとをらせ給ふとて、中將あさましや、いつくをさして行らむ、つくし九ヶ國のうちなれは、そこともしらてはかなさよ、つら／＼おもへはあくゑん也、かゝる地こくにおちんことのかなしさよ、何しに人を見そめつらんとかなしみ給へは、くわしや申けるは、あら心よわや、思ひとは何そや、一さいのせんあく、た（だ脱カ）一心也と見る時は、善もなく、惡もなし、おもひも、悦もなし、これをさとりたるを法のえたりと申なり、これをしらさるをまよひといふ、まよいとさとりはしやへつなし、まよひすなわちさとり也、有無のちうけんにせひをいふ事なし、やまふははくちのほんふ也、もんしゆこれを見てまことのさとりなりとの給ふ、有無をはなれたるにいりぬれ、法身はんにやげだつを

くそくして、せひ〳〵しやう〳〵として、ことをせに蕩さしみなくそくせうちこく地こくにあらす、心に地こく有、極樂こくらくにあらす、むねのうちにほとけ有、されは法にかなふものを見れは、ほうにかなはし、こゝをもつて、善をあくも、樂もみな無也、むねのうちにおいて眞如實相の法有、何事によりて思ひ給ふへし、さやう申はくわしやにはおとり給へりと申けれは、中將あらふしきのくわしや殿や、眞如實相の法もんをとき給ふ事のふしきさよ、そもおことはいかなる人そ、唯人にてはあらすとの給へは、くわしやうけ給り申やう、たのみて候しうのもとへ、尋き山ふしの、さい〳〵御いり候とき〳〵かやうのほうもんをめされ候か、みゝにとゝまりて候と申けれは中將けにもおと（二說カ）の給ふことく、思ひも苦もあるましきに、ほんふの身なれは、此道にまよふ也、是をさとりなは、なにしに戀路にまよふへきとの給へは、くわしや、けにことわり也、ほんふのならいにて、たかきもいやしきも戀路にまよふためしあり、くわしやも十八九のとし、戀路にまよひて三ヶ國をしゆきやうして、尋あいて候、くわしやほと姿おかしき物は候はねとも、心さしのふかきによりてたつねあひて候（以下闕）

こゝろさしふかけれは、かゝる道をとをり給ふに、岩かとにて足をきり、なかるゝ血あけのいとのことし。　又とくしやのまんとするときし、ゝんといふつるきをぬきてはらひ給へは、ひかりにおそれてにけうせにけり。　七日の道なれとも、かのきんのう太子は二七日にあゆみ、くわら國につき給へは、りうくん（しやう說カ）はくわら國にはおはしまさて、心に有ときこへしかは、御なみたをともとして、またかの國（に說カ）おもむき給ひぬ。　かの道に大川なかれ、たやすくわたるへきやうもなし。　太子はあきれ、むなしく是より歸るへきかとて、天にあふき、地にふし、きへいる斗にて、ねかわくは、諸天のはからひに、此川わたし給へ、千部の法花經をよみてまいらせん、ふつしんによにあふへきちきりなくは、命をめし給へと、なく〳〵いのり給ふ。　りうしんもあわれと思ひ、さいといふけた物にへんして、太子をなんなく大川をわたし申せは、りしやうくんにたつねあい給ひて、なみたをなかして、道すからの御物語、かきくれの給へは、りしやうくんわうきゝて、たけき心をひきかへし、これまて唯ひとりおわします事の、あはれさよとて、袖をしほりつゝ、ふつしんによをゆるし給へは、太子は悅給ふ事かきりなし。　さるほとに太子のちゝ、しんのみくわうほとなくほうきよならせ給へは、かむのかうその御代をもち給ふを、りしやうくんきゝ給ひて、いわれなし、きんのう太子おわしますうへに、たこくのわうに代をつかせ申事あるへからすとて、あ

そうきのおしよせ、くわうていをせめ給へは、きんのうの太子をくらいにつけ給ふときゝ傳ゑたり。　又けんそうくわうてい、やうきひにおくれ、あまりの思ひ、りしやうくんかしゆつにて、はんこんかうをたき給へは、ようかんあさやかにゑめるすかたも見給ふ。　かたらんとすれは、物いわす、とらんとすれは、けふりとなりて給ふ。　その時くわうていも、もんせんひやくちして絶入給ふとかや。　むかしかしこき人達もかゝるためしあれはこそ、今の世までもつたへたり。　いわんや日本あき津しま、わつかに六十六ヶ國に都とつくしの間、わつかなり、何事もむやくなり。　いそき都へ登候はんとおもふなり。　なんせい（なか殿カ）の物共にふれて、御供させられよ、二月のすへには出立やうにいそかれよとて、御座敷をたゝせ給ふ。　扨大貳殿は姫君とり奉らんと思ひしに、今さらあさましくて、傳内左衛門にむかいて、なとや是程の事いままてかくとはの給ぬそ、いなかの人にて上らふを見しり申さて、さこそろうせきなる事もありつらん、にく〳〵との給へは、傳内左衛門、さしも心たけきおのこなれ共、ふるまいすこしたる事なれは、しほ〳〵として至りける。　大貳殿はあま君の方へおわして、あま君はよもしろしめされし、此姫君と申は、京極大將殿の御むすめ、日野の大納言殿には御まこにてわたらせ給ふ、とうたいの女御こそおやにて、やかてき

さきにたち給ふへき御人也、都にきこゑ給ふひしんにておわしけれは、御門も、しきふきやうの宮も、心をかけ給ふに、中將はいかなるたよりにかよひ給ひけん、ふしきさよ、御身をすて、こゝまて下り尋給ふも、御ことはりなりとて、またあま君のかろかろしき人にて、わたらせ給ひ候はゝ、我ため、人のためあしかるへし、今は難有きあま君かなとの給へは、あま、世にうれしけにて、心ふかく、今まてついにかくとの給はて、たゝ都の者にて宮つかいせしか、あしき事有て、なかされたりとの給ひしかとも、世のつねの人にてこそおわすらんとおもひしに、さやうの上らふにておわしける事よ、一夜も御やかたにはおそれなり、へちに御所を立すへ奉らんとおふせけれは、大貳殿尤しかるへしと、たとへ都へいそき給ふとも、九國のふしともはせまいりてこそ、御のほりあるへし、二月すへならては御のほりあるましとの給ふ。　あまうちわらいひて、大貳殿のふみのきゝをなさけなくもうちかへし申て、今またうらめしくおほすかやとの給へは、大貳殿あらこともおろかや、さやうの事かりそめにもの給ひそ（と殿カ）仰ける。　ちくこの國々内誰かし何かしと名字をしるしてうけ人にふれられける。　關白殿の御きんたち二ゐの中將殿、秋月に下かう、十五日迄はかたのごとく、大はんは大貳殿也、都の人なれはしき〳〵にきら〳〵しくそ見へける。　ひそうの

名馬、白さき小からすといふ馬貳疋に、白くらおきて、とねり八人つゝにひかせて、つくしきぬちやうほんせんひき、しよつかうの錦百たん、やなきうらの御きぬ十二重、是は姫君へこそまいらせけり。扨大貳殿は瀧口をはしめとして、くまさかの新左衛門・へん見七郎なかとの十郎・日野の五郎・まのゝ十郎、各々めしてよせて、十方へ早馬みたてられたり。中將殿の秋月御下かう有、二月のすへ三月には御京のほりあるへし、今度の御京のほりはいかにも〳〵ちんしやう花やかたによをひ有へし、みくるしくてはかなふましとあいふれへしとの給へは、中將きこしめして、ふけんもあからぬ物にはふれへからす、都の供とていとなまん事いたわしさよとの給へは、いくらもなみいたるさふらい共うけ給りて、難有おふせかな、此上らふにあい奉らは、命もおしからしと申あいける。九日の大はんはたけへの五郎兵衛也。きこゑたる名馬三疋、きなるくらおき、とねり八人つゝにひかせ、大ほしのしかの百枚(皮脱か)、きんらん百たん、きらひやかにまいらせける。十日はくましろの太郎兵衛大はん也。うつくしきぬ百疋、なんりやう百兩、こすめとふ鳥といふ名馬貳疋にくらおきて、とねり十二人つゝにひかせて參らせけり。十一日はあねかさきの六郎、おくむさきの三ほん千反、こかね百兩、一おとり・一霞といふ名馬に白くらおき、とねりあまたにひ

かせまいらせけり。十二日はもと山の九郎にて、さうせんをつゝりて、數のたからをつみて、きこへる名馬に唐くらおきまいらせたり。十三日は傳内左衛門に、あま御前かはからいとらさせけり。何とそ心に入はやとおもへは、遠〳〵しくそ見へける、ほうらい山を作り、りやうら・きんしや白たち・白かたなからかわ・くまたかのは・きりう中くろにてめつらしか(こ)さりて、薄雲・白いと尾花あし毛といふひさうの名馬に、きなるくら置て、三疋ひかせて參りける。此ついてに御めにかゝらんと思ひて、かしこまる。中將御覽して、是はたそと尋給へは、大貳殿申されけるは、あま君の御いに傳内左衛門と申者にて候と申されけれは、中將聞召て、さしもおかしき事にいひつるに、かゝる事はおもひよらす、さためてあま御前の御はからいにて有らん、何事もあま御前にさしおきぬ、今度京のほりの用意にせよとて、おさめ給はす。さふらいとことはりと思ひて、きもにそみ、いよ〳〵あま君を有かたくそ思ひける。扨十四日の大はんは筑前のせんしきやうたい、百きの勢にて參る。したんのひわ一面、ちんの枕、三尺のたますたれ一けん、つくしのきぬ百疋、とねり十人つゝにひかせてまいらせ、兄弟しらすにかしこまる。中將御覽して仰けるは、ちんせいのおもしろきときこし召て、ゆかしさに下り給ふ、けふのいわゐおほしめすことにしたんのひ

わちやうほう也、かへす〱身勞也との給ひは、大武此よしおほせければ、筑前のせんし畏て、うゑの御下り今まてそんしまいらせ候はす、御はんなとをも勁申さす、御ふさた申事おそれ入候と申ければ、それはくるしからす、我らさへしらすと仰ける。十五日は筑前守の大はんにて、おやこ三人、貮百よきにて、今日はかりの御いわいとて下おとこ・さつしきまてもまいりけり。　ひさうの名馬、ふしなし・おきわたり・なわくゝり・とふとり・としかへりとて五疋、とねりおほくにひかせて、虎の皮五十枚つゝし、ゆみのちやうほん百五拾てう、きぬ百疋、梅の匂ひきぬ十二ひとへまいらせける。中將御覽して、かた〱こと〱しく、つけへきにあらねとも、ちんせいのさふらい共、御らんせんため也、けふのいわゐめてたし、殊にひさうの名馬とも、いわゐ入候、いなか下りのしるしに、天上人のいゑつとにすへし、かへす〱嬉しきとおふせられければ、大武此よし申ける。　筑後守承て、かしこまつて罷出ける。　傳内左衞門出あわせ、とをさふらいゑよひ入ける。　さる程にこくし、大武殿に仰けるは、けふの御いわゐに、何か御あそひして、中將の御舞に入候はんと仰ければ、熊坂新左衞門申けるは、春のはしめの御遊ひに、ゆみにすきたる事は候まし、御前近いさせ給へと申ければ、其儀しかるへし、大はんの子共廿より内にあらんにと仰ければ、さうへふれけり。

何れもうけ給て、これは大事の仰也、御所まとは大事、うゑ樣の御所て、いそんしては、弓取のまつ代のきすなるへしと、りやうしやう申かねける所に、あねか崎の六郎か子に、太郎とて、十六になりけるか申は、弓矢とりの家に生れて、ゆみいましきなとは、いまはしや、もより御所まとは、ならいてもあらはこそ、ふせいかゝりも入へけれ、唯いあてたらんをかちとすへし、いはつし候はんはちしやう也、よくても惡くても春のはしめの御悅也、はや〱御まとうけさせ給へ、かけにて百日・千日いたらんよりも、君の御まへにていゐならは、末代のめんほく是に過し、我とおもはん人々はいさせ給へとて、てうの丸のひたゝれに、こせいかうの大くち、しけとうの弓に、つま白のまと矢をとりそへて、大庭にかしこまる。　はや〱御まとかけ給へと申ければ、中將御覽して、姿有樣こそよからめ、心さへかうなる物かな、かれかおいたちなは、いかなる物ならんと御かん有ければ、父姉崎是を聞て、家の名を上る也、有かたさよ、我も〱と出立けり。　親たちはいかゝあるへきとて、手足をにきりてそ見へけり。　扨まとをかけさせ、道にはこんのぬのを敷、五葉松貮本立させ、うしろには水色のすしをかけたり。　さるほとに九國の大名、兩方にしかとゐたりけり。　見物の人々おしもわけす、いまた廿にたらぬ物共の、まへうしろをあらそひたるあり樣、中將御覽